
修羅の巫女 1 《霊鬼編》

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

修羅の巫女1《霊鬼編》

【Nコード】

N8454A

【作者名】

暁

【あらすじ】

全寮制の女子校にかよう天獅子小町は、学校での野試合の日々を送っていた。しかし小町の前に一人の奇妙な男性が現れる、その男性のせいで小町の人生は大きく狂った。『バイバイ小町ちゃん』それが意味する未来とは？

1：神と悪魔

I t a l y

血で染まった真っ赤な大地。
パズルのようにバラバラになった死体。
意識はあるが体の一部が無い人。

地獄絵図、そこに不相応な一人の女性。

真っ赤な髪の毛、血に染まったモノではない。

真っ赤な瞳、猫のように瞳孔は縦に割れている。

真っ赤な着物、朱に染められた着物の帯は白、そこには長い髭を生やし、長い髪の毛の古代ヨーロッパの初老の男性が刺繍されている。
真っ赤な長刀、その赤は血、切っ先から滴り落ちるも血。

2

対峙するは、赤黒いローブを着た人、フードを被っていて顔は確認出来ない。

分かる事は、この地獄絵図はこの人物によって描かれたモノ、得物は太剣クレイモア、そして、敵。

二人の男が片膝を付いた状態で女性の後ろに現れる、顔は下を向き、女性より下の階級だということが分かる。

「阿修羅様、あのお二人は？」
あすい

阿修羅と呼ばれたその女性は、意識は敵に、顔半面は後ろに向けた。

「ジャパンに、そして別々の場所に」

その言葉を聞くと同時に二人は消えた。

残されるは阿修羅と敵、阿修羅は刀を斜め下に構えると、目を瞑り集中した。

二人の間は静寂、そして一触即発、水が張ったコップのように、何か衝撃が加われれば始まる、張り詰めた空気が支配した。

しかしその衝撃は外部の者によって加えられた、阿修羅の隣に現れる一人の男、得物は十字槍、ブルージーンズに白いＴシャツというフナスタイル、右半分には阿修羅の帯と同じ刺繍、それが示すのは仲間。

「神徳は護法神・名は毘沙門天、只今参上！テメエがルシファーと見た」

「空気を詠みなさい」

毘沙門天の乱入により、空気は一気に冷めた。

「面白い、阿修羅に毘沙門天とは、我も幸福だ」

「不幸の間違いだろ？」

「どちらでも構わない、天竜の巫女の血、それだけが欲しい」

毘沙門天は頭の上で槍を構えた、阿修羅は切っ先を斜め下に向け、ルシファーは切っ先を後ろに向け半身になる。

この戦いが神と悪魔の最後の戦いになるハズだった、しかしいくつ

もの屍を踏み越えたこの不毛な戦いの序章にしかすぎなかった。

J a p a n

赤子を抱きながら歩くは阿修羅あすらの部下の男、しかし命は尽きかけていた、意識が朦朧とする中歩く、腰は折れ、膝を付き、赤子を投げ出して倒れ、命が尽きた。

男が動かなくなると赤子は大きな声で泣き出す、その瞬間、男の死体は光り始め、水のように溶けると、赤子の手首に巻き付き、腕輪と化した。

もう一人の男も赤子を持ち歩いている、この男も同じように倒れ、命が消えた。

倒れた男に赤子、通りかかった人は慌てて助けを求めた。

「誰か！救急車を呼べ！外人と赤ん坊が倒れてるぞ！」

男は日本人ではない、それは一目で分かる、しかし赤子は日本人に限りなく近い顔立ち、異様な光景である。

神に愛された赤子、悪魔を愛した赤子、この二人が世界を再び朱に染める。

1：神と悪魔（後書き）

新連載始まりました、『修羅の巫女』は続編モノです、最初は《靈鬼編》、もし良かったらコメントや評価、アドバイス等を頂けると光景です。

2：興味

16年後

J a p a n G i r l s ' h i g h s c h o o l

「あまじしこまち天獅子小町、いざ勝負！」

場所は廊下、敵は空手の胴着にベリーショートの髪の毛、得物は拳。対峙するは天獅子小町、真っ黒な腰まで届く髪の毛、Yシャツのボタンを第三ボタンまで開け、短い灰色のスカートの下にはスパッツ、得物はこちらも拳、しかし戦意はゼロ。

「辞めませんか、木野先輩」

「うるさい、いざ勝負！」

空手部の主将こと木野は小町の言う事など無視して正拳突きを放つ、小町は首を左右に傾げるだけで軽々と避ける。

木野は何発もの攻撃を繰り出すが、かすりもしない、腰に巻くは黒帯、それが示すは絶対的な力、そしてそれを上回る小町の身体能力。小町は正拳突きを手でいなすと、ミドルキックで木野を一撃で仕留める。

「はあ、また保健室か」

小町は肩に木野を担ぐと保健室に向かう、ココは3階、突き当たりにある階段を一番下、1階まで降り渡り廊下を通る、突き当たるは体育館、体育館の隣は剣道場。

そこに佇むセミロングの少女、袴に胴着、胴と垂と小手を付け、面

はつけていない、得物は竹刀、その手に持つもう一本の竹刀を小町の前に投げる。

「小町さん、今日こそは勝たせてもらいます」

「はあ、またですか、柳井先輩？」

小町は体育館の横に木野を座らせ、地面に転がる得物を手にする、敵は剣道部大将柳井、柳井は正眼に構え、小町は切っ先を斜め下に向けて背筋を伸ばす、凜と立つその様は不動の真理、小町は動かずに相手の攻撃を待つ。

「面！！！」

柳井の面を体を横に動かし避ける、すれ違い様に胴を打ち抜き再び構えなおす、勝敗は歴然、しかし引き下がらないのが柳井。再び面を打とうとした柳井の竹刀を弾き、体を一回転させて背後に周りこみ、後頭部を打ち抜き気絶させる。

「はあ、増えた」

木野を肩に担ぎ柳井と竹刀を脇に抱えて保健室に向かう、体育館から保健室は約5m、眼前に広がるゴール。

小町は足で保健室の扉を開け、慣れた手付きでベッドに二人を放る。疲れたとソファーに座り対峙するは保健室の先生、妖しい美貌とほだけた胸、ミニスカートはが更に妖しさを増す、得物は色気。

しかしココは生粋の女子高、男子禁制の教員から清掃員にいたるまで女性、色気はただの趣味、女色がいるのも女子高、保健室の先生と小町は絶好の相手。

「また喧嘩？」

「違います、一方的な果たし状を半強制的に執行されてるだけです」
「小町ちゃんは運動神経が良いからねえ、それに……………」

先生は立ち上がり小町の隣に座る、手の平で小町の顔を舐め回すように触り、顎を掴み顔を自分に向けた、相手が男ならば手の平で踊っているだろう。

「物凄く可愛い、食べちゃいたいくらい」

「はあ、私はノーマルです」

「でも男を知らないんでしょ？16歳になってもキスもしたことない女の子なんてダサいわよ」

先生は小町の組んでる足を跨ぎ、上から見下ろす、小町ソファーに背を預け先生を見上げ、クール、悪く言えば冷めた目で見る。

「興味がないんです」

「つまらないわね」

先生は前髪を持ち上げ、小町の額に軽く唇を当てた、小町は顔色一つ変えずに先生を下ろし、保健室を後にした。

一年の小町は女色の強いお嬢様学校のこの燈泉女子学園高等部（セン女）で既知的になっていた、スポーツ万能でクールな風貌、お嬢様達には男よりも興味を奪われる、そして強いが故に闘技系の部活からの野試合がたえない。

しかし小町は女も男も闘技も興味が無い、今までに興味を持ったモノなど皆無に等しい、所属している陸上部は体を動かすのが目的。セン女は山を切り開いた土地に作った女子高、初等部から高等部、グラウンドや競技場、寮やコンビニに至る全てが一つの敷地に納められる、故に皆初等部の頃から男に触れる機会が無く、男と話した

事すらない生徒が大半を占める。
プライベートは全てが自由なのだが、彼氏持ちというのはほんの一握りの生徒だけ。

小町は部活が終わると一人の同級生に呼び止められた、真つ黒な髪の毛のポニーテール、制服は小町よりちゃんと着ているが今時の服装である。

「小町、これから街に行かない？」

「何しに？」

「ちよつと買い物」

「まあ良いわよ」

小町の心許せる数少ない親友の志穂、小町の事を友達として見てる数少ない人物である、他の人間は憧れや好意の眼差しで見ると、小町はそれがたまらなく嫌だった。

セン女の生徒が遊ぶ時は電車に乗って遊びに行く、小町と志穂も例外ではない。

セン女の生徒は他校の生徒の憧れの的である、電車に乗っていても男性の視線が突き刺さる、二人はそんな事にも慣れ、全く気にしていない。

「小町って養子だったよね？」

「うん、小さい頃道に捨てられていたのを孤児院に引き取られて、今の親に養子として迎えられた。」

今の親は子供が出来ないから世間を気にしてなんだけどね、厄介払いに全寮制のセン女に入れられたって訳」

小町は育ててくれた両親に感謝はしても、尊敬はしていなかった、生きさせてもらっているだけでそれ以上でも以下でもない、その事を引け目に感じた事も無かった。

「健気ねえ」

「そうでもないわよ」

「何かしんみりしちゃった！着いたから行くよ！」

志穂は小町の手を引いて電車を降りようとした、しかし志穂が掴んでいるのは小町の手だけ、小町の手には志穂の手と二人分のバッグが掴まれていた。

街に行くとき徐々に学生が集まり、活気を帯てきた、その中でも二人の容姿は人の目をひく。

志穂は誰もが認める美人顔、アイドルのような笑顔が周りの目をひく。

小町は真っ黒な長い髪の毛が凛々しさを際立たせる、ラフな制服とスパッツがボーイッシュさを加える。

二人は服等を見て回っていた。

「ねえ小町、これ可愛くない？」

「似合ってるわね」

「小町も似合うんじゃない？」

志穂は自分に合わせてた服を小町に合わせてみた、志穂はそれを見

るとはしゃいで喜んだ。

「小町可愛いよ!」

「私はいいよ」

「何で？小町も女の子っぽい服装すればもっと可愛くなるよ」

小町は‘も’というのが引つ掛かったが、あえてツツコミはしなかった、志穂が自分の事を可愛いと自覚してるのは、小町も知っていたからだ。

「何で可愛くしないの？」

「他が騒ぐし私の趣味じゃないから」

「ええ、つまんない」

「はあ、私は志穂の着せ替え人形じゃないのよ」

「へへへ、すみません」

志穂は頭を掻きながら舌を少し出す、そのまま志穂は手に持っていた服と一緒にレジに向かった。

志穂と小町は人通りが少ない道を歩いている、これから志穂はバイトで帰り道と被らせるために、あえて人通りの少ない道を選んだ。二人は楽しそうに話していると止まる小町、そして電柱を見る、その表情を見て志穂は小町の後ろに隠れた、志穂には電柱しか見えないが小町が見ているモノが何かは知っている。

「小町、いるの？」

「子供、泣いてる」

小町には霊がハッキリと見える特異体質、この事を知っているのは

志穂ただ一人。

小町には何も出来ないのその場から立ち去ろうとした。

その時、小町の向かう先には白いロングコートを来た男性、右の裾には長い口を覆う髭を生やし、パーマのかかった長い髪の毛の中世以前の初老の男性の刺繍、長い髪の毛に冷たい瞳。

その男性は見た途端、小町は動けなくなった、男性は二人を無視して霊の前に立つ、志穂は何ともなく小町にずっとしがみついている。男性は袖を捲るとそこからは不気味な腕輪が現れた、その腕輪の中心にある赤い宝石のようなモノに触れる、その瞬間銀色の液体のようなモノが現れ、得物と化す、得物は大剣。

大剣が現れたのと同時に霊は歪な形をした化け物と化した、小町はあまりの光景に指一本も動かない。

男性は大剣を構える事もせずに一瞬で化け物を切り裂く、化け物は血を吹き出して消えた、男性の大剣も同時に消え、何事も無かったかのように歩き去った。

小町は緊張の糸が切れ、その場に座り込んだ。

「小町！どうしたの！？」

「志穂は今の人見てなかったの？」

「人？誰もいなかったよ」

小町は人と霊の区別は出来る、今の男性は確かに人間だ、しかし何故か志穂には見えない、小町は男性に興味を抱いた。

「志穂ゴメン、私用事思い出した」

「あつ、小町！」

小町は志穂を置いて走り出した、男性を追いに、方向は分かる、それにあれだけ派手な服は他にいない。

小町は大通りに出ると小町は一発で白いコートの男性を見つけた、異様な光景だが誰も振り向かない、肩が強く当たっても何も言わない、小町はその光景に疑問と興味を抱いた。
小町はバレないように自然を装い後ろを付けた。

「（はあ、私ストーリーカーみたい）」

小町は自分が悲しくなった、しかし始めて他人に感じた興味、それを封じる事ができなかった。

男性は駅に入っていく、しかし男性は改札に切符を通さず、駅員の横を普通に素通りした、小町は駅員がよそ見していたのと判断して一番安い切符を買って男性を追い掛けた。

駅のホームは禁煙なのに男性はタバコを吸っている、駅員は見えて見ぬふり。

「（おかしい、この人絶対におかしい、服装も周りの反応も。もしかして私ってヤバい事に首突っ込んでる？）」

小町は必死に目の前の光景を理解しようとしたが可能性が思い浮かばない。

電車が来ると男性はタバコを吸ったまま電車に乗り込んだ、男性はボックスに一人で座り、前の席に足を置いた、小町はボックスの隣の二人がけの席に座って、男性の行動を観察する。

「（非常識な人、でも不思議な人）」

暫く観察していると頭をつけていたボックスの背持たれに強い衝撃が加わった、小町は頭を付けていたために、頭に痛みが襲う、男性は足を置いてる側の背持たれを蹴った

『おい！女』

「（英語？もしかして日系とか？）」

『英語しゃべれねえのかよ、こっちはこれしか知らねえのに』

『喋れるわよ』

セン女では英会話に力をいれているので、小町は英語が話せた、外国人教師にネイティブに近いと言われたくらいだ。

男性は小町の前に立ち、壁に手を付けて覆い被さるように見下した、小町は見上げる、冷たい二人の目が睨みあう。

「これやるから着いて来い」

男性はポケットからネックレスを取り出した、そのネックレスを小町が持った瞬間、ネックレスが強く光り液体のようになって小町の手首に巻き付き、腕輪と化した。

「やっぱりな」

「やっぱりって何よ！？何なのコレ！取れない」

小町は腕輪を必死に外そうとするがビクともしない、そしてこの腕輪、男性の腕輪と同じモノ。

「とりあえず来い」

「えっ？あつ！ちよつと！」

男性は無理矢理小町の手を引っ張り電車を降りた、小町の手を引く男性は再び改札を通らずに駅員の隣を通る、その時小町は駅員と目が合ったように思えたが、何故か見られていないように思えた。

男性はひたすら小町の手を引いて歩いている、何が目的なのか、何がしたいのか小町には理解出来なかった。

「ちよつと！貴方誰なの！？」

小町は無理矢理手を振りほどいて、その場に立ち止まった、感情を表に出さない小町が怒る事など皆無に等しい。

「神徳は護法神・名は帝釈天、これで満足か？」
「護法神？帝釈天？」

小町には男性もとい帝釈天が言ってる事が理解出来なかった、そして小町の中で帝釈天は痛い人の部類に入っただのは言うまでもない。

帝釈天は山の中に入ると立ち止まった、小町にも立ち止まった理由が理解出来る、そこには男性の霊がいる。

「見えるな？」

「見えるわよ」

「コイツらは武器を向ければ本性を現す」

「武器？」

「得物の事だ」

「はあ、そうじゃなくて」

「見てろ」

帝釈天は腕輪の宝石に手を当てた、その瞬間、腕輪からは銀色の液体が現れ得物、大剣と化す、そしてその瞬間霊が化け物と化した。

小町は先ほどと同じ光景に後退りして、身構える。

「何コレ!？」

「ダークロードの一種だ、これは霊の部類、見れば分かるな」

「分かる訳ないでしょ!早く倒してよ!」

「頼んだぞ」

帝釈天は手を上げて立ち去る、帝釈天の進む先には丸く黒い大きな穴が生まれ、その中に入って行つた。

化け物は敵を小町に定める、得物は大きな爪、身体能力その他は未知数。

化け物は手を大きく振り上げ、爪を剥き出しにして小町に振り下ろす、小町は何とか震える体を動かして避けた。

「(何よコレ、任したつて無理に決まってる…………、ちょっと待つて、この腕輪、帝釈天とか言う奴のと同じ、ていうことは私もあのデッカイ剣が使えるの?ダメ元ね、やってみるだけの価値はあるわ)」

小町は腕輪の宝石に手を当てた、何か武器になること願つて。

2：興味（後書き）

遂に本編が始まりました、主人公の小町がこれからどうなっていくのか？楽しみにしてて下さい。

それとコメントを下さりありがとうございます、まだまだ評価など待ってますので皆さんよろしくお願いします。

3：ホーリナー

Japan Mountain path

小町は腕輪の宝石に触れる、帝釈天と同じように銀色の液体が現れた、細くて長く変形し得物と化す、得物は長刀、小町の背よりも長い長刀。

小町は驚き長刀を見回す、何故か手にしっくりとくる、昔から使いこんだような握り心地、腕のように使い易い。

小町は切っ先を斜め下に向け背筋を伸ばし凜と立つ、目を閉じて全てを目の前の化け物に集中する。

地面を蹴る音を聞き小町は目を見開く、化け物は振り上げた爪を小町に向かって振り下ろす、小町は頭上で爪を防ぎ弾こうとした、しかし爪はあっさりと切れ、大きな弧を描き切っ先が斜め上を向いた時、化け物の肩口から脇腹にかけて長刀を振り抜く。

化け物のは綺麗に斬れ、血を吹き出して消えた、残ったのは小町と手に持った得物のみ。

「何コレ、刀？」

小町は長刀を目の前に掲げて眺めた、小町は目の前の化け物を軽々と斬ったその刀を、見た目よりも軽く、切味は異常なモノ。

小町が呆気にとられていると後ろから足音と話声が聞こえた。

「緊那羅、この辺だよな？」

「はい、最後に信号が消えたのは……………、そこにいるのは誰!？」

「（はあ、また英語?）」

小町は後ろの女性、緊那羅きんならの声に肩をすくめた、長刀を持った小町も異常だが、先ほどの変な名前、帝釈天たいしゃくてんや緊那羅きんならも十分異常である。

「はあ、また変な名前」

「新入りか？名前は？所属の隊は？」

「名前は天獅子小町、それ以外は正しい答えが思い浮かばない」

「一般人！？貴方、ホーリナーじゃないの？」

「ホーリナー？」

小町は異様な名前の数々に頭の整理がつかないでいた、難しい人の名前、ホーリナーなる者、新入りや隊、小町にはそれが変な団体という事しか分からなかった。

「もしかして新しいホーリナーじゃないのか？」

「そうかもね」

「貴方達で納得しないで、私に分かるように会話して」

小町は今の状況に着いていくので精一杯だった、目の前に化け物が現れ、武器を持ち化け物を斬った、何故自分がそのような状況に陥ったのか、それが知りたかった。

「俺達は《Vatican churchman subjugation organization》、日本語に直訳すると《バチカン聖職者討伐団》、俺達は《VCSO》って呼んでる、神父やら牧師やら神主がいるだろ、その武闘派集団だ、《VCSO》は一国に一支部ある、俺達は日本支部員。

俺達の目的は人間界にさ迷う、……日本では霊や鬼、妖怪とかの化け物等を文字通り討伐するのが目的だ、化け物は総称して《ダークロード》って呼んでる、外国だと龍とかその他亜人、精霊なんかも

場合によってはダークロードだな。

次はホーリナーについてだ、ホーリナーってのはこの腕輪、正確には《ディアンギットの腕輪》に選ばれし者、つまり神に選ばれた者の総称だ、例外はあるがな、この腕輪を着けている以上《VCSO》の加入が絶対だ、拒否した場合は強行手段をとらせてもらう。

最後に自己紹介だ、俺は迦楼羅^{かるら}、コイツは緊那羅^{きんなら}・神徳は音楽神、小町ちゃんだっけ？君の‘天獅子小町’って名前は今日で捨ててもらうから、その事はまた本部で、本部って言っても俺達が‘本部’って呼んでるのは正式には日本支部なんだけどね。

じゃあ質問や要望、コメントから愛の告白まで何でも聞いちゃうよ」

真面目な顔で説明していた迦楼羅^{かるら}が、一瞬でおちゃらけモードに入した、小町はそれをシカトして今までの話を整理する。

「VCSOはバチカンが本部なの？」

「そう、表向きはキリスト教だけど、神の総本山みたいな感じだね、親分はローマ法王ね」

バチカンはキリスト教で有名な場所だが、裏ではこんな武闘派集団が構えている、小町は今ので余計に頭がパンクに近付いた、恐らく今までの教養を全て無くしてから聞かないと頭には入らないだろう。

「霊まで殺す理由は？お坊さんとかに任せれば良いじゃない、それに49日とかお盆とかいう可能性もあるじゃない」

「それは宗教的価値観だろ、49日もお盆も仏教だろ、天国も地獄もありやしない、だから人間界にいるのは全てがダークロードと判断する。

お経や塩、聖水とかその他諸々は一応効果はある、でも人間にとっての公害みたいなもんだ、嫌がるだけで殺せはしない、希に人間が襲われる事もある、最終的に処理するのは俺達ホーリナーだ」

小町は今までの常識を捨て去り、やっと迦楼羅かるらの言う事が頭に入るようになった、しかし頭が痛くなるような内容に変わり無い。

3人は小町を日本支部に送るついでに小町の質問に答える事にした、日本支部は京都にある、他の国もその国の宗教の中心地にあることが多い。

移動手段は車、異常な速度で走る車に小町は不安を感じていた、法定速度を軽々越している、警察に捕まる事が不安だった。

「警察になら捕まらないよ」

「えっ？」

「俺達は神に限りなく近い存在だ、そんな人間の記憶にいちいち残る事してたら今頃宗教は潰れてる、この腕輪を着けている限り記憶には残らない、便利なもんだろ？」

「悲しい、友達も親も全てを失うって事でしょ？」

「みんな辛い、私も記憶があるだけ最初は辛かった、迦楼羅かるらは記憶は無いがな」

小町は驚いて運転席に座る迦楼羅かるらを見た、迦楼羅かるらの顔はいたって普通、後ろの座席で女らしからぬ格好で寝転がる緊那羅きんならも普通だ。

「さっき言っただろ、入団しないなら強行手段で連れていくって、記憶を消して人生をリセットするんだ、多分俺は入団を拒んだんだろうな」

「でも、そっちの方が楽そうね」

「そうでもないわよ、記憶の消し方は脳の細胞を封印するの、だから短命になるし戦闘能力も下がる、だから迦楼羅かるらは私より弱い」

小町は複雑な心境だった、コレからなるであろう先程のような戦いの毎日、その世界に興味を抱けたが、前の生活にも未練がある、それなら記憶を無くした方が楽かもしれないということ。

「記憶が無いのは辛いぞ、俺の知ってる世界はこの生き死にの世界だけだ、他を知らない、有って邪魔になるようなモノじゃないよ、記憶ってのは」

「分かったわ」

小町は今も過去も背負う事に決めた、迦楼羅^{かるら}の顔がとても悲しい顔をしてたからだ、こちらの世界に興味があるのなら未練もいつかは無くなる、その時まで我慢した方が楽だろう。

「じゃあ質問に移るわよ、この腕輪は何？」

「この腕輪は俺達の武器でありホーリナーの証、コレは腕を切っても離れないからな、これから出てくる武器は無限物質だ」

「無限物質？」

「そう、人間界のモノは全てが有限物質だ、髪の毛や傷などが回復するのは他のモノをその形に変えてるだけ。

でもこれは違う、折れたら再生する、武器によっては一度にいくつも出せるのもある、普通は一度に一つの武器だけだな。

それにこの腕輪は絶対に壊れない、ディアンギットっていう神様の片割れらしが、本当かどうかは分からないけどね、それに俺達の武器も人間界のモノでは破壊出来ない、ディアンギットの鉄はディアンギットの鉄でしか壊せない」

長い話で緊那羅^{きんなら}は既に寝ている、もう夜も遅い、小町は寮に電話を入れようとしたが自分の存在が消えた事を思い出し、悲しみが押し寄せた、志穂も小町の事を覚えていない、その代わりに隣にいる迦^か

楼羅なる男性と、後ろで寝ている緊那羅きんならという女性、この二人が仲間。

「じゃあこの刺繍は？」

小町は迦楼羅かるらの真つ白なTシャツの右側にある黒い刺繍を指差した、長いパーマの髪の毛に、口を覆う長いヒゲ、中世ヨーロッパの初老の男性、恐らくこれも神の一種だろう、帝釈天たいしゃくてんのコートにも同じモノがあった。

「このおっさんはカミウムマーン、神様の中の神様みたいなもんかな、俺達のお父さんとかそこらへんじゃない？
白い身に付けるモノにこの刺繍を入れるのが決まり、小町ちゃんも本部に行ったら希望聞かれるよ、今から決めときな」

迦楼羅かるらはミディアムの髪の毛に、真つ白なTシャツの右側に刺繍、黒いジーンズというラフなスタイル。

一方緊那羅きんならは、和風のポニーテール、真つ白な道着の肩から袖にかけて刺繍、紺色の袴という和風の風貌、小町は自分の動きやすい格好と、自分の好きな格好を考えていた。

そして先程から気になっていた事、帝釈天たいしゃくてんと緊那羅きんならが名乗る前に言ったあれ。

「神徳って何？」

「神徳はその神が何の神かってこと、例えばアフロディーテとかは愛の神様だろ。」

神徳がある奴は比較的に強いつてもあるし、ちなみに俺は無いけどね。

では問題、アヌビスは何の神様だ？」

「死神？」

「正解！何となく分かったでしょ？」

「死神までもホーリナーなんですか？」

「死神って言うてもいろいろあるしね、‘死’そのものを司る神や、‘死’を操る神、ワルキューレっていう女神も死神の部類に入るし」

小町は何となく楽しくなってきた、自分が足をつっ込んだ世界は愛や音楽など綺麗なモノを司っていると考えると。

「緊那羅は音楽神、帝釈天は護法神みたいな感じか、私はなんだろ？」

「帝釈天の事知ってるのか！？」

「うん、私にこの腕輪になる前のネックレスをくれた人、何か黒い穴に消えて行ったけど」

「黒い穴！？ちとヤバめだな」

迦楼羅は携帯を取り出した、電話をかけると真剣な顔で話あっている、小町は自分が大変な事を行った事を理解出来た。

迦楼羅は携帯を閉じると後ろの緊那羅に投げつけた、緊那羅は明らかに怒っているが、迦楼羅は無視して話だした。

「帝釈天が悪魔に堕ちた」

「やっぱり」

「帝釈天が悪魔って何？あの人は腕輪着けてからホーリナーじゃないの？それに人なのに悪魔？」

「まだ説明してないのか？」

迦楼羅は苦笑いを浮かべながら謝った、不機嫌な緊那羅は背を預けながら小町を呼んだ。

「悪魔ってのは神に愛された私達みたいな奴が神を裏切ると悪魔に

なる、外見的には変わらないけど私達の敵だ。

厄介な奴が裏切ったな、帝釈天は日本支部で最強だ、たいしゃくてん《神選10階

《っていうホーリナー最強の10人にも呼ばれた化け物、それが悪魔に堕ちたって事は」

「最悪の場合16年前の二の舞いだな」

小町はこれ以上首を突っ込まない事にした、まだ新人の自分には関係ない事、そう思っていた、日本支部に着くまでは。

3：ホーリナー（後書き）

やっと本題に入って来ました、今回はこの作品を読むタメの予備知識みたいなモノです。

評価やコメントを頂けるとありがたいです、どうぞこれからも修羅の巫女をよろしく願います。

4：阿修羅

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

小町が連れて来られたのは、山の中にあるコンクリートというよりは石で出来た塔、いかにも怪しいが、この山に普通の人間は近付かない、これも神の力の一種だ。

中もゴツゴツとした感じで、一階には受け付けのような場所とエレベーターの乗り口しかない、エレベーターは剥き出しになっていて遺跡のような印象だ。

エレベーターに乗り最高層に行くと、そこだけは一つの層がまるまる部屋になっている、エレベーターを降りるとすぐに階段があり、10段ほど登るとカーペットがひかれたお偉いさんの会議室みたいになっている、一番奥には大きなデスクに大きな椅子、反対側を向いていて顔は見えない。

「ボス、新入り連れてきたよ」

「ボス？」

「ああ、正確には日本支部長の金色孔雀こんじきくじゃくって名前んだけど、本人がボスって呼べだつて」

ボスこと金色孔雀こんじきくじゃくは椅子を180度回転させて小町を睨んだ、襟が
高い白いコートの襟に刺繍、逆立った銀色の髪の毛に銀のフレーム
の眼鏡。

金色孔雀は小町を自分の元に呼んだ、デスクの目の前まで来た固まった小町の前に、デスクの上に立ちしゃがむと同時に顔を近付け睨んだ、この時点で小町の金色孔雀こんじきくじゃくの印象は、怖い人。

「迦楼羅^{かるら}」

「はい？」

「この娘メチャメチャ可愛い！俺気に入った！」

金色孔雀^{こんじきくじやく}はデスクの上にしゃがんだまま小町を抱き締めた、小町は状況が理解出来ずにただ呆然とするのみ。

「あつ、緊那羅^{きんなら}、君も可愛いよ」

「うるさい、女つたらし」

「酷いなあ、小町ちゃんだっけ？バイバイ小町ちゃん」

「えっ？」

小町は今の金色孔雀^{こんじきくじやく}の一言が理解出来なかった、強制入団なのに、
「バイバイ」は矛盾である。

「バイバイって何ですか？」

「小町ちゃん」とはお別れ、今日から神様の名前を名乗ってもら
うから」

金色孔雀^{こんじきくじやく}はデスクの上のボタンを押すと部屋全体が暗くなった、そ
してモニターが降りてきてモニターが光りだす。

映ったのは金髪オールバックで金色孔雀^{こんじきくじやく}と同じコートを着た外国人
男性だった、チーズケーキを頬張ったまま椅子に座りひょうきんな
顔でモニターに映る。

「はあ、迦楼羅^{かるら}、VCSOにはこんなのしかないの？」

「奇人変人の集まりだな、俺達見れば分かるだろ？」

「私を貴様と一緒にするな」

緊那羅^{きんなら}は迦楼羅^{かるら}の頭を思いつき叩いた、いや、殴った、迦楼羅^{かるら}は

部屋の隅で頭を抱えて悶絶している。

「久しぶり！」

「金色孔雀こんじきくじやうくって事は日本か」

「カミウムマーン使える？」

「大丈夫だ、新入りか？」

「そう、この娘。可愛いでしょ」

こんじきくじやうく

金色孔雀は小町を前に出した、画面に映った外国人男性は画面いっぱい顔に顔を近付ける、チーズケーキを食べるクチャクチャという音が大量で聞こえ、小町はため息を一つついた。

「金色孔雀こんじきくじやうく」

「何？」

「コイツ超可愛い！神選10階に欲しい！」

「ダメエ！この娘は日本支部に置いとくのお！」

二人の男性はクネクネと奇妙な動きをしながら小町を取り合っている、小町は頭が痛くなり、緊那羅きんならに助けを求めたがスルーされた。

「じゃあ診断するから頼んだよ」

「了解了解！じゃあココに得物を解放して乗って」

小町は丸い板のような乗り腕輪の宝石に触れた、長刀が現れそれを握る。

「じゃあ行くよお！」

「キャッ！何これ？」

小町の足元が光り始め、全身を光りが包みこんだ。

暫くの間光り続けると光りは治まり小町は開放された、小町は板から降りるとモニターでは男性がパソコンで何かをしている。

「金色孔雀、帝釈天といい、もしかしたら大変な事が起こるかもな」
「何何？どんな名前？」

モニターの男性はパソコンのキーボードを押すと、画面に文字が現れた。

《戦闘神・阿修羅・夜叉丸》

小町以外の全員が驚いた、あのおちゃらけていた金色孔雀までも陰しい表情をしている、迦楼羅は苦笑いを浮かべ、緊那羅は呆れた表情だ。

「もしかして阿修羅？」
「いや、発音が違う阿修羅だ」
「それに夜叉丸って、こんな事あり？」
「ちよつと、私に説明してよ」

モニターの男性が近付いてきた、チーズケーキは置いて、本日一番の真剣な顔だ。

「君の名前は今日から阿修羅だ、神徳は戦闘神、そして得物の名前は夜叉丸。
これは16年前に起きた事件に登場するメインキャラクターにそっくりなんだ」
「事件？」
「それは俺が話とくよ、バイバイ」

金色孔雀はモニターを切って部屋を明るくした、そして金色孔雀椅子に座り、両肘をデスクにつき手を合わせて顎を置いた。

「16年前、悪魔と神の大きな戦争が起きた、その戦争で悪魔は尽きたが神選10階は壊滅的打撃を受けた、VCSO史上最悪の戦いだ。

その時の戦争の引金となったのが《天竜の巫女・阿修羅》だ、目的は分からないが悪魔は阿修羅を求めた、天竜の巫女の情報は何も残っていないので詳しい事は分からないがな。

そしてその阿修羅の得物の名前は《夜叉光》、長刀だ、君に全てがそっくりなんだよ」

小町もとい阿修羅は絶句した、本人も少なからず分かっていて、これが意味するのはただ事ではない、自分が何か大きな流れに巻き込まれている事が分かった。

「でも私は何も知らない、天竜なんかも聞いた事がない、タダの偶然でしょ？」

「そうだと良いね」

金色孔雀はスキップしながら阿修羅を見回した、その光景は実に邪魔。

「あのモニターの人は誰ですか？それとカミウムマンって神様の名前ですよね？」

「あの人は通称《元帥》VCSOの最高指令官、そして名前は《カミウムマン》、カミウムマンは最高指令官の名前でもあり、さつきの神を識別するマシンの名前でもある、みんなあの人のことは元帥、識別機の事をカミウムマンって使いわけてるけどね」

阿修羅^{あしゅら}はココが徐々に軍隊に思えてきた、元帥に指令官、完璧に軍隊用語である。

「阿修羅^{あしゅら}か、ボス、帝釈天^{たいしゃくてん}がいなくなつたから阿修羅^{あしゅら}は俺達の隊だろ？」

「そうだね、迦楼羅^{かるら}が隊長で良いでしょ？」

「私は隊長向きではない」

阿修羅^{あしゅら}は迦楼羅^{かるら}と同じ隊、毎日この3人で一緒にダークロードと戦う事に、阿修羅^{あしゅら}は完全に抜けられなくなった。

「迦楼羅^{かるら}、まだまだ先の事だ、私達はまだ二人だけだ」

「どういう事？試験でもあるの？」

「違つよ、阿修羅^{あしゅら}にはこれから修行をしてもらう、進み具合にもよるけど大体3ヶ月、霊とみっちり戦ってもらうよ」

阿修羅^{あしゅら}は練習や努力、そういう地道なモノが大っ嫌いだつた、実戦あるのみ主義の阿修羅^{あしゅら}には苦痛な3ヶ月が約束された瞬間だ。

「でも霊と戦うのと実戦に出るのは変わらないんじゃない？どうせ外に出るんでしょ？」

「いや、この下に道場があつてそこに貯めてるよ、戦う時は一匹ずつだけだね」

阿修羅^{あしゅら}は地獄への階段を登り始めた、密閉空間で体を動かすのが嫌いな阿修羅^{あしゅら}は、開放感が無いとノイローゼになる。

しかし、日本支部のホーリナーは戦闘神の力を思い知る事になる。

4：阿修羅（後書き）

『バイバイ小町ちゃん』の理由が分かって頂けたでしょうか？『よ
うこそ阿修羅』^{あしゅら}みたいな感じですね、今後は阿修羅^{あしゅら}で話が進みます。
評価、コメントなどを頂けると感謝です、作者の励みとなりバネと
なるのでお願いします。

5：双子

1ヶ月後

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

真っ白なYシャツの袖を3回折り七分にし、第3ボタンまで開けている、それに合わせて白いカミウムマーンの刺繍が入ったネクタイ、黒い制服のスカートの下にスパッツ、それが阿修羅^{あしゅら}の団服。

本人曰く『制服ほど動き易く様になるモノはない』らしい。

阿修羅^{あしゅら}は道場に籠っていた、得物は夜叉丸、石に囲まれた広さだけが取り柄の部屋。

対峙するは霊、得物は鋭い爪、形だけが人間で風貌はお世辞にも人間とは言えない。

阿修羅^{あしゅら}はイライラしていた、毎日毎日ほとんどの時間をココで過ごし、詰まらない相手とひたすら戦わされる、何度も金色孔雀^{こんじきくじゃく}に不満をぶつけたがノラリクラリと流される。

その金色孔雀^{こんじきくじゃく}は上から窓越しに眺めている、端から見たら阿修羅^{あしゅら}はモルモット。

「阿修羅^{あしゅら}、あと20体で終わりだよ、頑張れ」

「はあ、全部いっぺんに出して、多少は運動になるでしょ」

「大丈夫？下手な鉄砲数撃ちや当たるっていう」

「うるさいわね、私がそうしろって言うてるの、言われた通りにして」

「ハイハイ、戦闘神の神徳は伊達じゃないですねえ」

金色孔雀^{こんじきくじゃく}がボタンを押すと20体の霊が現れた、その光景に動じる事無く、むしろ口角を上げて喜んでいるようにも思える。

阿修羅^{あしゅら}は背筋を伸ばして凜と立つ、切っ先は斜め下、目を瞑り全神経を戦闘に注ぐ。

5体の霊が爪を振り上げ飛びかかってくる、阿修羅^{あしゅら}はギリギリまで引き付け、自分の間合いに入った瞬間体を一回転させて一刀で5体を斬った。

目の前から走ってきた霊は突き刺し、後ろから来た霊は逆手に刀を持ち変え、そのまま脇を通して突き刺した、横から来た霊は持ち変えるのと同時に斬り、反対側の霊はその遠心力を殺さずに斬った。残る霊は11体、9体倒した今でも汗一つかいていない、阿修羅^{あしゅら}の中ではこれは運動にもならない、それが阿修羅^{あしゅら}の機嫌を損ねている。

「一体ずつ来ないで全員で来なさい、じゃないと私がつまらない」「怖いねえ阿修羅^{あしゅら}、戦うのは悪い事じゃないけどハマり過ぎちゃダメだよ」

「はあ、違う、私は運動したいだけ、コイツらその欲求すら満たせない、欲求を満たす事の何が悪い？」

「まあいいや、それなら全員で行くよ、頑張つてね」

何か超音波のようなモノが発せられると霊が一斉に襲いかかってきた、阿修羅^{あしゅら}は口角を上げて前に走る、一回で3体を斬りそのまま踵を返した、それと同時に2体を斬り残りは6体。

阿修羅^{あしゅら}が半身になり突くと2体を貫き、そのまま横に振ると1体を巻き込んだ。

霊が爪を剥き出しにして振り上げようとしたとき、胴の位置で受け止めると、そのまま強引に切り裂き回転と共に残りの2体も斬った。

「凄い凄い、修羅とよく言っただけだね」

「はあ、誉めるならもう少し手応えのある奴を連れて来なさい」

「それでもステージ3なんだけどな、でもコレだけは知ってて、ステージ4から全く別世界、正直強いよ」

阿修羅は多少興奮している、強い者を求める興奮よりも更に体を動かせる楽しみ、それが周りからは戦い好きに間違われてる。

「霊の最強は？」

「ステージ5、日本でコイツを倒せるのは緊那羅と毘楼勒叉毘楼博叉ペアくらいかな、それくらい強い、神選10階になる条件の一つになるくらいだからね」

阿修羅は軽く汗を拭くと道場を出ようとエレベーターに乗ろうとした、しかしエレベーターは使われていて下から上がってくる、阿修羅はそれを待っているとエレベーターには既に人が乗っていた。

「なんだ、阿修羅か」

「阿修羅だ、毘楼勒叉、阿修羅がいるよ」

「うるせえな、黙れ毘楼博叉」

毘楼博叉と毘楼博叉は双子である、顔は全く同じなんだが性格が正反対、キツイ性格の方が毘楼勒叉、優しい性格の方が毘楼博叉、二人は個々の能力は高く無いが二人一緒だと神選10階レベルまで跳ね上がる。

「阿修羅、僕達と戦え、丁度暇してたんだ」

「貴方達じゃ強すぎるでしょ」

「僕達じゃ不満？僕は阿修羅と戦いたいんだけどなあ」

「はあ、やるわよ、運動にもなるし」

阿修羅達は腕輪に何かを付けた、腕輪を覆うようなモノ、コレを付けるとディアンギットの腕輪は霊体に当たらなくなる。

霊体とは全ての生物と霊にあるモノ、人間はこの事を魂と呼んだり

する、霊を斬ると出る血は霊体が吹き出しているから。

「毘楼勒叉、毘楼博叉、いくら阿修羅が強くなったとは言え、まだ任務に参加してないんだよ、ちよつと無理があるでしょ」

「うるせえ女つたらし！ テメエは見てる！」

日本支部長とは名ばかり、実質権限はゼロ、強く言われると萎縮してしまう。

毘楼勒叉と毘楼博叉は同時に腕輪に触れた、腕輪から銀色の液体が現れ、得物と化した、得物は2本のハンドアックス、小振りで持ち手も細い、名は毘楼勒叉が右京、毘楼博叉が左京。

阿修羅も腕輪に触れる、得物は長刀、名は夜叉丸。

「行くぞ！」

阿修羅はいつものように構えた、二人同時に地面を蹴り、左右に別れた、阿修羅は毘楼博叉の方に跳ぶ、横薙に斬るが毘楼博叉は軽々と防御する、阿修羅は毘楼博叉を軸にして背後を取った。

しかし毘楼博叉はしゃがみ、上からは毘楼勒叉が右手を振り上げている、阿修羅は頭の上で防ぐが右から毘楼勒叉の左手が飛んできた。

「取ったあー！」

「甘いわね」

阿修羅は毘楼勒叉を直接蹴り飛ばした、毘楼勒叉は宙に浮くが毘楼博叉が受け止めた。

毘楼勒叉と毘楼博叉は、お互いのハンドアックスの刃の付け根を引つけた、そのまま走って阿修羅に突っ込む。

「行くよおー！」

「おう！」

毘楼勒叉が軸となり毘楼勒叉を大きく回して投げ飛ばした、毘楼勒叉は阿修羅の頭上を飛び越え着地する、それと同時に阿修羅は横薙に斬りかかるが、受け止められた。

「阿修羅、僕達の勝ちだな！」

「はあ、当たり前でしょ、2対1なんだから」

阿修羅の首元には毘楼博叉のハンドアックスが突き付けられている、傷付かないとはいえ振り抜く必要性が無い。

「毘楼勒叉、僕は死んだよ」

「どついう事だ！？刀はこっちに向いてるぞ！」

「それは俺が説明しちゃうよ！阿修羅は毘楼勒叉を斬るまえに毘楼博叉の足を斬ってるんだ、だから毘楼博叉は戦闘不能。

毘楼勒叉も分かるだろ、タイマンでやったら阿修羅に勝てない事くらい」

毘楼勒叉は右京を投げ捨て、その場にふてくされて座った、そしてイライラしてる毘楼勒叉を毘楼博叉が慰める、それがいつもの光景だ。

「阿修羅！調子乗るなよ！僕達は本気を出してないんだからな！」

阿修羅は毘楼勒叉の前にしゃがみ、毘楼勒叉の頭に手を置いた。

「分かってるわよ、子供だけど気を使ってくれたのよね？」

「僕は子供じゃない！13歳は立派な大人だ！」

「そうね、大人よね」

阿修羅^{あしゅろ}は汗を拭いて道場を出た、二人との戦いに笑が溢れそうなのを抑えて。

阿修羅^{あしゅろ}がいるのは脱衣所、汗を洗い流すタメに風呂に入る、先客が二人、阿修羅^{あしゅろ}は団服から誰だか判断出来た。

中に入ると髪をほどいた緊那羅^{きんなんら}と、元気な女の子が一人、女の子は阿修羅^{あしゅろ}を見つけると胸に飛び込んで来た。

「阿修羅^{あしゅろ}！アタシは会いたかったぞ！」

「ありがとう、摩和羅女^{まわらにょ}」

摩和羅女^{まわらにょ}と呼ばれた女の子、短い髪の毛に真ん丸の目、そして屈託の無い笑顔、若干歳相応に見られない事がある。

「阿修羅^{あしゅろ}、今日の訓練はどうだった？」

「つまらない、双子が来なきゃ運動にもならなかった」

「双子ちゃんと戦ったのか！？どうだった！？」

「一応勝ったわよ」

「本当に？貴方どれだけ強くなるのよ」

「阿修羅^{あしゅろ}は凄い！アタシも見習わなくてわ！」

阿修羅^{あしゅろ}は摩和羅女^{まわらにょ}を引き離し体を流した、阿修羅^{あしゅろ}が髪の毛を洗っていると摩和羅女^{まわらにょ}が背中を洗ってくる。

「阿修羅^{あしゅろ}は頑張った！だからアタシからのご褒美だ！嫌か？」

「ありがとう嬉しいわよ」

阿修羅は気にせず続けた、摩和羅女は背中だけではなく全体を洗い始める、阿修羅はまだ我慢続けた。

「ちょ、ちよつと摩和羅女！そこは念入りに洗わなくていい！」
「ダメだ！かが様がココはよく洗えと言っていた！」

抵抗する阿修羅を見かねて？緊那羅が摩和羅女に耳打ちをした、その瞬間、摩和羅女の手が止まる。

「本当か？」

「本当だよ、阿修羅も喜ぶぞ」

「阿修羅が喜ぶのか！？それならやるぞ！」

摩和羅女の手は徐々に上に行き、胸で止まった、頭を洗っている阿修羅に抵抗する手段は無かった。

「こ、こら！揉むな！緊那羅！何を教えたの？」

「谷間とかは蒸れるから洗ってやれと言った」

「阿修羅、気持良いか？」

「摩和羅女、阿修羅は喜んでるよ、だからもつとやってやれ」

阿修羅は手で摩和羅女の手をどけようとしたが、緊那羅に手を捕まれ抵抗できなくなった。

「あ、ちょ、ちよつと！お願い！やめ、辞めて！」

「分かった、阿修羅がそこまで言うなら辞める」

「つまらないわね、摩和羅女、出るわよ。」

それと、今日はホーリナーが全員集まったから貴方の歓迎会やるから、団服で食堂に集合よ」

毘楼勒びろうれく又また毘楼博びろうはく又また戦いくさより汗をかいた阿修羅あしゅらは、肩で息をしている、
それを横目に笑いながら風呂を出る緊那羅きんなら、不安になりながらも緊
那羅んならに手を引かれて摩和羅女まわらにょが風呂をでた。

5：双子（後書き）

最近必死に書き置きを作ってます、学校が始まったらあまり時間が割けないので今のうちに、目標としては毎日更新するので楽しみにしてて下さい。

評価、コメントもお願いします。

6：食事会

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

最後に食堂に着いたのは阿修羅^{あしゅら}だった、約一名を抜いて全てのホーリナーが椅子に座っている。

座っていない一名は扉の隣で犬のように座り、阿修羅^{あしゅら}を見上げている、阿修羅^{あしゅら}はあえて気にせずに席に座った。

しかし犬みたいな男性は阿修羅^{あしゅら}に着いてくる、それを見かねてフーとサングラスの覆面男性が立ち上がった、覆面男性は犬男性の隣に立ち見下す。

「摩侯羅迦^{ましういか}、席につけ」

「いやあ、阿修羅^{あしゅら}は今日も可愛いよな、摩醯首羅^{まけいしゅら}、俺はコレで飯3杯はいけそうぞ」

「すまない阿修羅^{あしゅら}、邪魔は排除する」

覆面男性こと摩醯首羅^{まけいしゅら}は摩侯羅迦^{ましういか}の首元を持ち、そのまま持ち上げて摩醯首羅^{まけいしゅら}と摩和羅女^{まわらにょ}の間に座らせた、椅子に座っても犬座りは変わらない。

「じゃあ阿修羅^{あしゅら}の迦楼羅隊^{かるら}入隊祝いという事で」

「ちよつと待て！阿修羅^{あしゅら}が俺の隊に入隊ってどういう事？まだ一ヶ月しか経ってないよ」

「だって阿修羅^{あしゅら}強いんだもん、個人だったら摩醯首羅^{まけいしゅら}と同じくらい強いよ」

全員驚きの表情を隠せなかった、帝釈天^{たいしゃくてん}が抜けて今の日本支部最強

は緊那羅、その次に摩醯首羅という順番だ、故にこの時点でトップ3に入っているという事。

「だから、次の迦楼羅隊の任務が終わったら阿修羅は迦楼羅隊入り決定、異例の速さだけど大丈夫、本気じゃないとはいえ毘楼勒叉毘楼博叉ペアを倒してるから」

一名を除き驚きと納得の表情のオンパレード、その一名とは摩侯羅迦、待てが出来ずに既に食事に手を付けている、身を乗り出してあちらこちらの食べ物食いあさる。

「まあ犬が我慢が出来ないみたいだし、食べようか！」

その合図と同時に全員が食事に手を付け始めた。

迦楼羅は丁寧に色々な食材を取り、その隣から緊那羅に横取りされる、毘楼勒叉は毘楼博叉に取らせて自分は王様気分、摩醯首羅は摩侯羅迦の暴走を止めつつついでに自分も食べている、摩和羅女は阿修羅に取り分けてそこから自分も食す。

「摩和羅女、いつもこんななの？」

「そうだ、楽しいだろ、特に摩侯羅迦とかは楽しい」

「隊は3つだけ？」

「そうだ、アタシと摩侯羅迦と摩醯首羅の摩醯首羅隊、迦楼羅と緊那羅と阿修羅で迦楼羅隊、あとは毘楼博叉毘楼勒叉ペア」

計8人のホーリナー、金色孔雀もホーリナーだが戦う事はほとんど無い、緊急事態や人手不足の時にしか戦わないのでカウントそれではない。

「アタシは阿修羅と同じ隊になりたかった、でも我が儘は言ったら

れない、ココに来れば阿修羅あしゅらに会えるんだから」

「ありがとう、嬉しいわよ」

阿修羅あしゅらは摩和羅女まわらにょの頭を撫でた、摩和羅女まわらにょは小動物のように小さくなり満面の笑を浮かべる。

「阿修羅あしゅらは姉様あしゅらみたいだ！」

「緊那羅きんならは？」

「緊那羅きんならも姉様だ！アタシは嬉しい、入団出来て良かった！」

ココにいる者達はこの世界を楽しんでいる、阿修羅あしゅらはまだこれまでの生活に未練があつたが、摩和羅女まわらにょのお陰でそれが無くなった。

「摩和羅女まわらにょ、嫌きらだつたら答え無いでいいわよ。」

摩和羅女まわらにょには記憶がある？」

「あるぞ、アタシは11歳までかか様と山で暮らしてた、でもかか様はある日病気で死んでしまった、その時にかか様はアタシの腕輪になったんだ、だからアタシは悲しくない、いつもかか様と一緒にだ。それに一人だったアタシを拾ってくれたココにも感謝している、アタシは今の生活が楽しい、阿修羅あしゅらは嫌か？」

「うっん、私も楽しい、摩和羅女まわらにょがいれば楽しいよ」

「そうか！阿修羅あしゅらも楽しいか、それは良いことだ、うん！」

阿修羅あしゅらの迷いは完全に無くなった、摩和羅女まわらにょの迷いの無い笑顔や、皆の楽しそうな顔、自然と阿修羅あしゅらの顔にも笑が浮かんだ、溢れるような笑、それは今まででは無い事だった。

突然、摩醯首羅まけいしゅらの携帯が鳴った、摩醯首羅まけいしゅらは摩侯羅迦まほろかを抑えながら携帯に出る、あいずちだけの会話、そして携帯を閉じた。

「摩侯羅迦、摩和羅女、任務だ」

「了解！」

「ちよつと待った！まだ満腹じゃないぞ！ダメだ、戦えないぞ！」
「うるさい、大皿でも持っていけ」

摩醯首羅はそのまま摩侯羅迦を背中に抱えた、摩侯羅迦は大皿を抱えながら摩醯首羅の背中で食事を続けている。

「阿修羅、帰って来たら話そう、アタシは阿修羅の事も知りたいぞ！」

摩和羅女も摩醯首羅の脇に抱えられ部屋を出た、阿修羅はそれを小さく手を振りながら見送った。

「毘楼勒叉、僕達も任務の時間だ」
「チツ、分かったよ」

毘楼勒叉はふてくされながら部屋を出た、既に食べ終えていた他の4人も部屋を出る準備をする。

「阿修羅、今日は俺も用事があるからホーリナー一人になっちゃうけど大丈夫だよね？」

「特にやる事は無いでしょ？」

「モウマントイ！暇だったら科学班の人に言えば道場使わしてくれるから」

「分かった」

科学班、日本支部が集めた有能な科学者達、いろいろな乗り物や建物自体の機能、そして神の力の多目的な使用方法などを研究している。

阿修羅^{あしゅら}は支部の中を探索していた、一ヶ月間ひたすら道場にこもっていたタメに中を見る機会がなかった、だから迷いながらも支部を見ている。

今は迷いながら行き着いた先は研究所、色々な乗り物やよく分からないものが沢山ある、阿修羅^{あしゅら}は気にせずに入った。

「あ、阿修羅様^{あしゅら}！何かご用でも？」

慌てて科学班の人が立ち上がって阿修羅^{あしゅら}に向き直った、阿修羅^{あしゅら}はビツクリして思わずお辞儀をしている。

「ちょっと迷っちゃって、見ちゃダメですか？」

「大丈夫です、触らなければ見てください」

阿修羅^{あしゅら}は色々見て回った、研究員の後ろに行くと研究員は手が止まり阿修羅^{あしゅら}に一礼する、阿修羅^{あしゅら}はそれがいやだった。

阿修羅^{あしゅら}はガラス張りの前で足が止まる、中には真っ赤なオートバイがあった、阿修羅^{あしゅら}はそれに目を奪われ手について覗き込んだ。

「どうしました？」

「ヒッ！すみません！」

阿修羅^{あしゅら}は悪い事をした気分になり、いつのまにか謝っていた。

「いえいえ、コレは現在開発中のモノです」

「……………綺麗ですね」

「それなら阿修羅様^{あしゅら}、使いますか？」

「良いんですか！？」

「はい、ホーリナーの方々に使ってもらうのが目的ですから、今から地下で乗ってもらっても結構ですよ」

「じゃあお願いします！」

阿修羅^{あしゅら}はバイクと共にエレベーターに乗り込んだ。

阿修羅^{あしゅら}が地下の多目的スペースに入ると、上部のモニターに説明が映し出された、阿修羅^{あしゅら}はそれを全て理解しエンジンをかけた。

「……………凄い」

「阿修羅^{あしゅら}様、何かご不満等がありましたら申し付け下さい、どのような事でも直しますので」

「はい」

阿修羅^{あしゅら}はバイクに股がり走らせた、バイクに乗った事が無い阿修羅^{あしゅら}でも簡単に乗れる。

阿修羅^{あしゅら}が完全に慣れ遊んでいた時、大きな音でサイレンが鳴り響く。

「阿修羅^{あしゅら}様！お戻り下さい！霊が敷地内に侵入して来ました、ステージ4の強敵です」

「はあ、ココから霊の所まで直接出れないの？」

「しかしまだ阿修羅^{あしゅら}様は」

「命令です、早くそこまでのルートを出して、あるんでしょ？」

「お気を付けください」

多目的スペースの壁の扉が開いた、阿修羅^{あしゅら}はバイクに乗りフルスロットルでソコに入る。

中は緩やかなカーブの登坂になっている、そして徐々に目の前が明るくなり、外に飛び出した。

6：食事会（後書き）

やっとホーリナーが全員出てきました、隊もメチャクチャに決める訳じゃありません、何となく気づいて頂けたでしょうか？
評価、コメントをよろしくお願いします。

7：神域

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

阿修羅が地下室からバイクで飛び出すと、最初に目に映るは霊、阿修羅は飛んでいる途中に腕輪に触れる、得物は長刀、名は夜叉丸。霊は体の骨格が変わり、今まで阿修羅が戦ってきた霊とは違う変化を見せる、2 mくらいの巨人となり、空間に出来た黒い穴から得物を取り出す、得物は太刀。

「楽しそう」

阿修羅は空中ですれ違い様に斬りつけた、しかし霊は軽々といなす。阿修羅はそのままバイクを横になりながら停止させ、バイクから降りて構える、しかし阿修羅が構えきる寸前に霊は太刀を振り下ろした。

阿修羅は間一髪で避けると今度はちゃんと構える、そして阿修羅が霊の振り下ろした太刀を見た瞬間固まった。

「あ、貴方、私のバイク……………」

霊の太刀は阿修羅のバイクを両断している、阿修羅はうつ向いたまま震え、何かをブツブツ喋ってる。

「せっかく貰ったのに、気に入ってたのに、私のバイクだったのに、貴方が入って来なきゃ良かったのに、貴方なんて死んじゃえば良いのに。」

完全にダークサイドに入った阿修羅あしゅらの独り言に霊も固まる事しか出来ない。

阿修羅あしゅらは夜叉丸を右腕一本で持った、そしてそのまま力が抜けたようにダランと腕を垂らす、体をフラフラと揺らし前に倒れそうになるのと同時に地面を蹴った。

阿修羅あしゅらが走った跡は刀傷がついている、阿修羅あしゅらは霊の前行くと体全体を使い、そのまま切り上げた、霊が受け太刀すると、阿修羅あしゅらは夜叉丸を右手から左手に持ち換え、一回転して霊の腕を斬った。

「ギヤアアアアアア！」

つんざくような悲鳴が日本支部の森にこだまする、しかし霊の腕は完全に斬れていない、腕一本故に力が入らないからだ。

阿修羅あしゅらは間合いを取ると、背筋を伸ばし切っ先を斜め下に向ける、目を瞑り全ての神経を霊に向けた。

霊は大斧振り上げながら走って来る、阿修羅あしゅらはギリギリまで引き付け胴を切り抜こうとした、しかし大斧の引っ掛かり止まってしまった。

「ヤバイ」

阿修羅あしゅらは夜叉丸から手を離し避けようとした、しかし霊は左手で阿修羅あしゅらを薙払う。

阿修羅あしゅらは地面に体を擦りながら止まった。

脇腹は大きく切り裂かれ血が流れ出す、阿修羅あしゅらは腕輪に触れ夜叉丸を出した。

「ハアハア、ちょっと痛いわね」

霊は大きな音をたてながら阿修羅あしゅらに向かって走って来る、阿修羅あしゅらは

構える事が出来ずに霊の大斧を防ぐので精一杯だった。

阿修羅^{あしゅら}は踏ん張りきれずに吹き飛ばされた、夜叉丸を地面に突き刺しブレーキを踏むが、体中が軋み体制を崩した、うつ伏せに倒れ、

右手で持っている夜叉丸と握りながら傷口を押さえた。
霊は容赦なく阿修羅^{あしゅら}に向かって走って来る、阿修羅^{あしゅら}は立ち上がる力もあるかないかの状態だった。

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ。

阿修羅^{あしゅら}と夜叉丸が強く共鳴する、そして阿修羅^{あしゅら}の視界はスローモーションとなった。

「（何これ？……………夜叉丸？……………うん、分かった、やってみる）」

阿修羅^{あしゅら}は右足を引き左足を前に出した、大きく沈んで夜叉丸の切っ先は左後ろを向く、そして阿修羅^{あしゅら}は夜叉丸を両手で強く握り霊を睨んだ。

「ベロシティ【光速】！」

阿修羅^{あしゅら}は一閃となり霊の横を抜けた、あまりの速さに霊も監視カメラで見てた科学班も阿修羅^{あしゅら}を捉えられなかった。暫くすると霊の体に亀裂が入り、上半身がズレて地に落ちた、いつの間にか霊は両断されていた。

「何これ？」

『阿修羅^{あしゅら}様！今の技はいつ習得なされたのですか！？』

「今、夜叉丸に語りかけられるような感覚の後、気付いたらこんな事してたの」

阿修羅^{あしゅら}は状況把握は出来ていたが、何故自分がこういう事が出来たのかは理解できなかった。

そして身体中ボロボロの阿修羅^{あしゅら}はその場で気を失い倒れた。

『阿修羅^{あしゅら}様！医療班を直ちに向かわせろ！患者のレベルは4、重傷ないし重体、速やかに処置しろ！』

科学班の班長が医療班に命令する、医療班はスタンバイしていたタメにすぐに駆けつけ、ストレッチャーに阿修羅^{あしゅら}を乗せた。

阿修羅^{あしゅら}の脇腹は大きく切り裂かれ未だに出血している、身体中擦り傷だらけで危険な状態なのは一目瞭然だ。

3日後

阿修羅^{あしゅろ}は真っ白ベッドの上で寝ている、あれから一度も目を覚まさずに眠ったまま。

昨日任務から帰って来た摩和羅女^{まわらにょ}は阿修羅^{あしゅろ}の横に付きっきり、シーツのシミは摩和羅女^{まわらにょ}の涙である。

「う、……………ん、……………うつん……………」
「阿修羅^{あしゅろ}!？」

阿修羅^{あしゅろ}が弱々しく目を開けると、目の前には目を腫らした摩和羅女^{まわらにょ}がいる、摩和羅女^{まわらにょ}は阿修羅^{あしゅろ}が起きたのを確認すると、阿修羅^{あしゅろ}に抱きついた。

「阿修羅^{あしゅろ}！アタシは心配したぞ、無事で良かった！」
「摩和羅女^{まわらにょ}、痛……………くない？」

阿修羅^{あしゅろ}は傷口に摩和羅女^{まわらにょ}が乗っていたので退けようとした、しかし傷口は全く痛まない、それどころか傷口が無いように感じられる。

「傷口は完治したぞ！」
「これも神の力？」
「そうだ！神様が阿修羅^{あしゅろ}を守ってくれた」

摩和羅女^{まわらにょ}が大声で喋っているせいで、金色孔雀^{こんじきくじゃく}が病室に入ってきて来たのに二人とも気付かなかった。

「もうそろそろ良いかな？」

「うわっ！いるならいってえ！驚くだろ」

「驚かそうと思った訳じゃないんだけどな」

それより阿修羅、話が聞きたいんだけど、良いかな？」

阿修羅は無言で頷いた、摩和羅女は金色孔雀のタメに阿修羅と話せるスペースを作り、自分は隅の方に行った。

「神域に達したって本当かい？」

「神域？」

阿修羅は初めて聞いた言葉に首を傾げた、金色孔雀はそれを見て頭を掻きむしる。

「ベロシティ【光速】って使ったでしょ？」

「ああその事ね、何なのそれ？」

「俺達は‘神技’と呼んでる、神技っていうのは神域、つまりある程度の力に達した者だけが使える技だ、普通神域に達するには1・2年かかるもんなんだが、どういう訳か阿修羅は一ヶ月でやってのけた。

ちなみに神選10階の条件の一つに『神技を2つ習得していること』ってのがある、神技2つとかは化け物だ、まあ俺はその資質が阿修羅にはあるとふんでるけどね」

阿修羅にこの申告は嬉しい半面微妙な気分でもあった、更に激しい運動が出来るのは楽しみでもある、しかし化け物よばわりされるのは嫌だった。

阿修羅はステージ4との戦いを思い出し興奮していた、しかしあるシーンを思い出すのと同時に深く落胆する。

「阿修羅、どうした？」

「はあ、バイク貰ったのに壊された」

「そんな事か！それなら科学班の人達に言えば一週間で新しいのを作ってくれるぞ！」

「本当に？」

「本当だ！」

阿修羅の顔はパアツと晴れた、その笑顔を見て摩和羅女も笑顔になる、忘れられた金色孔雀はノソノソと部屋を後にした。

「やっぱり阿修羅は凄い！こんなに早く神域に達するなんて、アタシでもつい最近やっと神技が使えるようになったばかりだ」

「そうなんだ、そんなに凄い事なんだね」

「そうだぞ！でも前に神選10階の人が日本に来た時、あの人は怖かった、大鎌をもって敵を楽しそうに殺すんだ、ステージ4の群れがゴミのように斬り刻まれるあの光景は今思い出しても怖い、アタシは阿修羅にあんな風になって欲しくはない」

阿修羅は摩和羅女の言った事を想像して、鳥肌が立った、阿修羅は戦闘自体を楽しんでいるのではなく、戦闘の過程、そこで行われる運動をたのしんでいる。

しかし摩和羅女の言った神選10階は敵を斬る事を楽しんでいる、強大な力に溺れてその力を使う事で自分の欲求を満たす、それが阿修羅とシンクロする事を想像した摩和羅女は不安にさいなまれていた。

「大丈夫よ、私は強くなりたいんじゃないの、もっと動きたいだけ、それを叶えるのが力つただけでそれ以上の欲求はない、相手を傷付けずに運動出来るなら私はそっちを選ぶよ」

「やっぱり阿修羅は阿修羅だ！強くなっても阿修羅に変わり無い、良いことだ！」

阿修羅は抱きついてきた摩和羅女の頭をそつと撫でた。

阿修羅が求めるは動、利用するは力、望むは和、そして行うは戦。
全てがサイクルし、全てがお互いを殺す、何処に身を置くかで、鬼神とも女神とも化す。

7：神域（後書き）

戦闘シーンが短くなってしまった事をお詫びします、作者の力不足です。

評価、コメントをよろしくお願いします。

8：初任務

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

迦楼羅^{かるら}と緊那羅^{きんなら}は任務から戻り各々の自由な時間を楽しんでいる、阿修羅^{あしゅら}は地下の多目的スペースで体を動かしていた。スピーカーのスイッチが入る音が聞こえると、いつもの声が日本支部全体に響き渡る。

「迦楼羅^{かるら}、緊那羅^{きんなら}、阿修羅^{あしゅら}、今すぐ部長室に集合、これから任務だよ」

阿修羅^{あしゅら}はその言葉を聞くと走ってエレベーターに乗った、阿修羅^{あしゅら}がいるのは最下層、部長室は最上層、阿修羅^{あしゅら}は剥き出しのエレベーターに座った。

部長室に着くと既に全員集まっている、阿修羅^{あしゅら}は軽く謝^いって金色孔雀^{こんじきく}の前に行った。

「阿修羅^{あしゅら}、初任務だよ」

「はあ、やっとね」

「これでも早いんだけどね。」

じゃあ今回の任務内容を説明するよ、今回はどこかのいんちき陰陽師^{いんちきおんようし}が取り付いた悪霊を祓^{はら}うらしい、その尻拭^{しりふき}いを頼む」

緊那羅^{きんなら}はつまらなそうな顔で返事をした、迦楼羅^{かるら}はいつものようにポーカーフェイスで返事をする、阿修羅^{あしゅら}は初任務に心踊り何も返事はしていない。

「面倒な任務だ」

「何が？ 霊を倒すだけでしょ？」

「金色孔雀、あんた戦いしか教えて無いでしょ？」

金色孔雀は明後日の方を見て知らないふりをした、緊那羅からはかなりの殺気が金色孔雀に向けて放たれている。

「人間に取り付いた霊つてのは逃げるの、だからそれを追わなきゃいけないから面倒なのよ」

「それは確かに面倒ね」

「まあ阿修羅のバイクもあるし、追うのに苦労はしないでしょ、バイクは車に乗せられるようにしてもらったから」

迦楼羅はそういつとエレベーターに乗り込んだ、阿修羅もその後を追う、緊那羅は金色孔雀を思いっきり睨みエレベーターに乗った。

地下の車庫に行くと迦楼羅の車がある、そしてその後ろには阿修羅のバイクが付いてる。

緊那羅は迷わず後部座席に横になった、阿修羅は助手席、迦楼羅は運転席に乗るとけたたましいエンジン音が車庫に響く、壁の一ヶ所が開くとそこに向かって車を走らす。

小さな山間の村、そして一つの家の前に大勢の人が集まっている、明らかにそこがおかしい、いや、この村の空気がおかしい、どんよりとしたていて任務以外では近寄りたくない村だ。

「俺はココで待ってるよ、二人は行ってくれば？」

「命令でしょ？」

「バレた？行ってきたくない、俺お払いのあの空気大っ嫌いなんだよね」

「分かったわよ、行くよ阿修羅」

緊那羅は人を掻き分けて家に入っていく、阿修羅もその後ろを追って人を掻き分ける、誰も気にしない事に少し悲しさを覚えながら家に入った。

居間に行く準備万端といった感じた、緊那羅は冷蔵庫から勝手に飲み物を取り出し飲んでいる、記憶に残らないのを良いことにやりたい放題だ。

「阿修羅も飲む？」

「はあ、それ他人のでしょ？」

「良いのよ、コッチは命がけでココに来てるんだからコレくらい」

阿修羅は苦笑いを浮かべた、前々から自分勝手な人だと思っていたが、ここまでは逆に誇るべきモノだと思えてきた。

始まって緊那羅は緊張感の欠片もない、今はお菓子をあさっている。

「おっ、みたらし団子がある」

緊那羅の一言に阿修羅の顔がピクリと動いた、阿修羅は生唾を飲み

ながら緊那羅きんならを見た。

「食べる?」

阿修羅あしゅらは無言で頷きみたらし団子を取った、一口食べると満面の笑みになる。

「おいひ」

「あんこもあるよ」

「本当だ、ゴマは無いの?」

「ゴマだあ?ゴマなんて邪道よ、団子はみたらしかあんこが通例でしょ?」

「緊那羅きんならっていちご大福嫌い?」

「あんなもんは大福じゃない、プラスとマイナスでマイナスだ」

阿修羅あしゅらは力説する緊那羅きんならを横目に団子をひたすら頬張っている。

しかし二人の甘い時間は引き裂かれた、ビリビリと肌を突くように空気が張りつめる、そして霊が体から引き離されると丸くなって山の方に飛んで行った。

「はふら、ほうわよ（阿修羅あしゅら、追うわよ）」

「はほひほふ（あと一つ）」

二人は団子を頬張りながら片手に団子を持ち窓から外に出た、車の所まで行くと既にバイクの準備をしてあたる。

「お前ら口に色々付いてるぞ」

二人は手に持った団子を全て食べ、口を拭いてバイクに跨った。

「私と阿修羅は先に行ってる、後から追って来なさいよ」

「了解」

「緊那羅、しっかりつかまって！」

阿修羅がアクセルを入れると前輪が軽く上がる、阿修羅は霊を見ながらバイクを走らせた。

山道に入ると舗装されていない道をフルスロットルで走る、阿修羅は霊を追っている、ただそれだけで楽しかった。

「阿修羅、何か感じない？」

「居心地は良くないわね、何か引き寄せられてるみたい」

「私もよ」

阿修羅と緊那羅は嫌な予感がしていた、村に入った時から感じてた不安、最初は悪霊被いの空気だと思った、しかしこれは何かがおかしい。

平地に行くとい霊は止まった、二人はバイクを降りて霊の近くに行くといとある事に気付く。

「阿修羅、囲まれたわね」

「殆んどはステージ3、ステージ4が………3体、厄介ね」

「先に雑魚を片付けるよ」

「はい」

阿修羅と緊那羅は腕輪に触れる、得物は阿修羅が夜叉丸、緊那羅は羅刹、緊那羅の得物は納刀された刀。

阿修羅と緊那羅は背中合わせになる、背筋を凜と伸ばし切つ先を斜め下に向けるのが阿修羅、腰を低く落とし柄を握って抜刀の瞬間を伺っているのが緊那羅。

「多く倒した方がこの団子を食べる権利が貰える、それで良いわね？」

緊那羅きんなら胴着の懷からタツパに入った団子が出てきた。

「はあ、いつの間にそんなの？」

「そんな事は気にしない、来たわよ」

緊那羅きんならはギリギリまで霊を引き寄せると鞘走りを利用して両断する、一回斬ると納刀して再び同じ構えをとる。

「私に納刀させなかったら誉めてあげる」

霊が3体同時に襲いかかってくる、緊那羅きんならは真ん中の霊を斬ると納刀し、逆手で柄を持つと右の霊を抜刀と同時に斬る、左の霊は回し蹴りで倒すと鞘で頭を砕く。

その間の時間は4秒、羅刹という名前の通りである。

「弱いんだから逃げてれば良いのに」

霊が5体同時に阿修羅あしゅらに襲いかかって来る、阿修羅あしゅらは右足を軸にして一回転する、5体の内3体が両断された。

勢い余って霊に背を向けたところで、背中に夜叉丸を添わせ、大きな弧を描きながら振る、背中に回りこんでた霊が股から頭にかけて両断され、振り向き様に横薙に斬って全てを殺した。

「はあ、つまらない」

阿修羅^{あしゅら}は先程から何体もの霊を倒しているが、汗一つ流れていない。ある程度倒して阿修羅^{あしゅら}の近くに緊那羅^{きんなら}が来た。

「私は12、阿修羅^{あしゅら}は？」

「勝った、14」

「あんたのは無駄にリーチが広いのよ」

「はあ、それより厄介者が3体残ったわよ」

「先に2体倒した方が勝ちよ」

「はあ、話しが違……ってもう行ってるし」

緊那羅^{きんなら}はステージ4の1体に向かって走って行った、懷に潜り込もうとするが棍棒が振り下ろされる、緊那羅^{きんなら}は鞘ごと受け止めるとそのまま抜刀して腹を斬ろうとした、しかし手の平で軽々と刃を握られる。

「頑丈な手の平ね」

緊那羅^{きんなら}は無理矢理引き抜き霊の手の平を斬った、そして納刀と同時に間合いをとる。

霊は全く怯む事なく走って来た、上段から振り下ろされた棍棒を避け、左腕に鐔と鞘の間の抜き身の部分を当てる。

「左腕、貰うわよ」

そのまま抜刀する、鞘走りと押す力をフルに受けた左腕は、堅い装甲など無かったかのように斬れた。

大きな左腕は地面に落ち、霊は声にならない声で叫ぶ。

「もつと良い声で奏でなさいよ、死ぬときくらい美しくなければあんたも悲しいでしょ？」

緊那羅^{きんなら}は走り出す、霊はがむしゃらに棍棒を振るが既に緊那羅^{きんなら}は背後に回りこんでいた。

緊那羅^{きんなら}は首めがけて抜刀するが少し入った所で止まった、緊那羅^{きんなら}はそのまま羅刹に鞘を当てて蹴り飛ばして首を切断した。

「一丁上がり」

阿修羅^{あしゅら}は目の前にいる霊に的を定めた、敵の得物は太刀、ドスンドスンと大きな音をたてながら走ってくる、阿修羅^{あしゅら}は切っ先を斜め下に向けて構えた。

「はあ、遅い」

阿修羅^{あしゅら}は霊が振り上げた腕に夜叉丸を突き刺す、つんざくような悲鳴を無視して首を斬ろうとした、しかし空いてる左腕^{あしゅら}が阿修羅^{あしゅら}を薙払おうとする。

「ワンパターンね」

夜叉丸を地面に刺して左腕の攻撃を防御した、阿修羅^{あしゅら}は一旦間合いを取り相手の出方を伺う。
霊は懲りずに走って来た、阿修羅^{あしゅら}は呆れながらも構える、そしてギ

リギリまで引き付けると霊の上段からの攻撃を避け、霊の背後に回り込み背中合わせになる。

霊は振り向き阿修羅あしゅらを両断しようとした、それより先に夜叉丸が霊の喉元に突き刺さっている、阿修羅あしゅらは背中を向けたまま霊の首から頭にかけて両断する。

「行動パターンが同じなら一度戦えば何をするか分かる、ステージ4も頭があれば強いのに」

阿修羅あしゅらが残りのステージ4に目をやると緊那羅きんならも丁度終わり狙いを定めていた。

「阿修羅あしゅら、スピードなら負けないわよ」

「私にもとっておきがあるんだから」

「ふんっ、一発勝負ね」

緊那羅きんならは腰に納刀した羅刹を当て、低く構えた、阿修羅あしゅらは夜叉丸を左後ろに向け、低く構える。

「ベロシテイ【光速】！」

二人同時に神技を放ち霊は全く反応出来ずに腰から下、胴から上へと別れ、3つになり地面に転がる。

「阿修羅あしゅらも同じなんだ」

「みたいね、それより、これは私の勝ちよね？」

「しょうがないわね、ホラ、食べなさいよ」

阿修羅あしゅらはタッパを貰うと美味しそうに団子を頬張る、しかし緊那羅きんならは阿修羅あしゅらに背を向けて何かしている、阿修羅あしゅらは緊那羅きんならの肩を掴み振

り向かせた。

「はあ、やっぱり」

「…………バレた」

緊那羅^{きんなら}はもう一つのタップを開けて団子を食べている、阿修羅^{あしゅら}に負けたら保険、勝ったら総取りするつもりだったらしい。

「まあいいよ、帰るよ、迦楼羅^{かるら}は山に入れないだろうし」

「はいよ」

阿修羅^{あしゅら}がバイクに跨ると後ろに緊那羅^{きんなら}が乗る、阿修羅^{あしゅら}はフルスロットルで山を降りた。

村に着くと車の中で迦楼羅^{かるら}が寝ている、緊那羅^{きんなら}は青筋を立ててキレると、迦楼羅^{かるら}の頭を思いつきり殴った。

「…………痛い」

「痛いじゃないでしょ！？あんた私らがどれだけ苦労したと思っているの！」

「口の周りにあんこ付けて言われても説得力が無いんだけど」

二人は真っ赤になりながら口を拭いた、そして緊那羅^{きんなら}は頭に血が上ったのか、恥ずかしいのか分からないが顔を真っ赤にしながら迦楼羅^{かるら}に怒鳴り続けた。

「奴らは群れだったんだよ！ステージ4も3体、これで余裕に思える？」

「服に埃一つ付いてないよ、どうせ二人なら余裕だろ」

「きんなら緊那羅、次の任務は迦楼羅かるら一人にやつてもらえば良いんじゃない？

私達は傍観者の立場で」

「もしもステージ5とか出てきたらどうするんだよ？」

「「死んで」」

二人の爽やかな笑顔に迦楼羅かるらは死を覚悟した、確実にこの二人なら自分を見捨てかねない、心底簡単な任務を祈った瞬間だった。

あしゅら阿修羅の初任務、思い出は団子、成果は休暇。

8：初任務（後書き）

突然タイトルを変えた事を謝罪します、続けるタメに分かり易くしただけです。

作品をより向上させるために評価、コメント、アドバイスをお願いします、どんな事でも作者のプラスになります。

9：温泉

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

阿修羅^{あしゅら}は最近、日本支部にある隠し通路を見つけた。

まだまだ知らない事の多い日本支部を探険している時、行き止まりに行き着いた、普通行き止まりには扉か何かが近くにあるはず、しかしそこには一面壁、何も無くて逆に怪しいと思い壁をよく観察した、そうすると一つだけおかしい箇所を見付けてそこを押したら行き止まりの扉が開いた。

一人で入ろうとした阿修羅^{あしゅら}に声をかける摩和羅女^{まわらにょ}。

「阿修羅^{あしゅら}、何だコレは？」

「隠し通路？」

「何か楽しそうだ！行ってみよう！」

阿修羅^{あしゅら}は摩和羅女^{まわらにょ}に手を引かれて中に入った。

中は薄暗く何故か足下に灯りがある、不思議がる阿修羅^{あしゅら}をよそに摩和羅女^{まわらにょ}はどん中に入って行く、ジメジメして埃っぽい空気が不気味さを際立たせる。

「何か肝試しみたいだな！」

「そうね」

「阿修羅^{あしゅら}、別れ道があるぞ！」

二手に別れた道、阿修羅^{あしゅら}の不安は積もるばかりだが、摩和羅女^{まわらにょ}の好奇心を抑えるに値しない。

「はあ、どっちがいい？」

「むううううう、コツチ！」

摩和羅女は阿修羅の手を引いて右に行った。

どのように登り、どのように曲がったかもう忘れていて、今の現在地の予想すら出来ない阿修羅を尻目に摩和羅女は迷路気分で足を進める。

ガタン！ドスン！

大きな音が聞こえた、何かが開き何かが落ちる音、摩和羅女は怖くなり阿修羅の後ろに隠れた、阿修羅は全く気にせずに進み続ける。音の根源は砂埃に包まれている、今までと同じような道に現れた奇怪な光景、摩和羅女は阿修羅の服を強く掴み阿修羅の陰に隠れた。

「痛たたた、何よコレ？」

「誰？」

砂埃が晴れかけた時、埃を叩きながら土煙の中から出てくる人？

「緊那羅？」

「そうよ、あんた達何してるの？」

「私達は隠し通路を見つけたから探険、緊那羅は？」

「壁に手を付いたら壁が凹んで足下が開いて落っこちた」

緊那羅は明らかにイラつきながら言い放つ。

「それもこれもあんた達探してたからこうなったのよ」

「私達を探してた？」

「そう、何だか知らないけど今回は女だけの任務だって、呼んでも

来ないから私が捜してたらこれだ、早く出て部長室に行くわよ」

阿修羅^{あしゅら}はばつが悪そうな顔をして頬を掻いた、緊那羅^{きんなら}はその表情を読み取りフリーズする。

「もしかして」

「迷った！アタシ達は帰り道が分からないぞ！」

阿修羅^{あしゅら}を代弁して摩和羅女^{まわらにょ}が言い放つ、その無神経さに緊那羅^{きんなら}は頭を抱えた、阿修羅^{あしゅら}も合わせる顔がない。

「しょうがない！根性で抜け出すわよ！」

「おー！」

「……………お」

やけくその緊那羅^{きんなら}と楽しんでいる摩和羅女^{まわらにょ}に阿修羅^{あしゅら}は着いて行くので精一杯だった。

道は果てしなく続き流石の摩和羅女^{まわらにょ}も事態を把握しはじめたその時。

「緊那羅^{きんなら}、何か肩に付いてるぞ」

「何？」

緊那羅^{きんなら}は肩に付いている何かを手を取った。

「イヤアアアアア！」

物凄い声で叫ぶと何かを投げ捨てて摩和羅女^{まわらにょ}に抱きついた、阿修羅^{あしゅら}は気になり緊那羅^{きんなら}が捨てた何かを見た。

「クモ？」

「お、お願い、クモ！クモだけは、ダメ！」

阿修羅あしゅらはこの非常時に緊那羅きんならの驚き方を楽しんでた、いつになく女の子っぽい反応を見せた緊那羅きんならに阿修羅あしゅらは近づく。

「この子がダメなの？」

阿修羅あしゅらは手に持ったクモを緊那羅きんならの目の前に差し出す。

「イヤ！お願い、辞めてえ、お、お願い阿修羅あしゅら、やだあ、怖いよお」

泣き出した緊那羅きんならが可哀想になり遠くに投げた、そして残ったのは摩和羅女まわらこよに抱きつき、いつもの欠片も無く女の子のように無きじやくる緊那羅きんなら。

「わあああああ！」

「緊那羅きんなら、もういないよ」

「グスンっ、ほ、ホント？」

阿修羅あしゅらは同性ながら緊那羅きんならが可愛く見えた、今なら女子校の生徒の気持ちきもちが分からなくもない。

再び摩和羅女まわらこよが先頭に立ち歩き始めた、緊那羅きんならは未だに阿修羅あしゅらにしがみついている。

「緊那羅きんなら、もうクモ出てこないから離れて」

「でも、でも、もしかしたら出てくるかも、そしたら……………」

また泣きそうになる緊那羅きんなら、いつもの緊那羅きんならの威勢はない、そこにいるのは怯えた女の子、世の中の男が見たら一発で惚れるような甘い声を出して。

「緊那羅は何でクモがダメなの？」

「く、クモ！？」

「はあ、クモはいないよ、クモが嫌いな理由が聞きたいの」

「小さいころご飯を食べてる時にクモが上から落ちてきて、私のご飯の上に乗ったのを気付かずに一緒に口に入れちゃったの、そしてクモが口の中で暴れ回って……、吐き出したけどそれがトラウマになって見るだけで意識が……」

阿修羅もその話を聞いただけでトラウマになりそうだった、その点阿修羅は苦手なモノが少ないのでそういう気持ちに分からない。

3人は行き止まりに着いた。

「もしかしたら出れるかもね」

「ホントか！？」

「多分ね」

「クモクモバイバイ」

阿修羅達は壁を触って何かが無いか確かめた、摩和羅女が一ヶ所おかしい所を押すと3人の足下の床が抜けた。

下は滑り台のようになっていて3人は下り続ける、ある程度滑ると落ちて何かに乗った、3人が落ちた所はゴンドラのように上昇している。

「はあ、何これ？」

「何か上がってる！アタシ達上がってるぞ！」

「もう何も無いわよね？」

ゴンドラは上昇しきり止まる、そして目の前の扉が開くとゴンドラは傾き3人は外に放り出された。

「イヤアアアアア！」

「ワアアアアアア！」

「キヤアアアアア！」

ドスン！！

3人は何とか隠し通路から脱出出来た、多少手荒いがこの際出れば関係ない、そして3人の目に最初に映ったのは……………。

「お疲れさま、皆楽しかった？」

「「「ボス！？」」」

「いやあ、全部見させてもらったよ、緊那羅きんならとか可愛かったね」

金色孔雀こんじきくじゃくは大きなモニターを指差すと、そこには今まで阿修羅達あしゅらいが通って来た道。

「おい、どういう事？」

「はあ、見たなの？」

「どういう事何だ！？」

「コレはダークロードを追いつめるタメの迷路だよ、本来はホーリナーに無線機付けて放り込むんだけど、今回は君達の遊びだから見学してようかな、って」

緊那羅きんならは完璧にキレた、相手が支部長という事をすっかり忘れて胸ぐらを掴んでいる、さっきまでの怯えを全て怒りに昇華した。

「中にスピーカーくらい付けなさいよ、それと助けに来るとかしなさい」

「まあまあ、……………ホレ」

「キヤー！！！！」

金色孔雀はポケットからクモ……、の人形を出した。

「お願いお願い！もう怒らないから、く、クモは辞めて！」

「緊那羅、人形よ、人形」

「ニンギョウ？」

「そう、ボスのイタズラ」

何かが切れる音と共に緊那羅が無言で立ち上がった、後ろで笑つて
る金色孔雀に回し蹴りを放つ、そして倒れた金色孔雀ボコボコに蹴
り飛ばす。

「死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！死ね！
！つてか殺す！」

その光景に阿修羅と摩和羅女は言葉を失った、緊那羅の顔がトラウ
マになりそうなくらい恐ろしい顔、負のオーラが部屋全体を包みこ
んでいる。

「すみません！もうしません、だから許して下さい」

「緊那羅、任務聞く前に殺したら任務に行けなくなるでしょ？」

「阿修羅、それは任務を聞いたらボスは死ぬって事なのか？」

「そうね、あんたを殺すのは任務を聞いてからでも遅く無いわよね」

支部長の権限が地に落ちたところで緊那羅の蹴りが止まった、金色
孔雀は仁王立ちしてる緊那羅の足下に土下座しながら任務の内容を
話し始めた。

「今回の任務は大型温泉テーマパークの女湯の霊の退治です、温泉
が大好きな女の人でそこに居座ってるようです」

「温泉か、緊那羅^{きんなら}、せっかくだから有休気分で行かない？」
「そうね、任務はサツさと終らして温泉を楽しんじゃおう」
「ヤッター！温泉だ！アタシは温泉は始めてだ」

3人は金色孔雀^{こんじきく}の事など忘れてエレベーターに乗り込んだ、金色孔雀^{こんじきく}は複雑な気持ちだった、死から免れたのは良し、忘れ去られたのは悲しかった。

Japan Large spa

その大きさに阿修羅^{あしゅら}と摩和羅女^{まわらにょ}は呆氣にとられている、緊那羅^{きんなら}は色々と調達しに消えた。

「阿修羅^{あしゅら}！凄い大きいぞ！」

「そうね、早く任務終らせて楽しもう」

「うん！」

緊那羅^{きんなら}は浴衣やら何やらを一式集めてきた、そして3人は温泉に入る前に霊を探した、任務を早く終らせないと温泉を楽しめない、自分達の邪魔を排除するタメに霊を探している。

「いたわよ」

「はあ、あんななど真ん中に」

阿修羅^{あしゅろ}が腕輪に触れると得物が現れる、得物は長刀、名は夜叉丸。夜叉丸に気付くと霊は歪に変化した、そして……………逃走。

「はあ、何で逃げるの？」

「大丈夫！アタシに任せろ！」

摩和羅女^{まわらじよ}は腕輪に触れ得物が現れる、得物は暗器の針、名は針鬼。摩和羅女^{まわらじよ}は走りながら狙いを定めると霊の頭に当たる。

「ストライク！」

霊は倒れると消えた、一発で急所を突いたのである、針と同じくらの急所を走りながら走ってる敵を一発で、それが示すは暗殺の天才、神に愛された暗殺屋、阿修羅^{あしゅろ}は恐れから震えた。

「よし！温泉入ろう！」

「阿修羅^{あしゅろ}、アイツはあんな性格でも最強のバックよ、隠密では世界でも最強レベル、まあ接近戦なら最弱レベルなんだけどね」

阿修羅^{あしゅろ}は苦笑いを浮かべながら摩和羅女^{まわらじよ}の後を追った、苦笑いの理由は摩和羅女^{まわらじよ}よりもしゃいである緊那羅^{きんなら}。

二人は先に温泉に入ると阿修羅^{あしゅろ}は呆れながら後を追った、摩和羅女^{まわらじよ}と緊那羅^{きんなら}は周りの迷惑を全く考えずに……………。

「（迷惑ってかかるのかな？）」

飛込んだ、大きな水しぶきが他の客にかかるが、嫌な顔をするだけで誰がやったかは咎めようとしてない。

「気持良い！」

「阿修羅、気持良いぞ！早く阿修羅も入れ！」

阿修羅はゆつくりとつかった、摩和羅女はホーリナーなのを良いことに泳いでいる、緊那羅は周りの人を退けて自分だけのスペースを作った。

「はあ、職権乱用とはこの事ね」

「何してんだよ阿修羅、私達は生きる神よ、いちいち気にしてたら神に近付いた意味が無いじゃない」

「阿修羅！緊那羅！外にも温泉があるぞ！」

「行くわよ！」

緊那羅は阿修羅を担いで露天風呂に向かって走った。

摩和羅女は思いっきり飛び込むと、続けて阿修羅を担いだ緊那羅も飛び込む。

「ひゃー、極楽極楽」

「爺」

「うるさい、温泉は日本人の心よ、あんたも日本人なら楽しみなさいよ」

阿修羅はゆつくりとしたいタイプだった、温泉はゆつくりと一人ですしたいという願望を二人は見事に打ち崩した。

その後も阿修羅は二人に振り回され続けた、楽しくもあるが温泉なのに疲労が溜る一方だった。

9：温泉（後書き）

いつの間にか10話をまであと1話、早いですね、次回はついに物語が動き出します。

読んでいただけたら光栄です。

10: 鬼

Japan VCSO Japan branch office

摩醯首羅^{まけいしゅら}、摩侯羅迦^{まこうか}、迦楼羅^{かるら}は部長室に集められていた、女3人は任務を兼ねた温泉に行っているので変則的になっている。

3人は金色孔雀^{こんじきくじゃく}を見て固まった、毛布にくるまりガタガタと震えている、顔には痣。

「どうんたんだよボス？」

「き、緊那羅^{きんなら}に……………」

「緊那羅^{きんなら}にセクハラでもしたの？」

「クモの人形見せたら……………」

迦楼羅^{かるら}だけ大爆笑した、この中でも迦楼羅^{かるら}は一際緊那羅^{きんなら}の事を熟知しているからだ、クモが大っ嫌いなのも知っている。

「そりややつちまったな、緊那羅^{きんなら}にクモは扱い次第じゃご法度だよ」
「迦楼羅^{かるら}、そんな事はどうでもいい、ボス、任務の説明しろ」

摩醯首羅^{まけいしゅら}がいつものように前に出た、全てを簡潔にやりたい摩醯首羅^{まけいしゅら}は無駄な事を嫌う。

迦楼羅^{かるら}は表情が分からない摩醯首羅^{まけいしゅら}が苦手だった、背中にしがみついてくる摩侯羅迦^{まこうか}も。

「今回は楽しいよ、鬼退治だ」

「「「鬼?」」」

「そう、最近各地で鬼がやりたい放題でさ、双子ちゃんにも行って

もらってる、女3人も温泉が終わったら直行してもらおう予定だし。それで君達にも鬼退治に行ってもらいたいと思いまあす、各地にいる協力者を頼りながら旅して、今回は大仕事になりそうだから隊編成その他は各々でやってもらおう、近くににいる人と協力しても良いし一人ずつで相手してもらっても構わない。

火急的速やかに鬼を一掃する、親玉を見付け次第全員に連絡、軽く日本支部の威信をかけた戦いだね、よろしく！」

金色孔雀こんごうけいせうはそれだけ言うところの人に紙を手渡した、そこにはアバウトな日本地図と点、鬼による被害をポイントで示している。

摩醯首羅まけいしゅらと摩侯羅迦まこうらかは車庫に行くと言で迦楼羅かろうらの車に乗り込む、既に迦楼羅かろうらの車と金色孔雀こんごうけいせうのバイクしか無いから当たり前だが、迦楼羅かろうらは引っぱかった。

「お前らいつも任務行るとき誰が運転してるんだよ？」

「摩和羅女まわらにょ」

摩和羅女まわらにょは見た目も歳も阿修羅あしゅらより下だ、それに運転させてる事に迦楼羅かろうらは呆れた。

「毘楼勒叉びろうりゃと毘楼博叉びろうはくがバイクに乗ってるんだ、不思議ではない」

「それもそうだけど」

「早く行くぞ迦楼羅かろうら！俺は鬼と戦うのが始めてなんだぞ！」

「（何で摩醯首羅隊まけいしゅらたいはこんなのはっかりなんだよ）」

日本支部で鬼と戦った事があるのは金色孔雀こんごうけいせうだけ、だから現場に出てるホーリナーで鬼と戦った事のある奴はいない。

J a p a n m o u n t a i n p a t h

V C S O には各地に協力者がいる、協力者は人間の記憶に残るがホーリナーと普通に接する事が出来る特別な人々、主に食料は資材調達、そして様々な情報の収集源として使われている。

3人は協力者の情報をもとに山道を歩いている、情報によると大きな洞穴があるハズ。

「なあなあ！これじゃないのか！？つてかコレだ、決定！」

「摩侯羅迦まこうかの意見を取り入れる訳では無いが、コレだ」

錠前が付いている金網の奥にある洞穴、3人は警戒して腕輪に触れた、二人の手には得物が握られている。

摩醯首羅まけいしゅらの得物は槍、名は胤舜、迦楼羅かるらの得物は鎖鎌、名は首切、そして摩侯羅迦まこうかの得物は………、鋭い爪、これはかき爪ではなく指先に付いてるだけのもの、両手足にある、歯は全て牙と化している、名は狼嚇。

「グルルルウ」

「まさに犬だな、コレは」

「とりあえず行くぞ」

3人は摩侯羅迦まこうかを先頭にして中に入った、4本足で歩くその様は犬

そのもの、迦楼羅かるらは分銅をグルグルと回しながら警戒する。
警戒に歩いていた摩侯羅迦ましうらかの足が止まると摩醯首羅まけいしゅらは足を止める。

「迦楼羅かるら、その体制のまま右9度の位置にそれを投げろ」

「何で？」

「いいから早くしろ」

迦楼羅かるらは渋々摩醯首羅まけいしゅらに言われた通りに投げた、そうすると何かに当たり絡まる。

「ガウ！グルア！」

一瞬で摩侯羅迦ましうらかが飛びかかった、それに続いて迦楼羅かるらと摩醯首羅まけいしゅらも後を追う。

気付いた時には人間に似たようなモノの首元を食い千切っている、しかし人間と大きく違うのは額に角がある。

「人間そのものだな」

「迦楼羅かるら、まだだ、準備しろ」

そういうと摩醯首羅まけいしゅらは天井に何か投げた、それは天井にくつつくと強く発光しはじめる、コレも科学班の作品だ。
辺りが明るくなると周りを鬼に囲まれていた。

「ウウウウウ」

「迦楼羅かるら、大丈夫か？」

「タイマンより大勢向きだから大丈夫だ」

そういうと迦楼羅かるらは分銅を思いつきり投げた、分銅は鬼の胸を貫き
一列全てを一掃する。

分銅が手元に戻って来るのと同時に鬼が走ってくる、人間よりも多少速いくらいだがそんなのは関係ない。

迦楼羅は鎌を逆手に持つと鬼を横薙に斬り捨てた、振り抜いた所で持ち直し踏み出しながら奥の鬼を斬った。

「鬼って弱いんだな」

迦楼羅は分銅ではなく鎌を回し、そのまま投げ入れた。

「行きは良い良い……………」

一番置くに達すると思いつき引き張る。

「帰りは怖い！」

鎌の通った跡は両断された鬼で溢れている、そして一体だけ残っている2mの巨体の鬼。

「親玉か」

「貴様ら何の用だ？」

迦楼羅はフリーズした、独り言のつもりが鬼が喋った。

「喋れるんだ」

「目的は何だ？」

「君達の掃除、って言いたいんだけど悪さしないなら見逃すよ」

「笑止、仲間を殺した奴は仇、殺す」

「残念だな」

迦楼羅は分銅を鬼に向かって投げた。

迦楼羅かるらの戦いに安心した摩醯首羅まけいしゅらは前方に目を向けた。
鬼の群れに飛び込む摩侯羅迦まこうか、摩侯羅迦まこうかは喉元を中心に攻撃している。

摩醯首羅まけいしゅらも観戦は飽きたので槍を構えた、丁度逃げ出して来た鬼の頭を貫く、そして引き抜くと同時に走った。

目の前の敵を貫き、抜くと同時に右の鬼を薙払う、鬼の体は槍のスピードに耐えきれずに脇腹がえぐれた。

大きく捻った体を戻すついでに目の前の鬼の頭吹き飛ばす、殆ど摩侯羅迦まこうかが倒してしまったので相手は壊滅。

二人が一息つくとか何がドスンと摩醯首羅まけいしゅらの隣に落ちる、それは血まみれの迦楼羅かるら。

「迦楼羅！」

「グルルルルウ」

摩醯首羅まけいしゅらが後ろを向くとそこには巨体の鬼がいる、摩侯羅迦まこうかは既に臨戦体制、摩醯首羅まけいしゅらも迦楼羅かるらの前に立ち構えた。

「貴様らも仲間を」

「喋れるのか、それなら話しは早い、お前らが人間を襲う、だから俺達はお前らを殺す、何も無差別な訳ではない、むしろお前らが仕掛けて来た事だ、被害者面するな」

摩醯首羅まけいしゅらの表情が分からない分余計に威圧感が増す。

「生きるタメに餌を食って何が悪い？ 貴様らの好きな『弱肉強食』だ」

「捕食される側も武力を行使する、食う相手を間違えたな、人間には強い自我と高い知能がある、『目には目を、歯には歯を』って言葉があるんだよ」

摩醯首羅まけいしゅらは飛込んだ、それに続いて摩侯羅迦まこうらかも走る。

摩醯首羅まけいしゅらは顔に向かって胤舜ゆいしんを突き出す、鬼はサイドステップで避けるが、そこには壁を蹴って爪を振り上げてる摩侯羅迦まこうらかがいる。

鬼は動じる事なく摩侯羅迦まこうらかを薙払う、摩侯羅迦まこうらかは地面に叩き付けられる前に受け身をとった。

「ガウ、グルウ」

摩醯首羅まけいしゅらは右脇腹めがけて突く、鬼は右足を引いて避けた、摩醯首羅まけいしゅらはその瞬間右手を逆手に持ち変え、左手を軸にして右手を引いた、胤舜ゆいしんは弧を描いて鬼の腹を切り裂く。

「グガアアアアア！」

摩侯羅迦まこうらかは鬼の胸に飛び込み、胸を大きく切り裂き、間合いを取る。鬼はフラフラになり血がとめどなく流れ出す、その瞬間、摩醯首羅まけいしゅらの隣を分銅が通り、鬼を完全に縛る。

「ハアハア、後は頼んだぞ」

「摩侯羅迦まこうらか、準備しとけ」

「ワウ！」

摩醯首羅まけいしゅらは左手を前に突きだし、右手で胤舜いんしゆんを持ち右手を大きく引いた、そして左手を軽く添えて体を沈める。

「エクステンション【延長】」

右手を突き出すのと同時に胤舜が伸びる、胤舜は鬼の胸を貫き鬼の動きを止めた。

「グルア！」

摩侯羅迦まこうらかは胤舜の上を走り鬼に向かう、最速に達した時思いつき胤舜を蹴った、摩侯羅迦は右手を大きく引いて左手で鬼の口を掴む、勢いを殺さずに右手で鬼の頭をぶち抜いた。

摩侯羅迦まこうらかは鬼の頭を貫通して真っ赤に染まった自分の腕を舐めた、返り血等を浴びて摩侯羅迦まこうらかの体は真っ赤になっている。

「こわっ」

「迦楼羅かろうら、動けるか？」

「大丈夫だ、打撲と切傷だけだからね」

傷だらけの迦楼羅かろうらと血まみれの摩侯羅迦まこうらかを従えて、埃一つ付いて無い摩醯首羅まけいしゅらは洞穴を出た。

10：鬼（後書き）

ついに10話達成です、あっという間でした、この話は20話くらいで終わって次に続くと思います。

ラストスパートがんばるんでよろしくお願いします。

11:下水道

Japan drainage ditch

毘楼勒叉びろうしやと毘楼博叉びろうはくしやは下水道を歩いている、ジメジメして臭くて暗い、最悪な3拍子が揃った。

協力者からの提供で鬼がココに住み着いているとの情報が入った、下水道は思ったよりも広く、戦うには十分なスペースがある。

下水道のせいでいつもよりイライラしている毘楼勒叉びろうしや、そしてそれを抑えなきゃいけない毘楼博叉びろうはくしやもイライラしている。

「あゝ、ムカつく、何で僕達がこんな事しなくちゃいけないんだよ、あの女つたらしにやらせればいいだろ」「

これだけの長文を一字一句間違えずにピッタリ合わせるシンクロ率、普段も合う事があるのだが性格が違うタメにそこまではない、ここまでのシンクロは皆無に等しい。

「毘楼博叉びろうはくしや、帰ったら猛抗議してやろう」

「でも帰れないんだよ、帰るには終らせるしかないんだ」

「「やっぱりムカつく」「

二人の怒りは頂点に達していた、しかしシンクロ率も頂点に達している、今なら声に出さなくても意思疎通が出来るくらいに。

下水道に入って小一時間、やっと鬼が住んでいた痕跡を発見した、しかしそこには誰もいない。

毘楼勒叉びろうろくと毘楼博叉びろうはくはイライラしながら鬼が住んでた跡を探索すると後ろから鬼が近寄って来た、鬼は息を潜め気配を消す、二人は全く気づいていない、そして鬼は毘楼博叉びろうはくに向けて拳を放った。拳は右京、毘楼勒叉びろうろくのハンドアックスに阻まれ、鬼の首元には左京、毘楼博叉びろうはくのハンドアックスが突きつけられている。

「「ねえ、君鬼だよね？僕達凄くイライラしてるんだ、君がもう少し気持ちの良い所に住んでたらサクツと殺してやろうと思ったけど辞めた、苦しみながら殺してあげるよ」」

毘楼勒叉びろうろくと毘楼博叉びろうはくの不気味なシンクロに鬼は身震いした、そこにいるのは神の代理人ではなく、悪魔の心を持った天使、そう簡単に死を提供するほど出来た天使ではない。

毘楼勒叉びろうろくは両手に右京を持ち、毘楼博叉びろうはくは両手に左京を持った、横に並ぶ二人は全く同じ、そして全く同じタイミングで地面を蹴る。毘楼勒叉びろうろくは右へ、毘楼博叉びろうはくは左へ、鏡で映したように動き鬼の両サイドを固めた。

「「死へのサーカスだ、僕達のジャグリング、これくらいで死なないでね」」

鬼は毘楼博叉びろうはくを見た、左京を振り上げる毘楼博叉びろうはく、毘楼博叉びろうはくは左京を鬼の頭に向かって投げる、鬼はそれを避けるが足元を右京がかかる。

「「鬼って馬鹿だな、わざわざジャグリングだって言ったのに」」

二人は物凄い勢いでジャグリングを始める、得物が鬼の周りを飛び交う、ハンドアックスは体にかするくらいで行き交う、避けようとするれば逆に刺さる、しかし避けなければ徐々に体は斬り刻まれる。

「アハハハ！どうしたの？死なないの？死んだ方が楽でしょ？」
二人の笑顔は全く同じ、首の角度や口角の上げかた、えくぼの出来方までが全く同じ、笑って無い本心までも。

鬼は既に片膝をついている、しかし二人の手は止まらない。
鬼は神を恐れた、神が恐怖で屈伏させた瞬間だ。

「そこにいるのは誰？」

二人は同時に入口付近に右京と左京を投げる、地面に右京と左京が刺さると入口の陰から別の鬼が出てきた。

「一人じゃなかったんだ、丁度飽きたところだしいや、君は死んで良いよ」

二人の右京と左京は先ほどまで遊んでいた鬼の頭に刺さる、鬼は頭にハンドアックスを刺し、痙攣しながら倒れた、それが示すは死。
二人は入口にいる鬼を不気味な笑みで睨む、鬼は無言で地面を蹴るとあつという間に二人の前まで来た、二人は軽々と避けるが地面に突き刺さった鬼の腕を見て苦笑いを浮かべた、地面はコンクリートでに殴つてもヒビすら入らない。

「なあ毘楼博叉ひろうはくさ！これ可笑しいよな！？絶対に拳がいかれるよな！？」

「鬼っていうから人間より身体能力が高くても不思議じゃないでしょ」

「……………そっか」

二人の座談会は毘楼博叉ひろうはくさの冷静な見解で終わった、そして終わると二

人は同時に得物を投げる、得物が鬼に当たると金属音と共に弾かれた、二人の頭にクエスチョンマークが浮かんでいる。

「毘楼博叉びろうはくさ！これはどう説明する！？」

「多分各々に進化するんだよ、この鬼は体が硬くなったんじゃない？」

「……………そうか、……………って今度は納得出来ない！コイツだって一応生物だろ、生物が‘キンツ’って音鳴らすか？」

「もつづるさいな！僕に聞くなよ！僕は鬼研究家じゃないんだよ！僕も毘楼勒叉びろうらくさと同じ知識なの！」

今回の座談会は毘楼博叉びろうはくさがキレて終った、さすがの毘楼勒叉びろうらくさもあまりの事に黙ってる。

そして二人は双子特有のテレパシーで座談会を開いた、そして出た結果が……………。

「……………どうにかなる！」

と言って二人は思いつきり突っ込んだ、二人は同時に薙払うが鬼の体に弾かれる、二人は尻餅をつき後ろに倒れ込んでしまう。

上を見上げると鬼が拳を振り上げている、二人はお互いの足の裏を蹴り間合いを取り構えた。

鬼は毘楼博叉びろうはくさに拳を向ける、それを見て毘楼勒叉びろうらくさが飛込んだ、毘楼博叉びろうはくさが避けて前のめりになった鬼の後頭部を毘楼勒叉びろうらくさが思いつきり振り抜いた、鬼は頭からコンクリートに突っ込むと毘楼博叉びろうはくさが首を斬り落とそうとする、首にめり込むだけで斬れはしない。

「あああゝ、手が痺れるう」

「そっか！毘楼博叉びろうはくさ、相手もあんなに力チ力チなら右京と同じなんじゃないのか？」

「そつか！」

二人は何かを気付いたようだ、頭をコンクリートから引き抜きフラフラになりながら立ち上がる鬼を天使の笑顔で見た、鬼の首元は大きく凹んでいる、普通の敵なら首は綺麗に斬り離れているはずだ、この傷の浅さが鬼の装甲の強さを示している。

「鉄板野郎！僕達を敵に回したのを後悔させてやる」

「叩いて殴ってジャンケンポンだよ」

二人は地面を強く蹴った、鬼は毘楼勒叉びろうろくさを殴ろうとする、毘楼勒叉びろうろくさも右京の刃を背にして鬼の拳を打った、毘楼勒叉びろうろくさは右京を手放しながら吹っ飛ぶ、しかし鬼の動きも一瞬止まる。

「毘楼博叉びろうろくさ！今だ！」

「了解だよ！」

毘楼博叉びろうろくさは毘楼勒叉びろうろくさと同じように鬼の頭を打った、鬼はフラフラになりながら体制を崩すとそれを見計らって、毘楼勒叉びろうろくさが後頭部を打った。

毘楼勒叉びろうろくさはそのまま後頭部をたこ殴りにする、ガンッ！ガンッ！と大きな音を立てて叩き続ける、そして大きく振り上げて刃を戻す、両手で握り先程付けた傷の所に振り下ろした。

「ギヤヤヤアアア！」

金属を振動させたような叫び声が下水道全体に響き渡る、そして毘楼博叉びろうろくさが突き刺さった右京の背を左京の背で思いつき殴る、右京はそのまま地面に突き刺さった、鬼の首はペンチで切ったように薄くなっている。

「うわぁ、何かグロ」

「いや、その前に腕が痺れるよ」

二人の腕は感覚がかなり薄くなっている、金属のように硬いということとは骨格が金属に近いということ、頭蓋骨等はショックを吸収するタメにあるので、全ての衝撃を通す金属は最悪の頭蓋骨、故に叩いた事でのダメージはないが脳にダメージは与えられる。

「脳みそ揺れたらうな」

「考えるだけで酔いそう」

「毘楼博叉ヒロハコ、帰るぞ、僕はもうそろそろ気持悪くなってきた」
「そうだね」

二人は鬼の死体二つを尻目に下水道を出ることにした、まだ痺れる手の震えを抑えながら。

12：神社

Japan shrine

阿修羅^{あしゅら}、緊那羅^{きんなら}、摩和羅女^{まわらにょ}の鬼は神社にいるらしい、大きい日本でも有名な神社である、ココから鬼を探し出すのは至難の技、それに加え一般人が多い、圧倒的不利である。

神が神社で戦う等笑える話である、ホームだがアウェイのような不思議な気分だった。

「はあ、何処にいるの？」

「第一鬼ってどんななの？」

「多分角が生えてるんだ！牙とかも鋭くて」

「だったら今頃大々的ニユースになってるんじゃない？」

3人に再び沈黙が流れる、テーマパークばりの大きさに加え容姿の分からない敵、完全に敵の手の平で踊っている状態だ。

「どうしました？」

「！！！」

「ここの坊主か！良かった、実は」

阿修羅^{あしゅら}は摩和羅女^{まわらにょ}の口を押さえて間合いと取る、緊那羅^{きんなら}は間合いを取るのと同時に腕輪に触れた、得物は納刀された刀、名は羅刹。

「どうした阿修羅^{あしゅら}！？坊主は親切に声をかけてくれたんだぞ！」

「それがおかしいのよ」

「飛んで火にいる夏の虫」

「お嬢さん方、どうされました？」

阿修羅^{あしゅら}は腕輪に触れた、得物は長刀、名は夜叉丸。
理解出来ない摩和羅女^{まわらじょ}と坊主、そして騒ぎを見て近寄って来た
下っぱ坊主達。

「阿修羅^{あしゅら}、コレは大乱闘だな」

「丁度良いわよ、最近運動不足でね」

「お嬢さん、そんな物騒なモノは ！」

阿修羅^{あしゅら}は坊主の烏帽子のようなモノを夜叉丸で飛ばした、坊主の頭
には角、そうココにいる坊主全員が鬼、相手が飛んで火にいる夏の
虫ならこちらも然り。

「角だ！阿修羅^{あしゅら}、角があるぞ！」

「鬼つてのも知能が低いのね、私達は同じホーリナーと貴方達みた
いなダークロードにしか見えないの」

「チッ」

坊主達は徐々に体つきが良くなってくる、そして顔はまさに鬼、鬼
は人の中に隠れて過ごしているらしい。

「阿修羅^{あしゅら}、ココって神社よね」

「そうよ」

「鬼に崇められる神つてのも滑稽よね、もしかして阿修羅^{あしゅら}だったり
して」

「鬼神って言いたいなの？」

二人はクスクスと含み笑いをする、阿修羅とは鬼神と呼ばれた神で
もある、だとしたらココにいる阿修羅^{あしゅら}は鬼の神。

摩和羅女はやつと自体が理解出来て腕輪に触れる、得物は針、名は針鬼。

「じゃあ摩和羅女、援護を頼んだよ」

「阿修羅に近寄る敵はアタシが全て殺す！」

「私は一人で戦うわよ」

「緊那羅もだ！」

二人は口角を上げると左右に散る、阿修羅は敵の真ん中に飛び込み一回転する、その瞬間阿修羅の間合いにいた鬼は両断される、鬼が恐る程の存在、それが鬼神。

「はあ、私は貴方達の神よ、神に拳を向ける何て勇気があるわね」

鬼達は無視して阿修羅に向かって走って来る、人間よりも身体能力が高いが恐るるに足らず。

「聞く耳持たず、か」

阿修羅の広い間合いに鬼は近づく事すら出来ない。

阿修羅は目の前の敵にを突くと、抜くのと同時に反転してサイドの鬼と後方の鬼を両断する。

阿修羅に若干出来た隙を鬼は見逃さなかった、鬼はあつという間に阿修羅の懷に潜り込むと拳を握る、しかし頭を針に射抜かれて倒れた、急所を一発だ。

「阿修羅、思いっきりやって大丈夫だぞ！」

「ありがとう」

摩和羅女はそのまま緊那羅の方に針を投げる、そして二人が安全に

戦っている時は遠くの鬼を射抜く、針は一度に何本も出せるので常に指の間に三本挟んでいる。

摩和羅女は遠くを気にしすぎて自分の近くを忘れていた、間合いに入ってきた鬼に気付くと、指の間に針を挟み、それを押さえるように針を握る。

「お前くらいなら近距離も大丈夫だぞ！」

摩和羅女は鬼の拳を避けて頭に針を直接突き刺した。

摩和羅女は周りを囲まれると、鬼を踏み台にして飛び上がり、上空で頭を下に向ける。

「ファイヤーワークス【花火】！」

摩和羅女の体から大量の針が放出される、それは摩和羅女の周りにいた鬼を全て串刺しにする。

しかし鬼の一体が残っているのに気が付かず、着地すると鬼の拳が振り上げられている。

「ベロシティ【光速】！」

一閃が鬼の後ろを通り鬼は両断される、そしてそれをやってのけたのは。

「摩和羅女、注意を怠るな」
「貴方もね」

緊那羅の後ろにいた鬼を阿修羅が斬った、緊那羅は笑いながら知っていると一言。

「後は親玉だけね」

「はあ、運動にもならない」

「油断大敵だ」

最後に残したのは巨体の鬼、得物を持っていない代わりに鋭い爪がある。

鬼は一瞬で消えると阿修羅達の隣まで来ていた、しかし阿修羅は鬼の喉元に切っ先を当てている。

「速いけど見える」

「チツ」

阿修羅達は何とか捉えられた、しかし鬼が異常に速い事には変わらない。

阿修羅と緊那羅が構えると、摩和羅女が鬼に針を投げた、鬼は軽々と避けるがそこには阿修羅が先回りしている、阿修羅の突きを爪でいなすと阿修羅は体制を崩した、鬼は爪を振り下ろす、爪は阿修羅の腕をかすめたが大した事は無い。

その隙に後ろに回りこんでいた緊那羅は斬ろうとするが、一瞬で鬼がいなくなる。

「キヤア！」

阿修羅と緊那羅が目をやると摩和羅女が背中から血を流して倒れている、鬼の爪には摩和羅女の団服の千切れた跡が。

「摩和羅女！」

「行くな阿修羅！」

「何で!？」

「今行ったらアイツに殺られるわよ」

阿修羅^{あしゅら}は唇を噛み締め構えた、先に地面を蹴ったのは緊那羅^{きんなら}、その後を追って阿修羅^{あしゅら}が走る。緊那羅^{きんなら}は間合いに入ると抜刀様に攻撃する、しかし軽々と避けられた、阿修羅^{あしゅら}は鬼が避けた所に横薙に斬るが爪で受け止められる、間合いを取ろうとした瞬間肩口を切られた。緊那羅^{きんなら}は納刀せず振り向き様に斬りかかる、鬼は避けると緊那羅^{きんなら}の腕を掴んで持ち上げた。

バキバキバキバキ！

「グワアアアアア！！」

緊那羅^{きんなら}の腕の骨が砕ける音、阿修羅^{あしゅら}は肩の痛みを堪えて斬ろうとするが、軽々と弾き飛ばされてしまった。

緊那羅^{きんなら}は離されると同時に脇腹から肩にかけて爪で切られた。

「緊那羅^{きんなら}！」

「……………」

阿修羅^{あしゅら}の表情が怒りに歪む、先程弾かれた時に肋骨を折りフラフラの状態で、右足を引き左足を前に出し、切っ先を左後ろに向ける。

「ベロシテイ【光速】！……………っ！」

一瞬光速に達するタメに体が軋む、そして鬼の手前で減速してしまった、鬼は阿修羅^{あしゅら}の両手をまとめて掴み、持ち上げる、鬼は人差し指を突き出すといったぶるように腹に突き刺す。

「グハッ！」

とめどなく流れる血と吐血、鬼は爪を引き抜くと次は肩に突き刺す。

「ッ！」

阿修羅^{あしゅら}の意識は飛びかけていた、そして最後に指を向けた先は額、人差し指をが髪に当たると髪の毛が2、3本舞^{あしゅら}う、そして阿修羅^{あしゅら}が目を開き死を覚悟した瞬間、鬼の悲鳴と共に阿修羅^{あしゅら}は地面に落ちた。阿修羅^{あしゅら}が見ると腕には針が刺さっている。

「阿修羅^{あしゅら}、もう腕は、使えない、頑張れ」
「摩和羅女^{まわらご}……………」

鬼の両腕はブランと垂れている、阿修羅^{あしゅら}は腕輪に触れて夜叉丸を握る、そして立ち上がり夜叉丸を鬼の額に突き刺した。
鬼と同時に阿修羅^{あしゅら}も倒れる、そこに並ぶは大量の鬼の死体と3人のホーリナー！。

真っ白な部屋に真っ白なベッド、そして真っ白な包帯で包まれた3人のホーリナー、最初に目を覚ましたのは阿修羅^{あしゅら}、痛むハズの体で軽々と起き上がると周りを見渡す。

そして焦り隣にいる二人を起こした、二人も痛むハズの体で軽々と起きる。

「阿修羅^{あしゅら}、おはよう」

「はあ、呑気ね」

「ココは何処だ？」

「私も今起きたから分からない、でも傷の処置がされてるから敵に拉致された訳じゃないと思う」

そんな話をしていると扉が開き人が入って来た、銀色の髪の毛にメガネ、そして真っ白なコートにカミウムマーンの刺繍。

「『ボス！？』」

「おつはよ、元気になった？」

「その前に何でボスがこんな所にいるの？」

「阿修羅^{あしゅら}、その前にココは何処なの？」

「ココは協力者の家だよ、君達は神社で倒れてるところを協力者に拾われたんだ、幸いにもココの協力者が医者で助かったよ」

金色孔雀^{こんじきくじゃく}は椅子に座りながら楽しそうに話す、確かに金色孔雀^{こんじきくじゃく}の言う通り不幸中の幸いだ。

「それで何でボスがいるの？」

「そうよ、あんたも私達ばかり使ってないで任務しなさいよ」

「だって心配だから医療班と一緒に来ちゃったんだもん！俺の可愛い女の子が死にかけたとなったら食事も喉が通らないよ」

3人は呆れて言葉を失った、こんだけホーリナーが死にものぐるいで戦っているのに支部長はこんなにおちゃらけている。

「はあ、馬鹿な上司を持つと苦労するわね」

「大丈夫か阿修羅？」

「大丈夫よ、それより早く任務に行かないと」

「そうね」

3人はベッドから下り、団服を取った時にある事に気付いた、自分達は上半身は包帯と下半身は下着一枚ということに。

「大胆だね」

「はあ、最悪」

「死ね！この女ったらしが！」

緊那羅きんならが金色孔雀こんじきくじゃくを思いっきり殴った、金色孔雀こんじきくじゃくは吹っ飛び、泡を吹いている。

3人は団服に着替えて病室をあとにした、重傷患者一人を残して。

12：神社（後書き）

最近書き貯めてる小説が減ってきました、色々と用事がありすぎて暇がありません、有言実行するために頑張ります。
評価やコメント、アドバイスなど貰えると有難いです。

13：亀裂

J a p a n c e n t e r o f T o k y o

阿修羅^{あしゅら}、緊那羅^{きんなら}、摩和羅女^{まわらによ}は都心を散歩している、いや、正式には鬼を探している、しかし都心から人を真似た鬼を探すのは、砂浜からビーズを探すくらい気が遠くなる事だ、故に諦めて都心を楽しむという事になった。

阿修羅^{あしゅら}と緊那羅^{きんなら}は以前に來た事があるので懐かしいといった感じだ、しかし摩和羅女^{まわらによ}は生まれた時から山で育ったタメにこんな所に来た事が無い。

「凄い！こんなに人がいるぞ！これから何が始まるんだ！？」

「阿修羅^{あしゅら}、あなたのペットでしょ、首輪で繋いでおきなさいよ」

「はあ、摩和羅女^{まわらによ}！迷子に……………、ってもういない」

「あの馬鹿雌！」

二人の任務は鬼探しと摩和羅女^{まわらによ}探しになった、二人は頭を抱えて摩和羅女^{まわらによ}が行きそうな所をしらみ潰しに探す事にした。

「阿修羅！緊那羅！何か凄い……………、って二人共迷子か？世話がかかるな」

馬鹿、ココに自分の否を認めない馬鹿がいる、しかし馬鹿の良いところは超ポジティブシンキングということだ。

「くれーぷ？何か美味そうだ！」

摩和羅女はカップルが受け取ったクレープを横取りして一口で食べた。

「美味しい！コレ美味しいぞ！」

盗られた事に気付かない一般人は、その変化を埋めるために再びクレープが手渡される、しかし摩和羅女が再び横取りした。

「美味しい！美味すぎる！最高だぞ」

摩和羅女は横取り作戦で食べ続けた。

阿修羅と緊那羅はイライラが治まらず途中のクレープ屋でクレープを調達していた。

「はあ、クレープでも食べなきゃやってられないよね」

「摩和羅女の奴、何処行つたの？コレで鬼の首持つてくれば帳消しにするのに」

「摩和羅女の事だから首を持って来るといつか、生きたまま連れてくるんじゃない」

「確かに」

二人は口の周りにクリームを付けながら摩和羅女の搜索をしている、周りから見れば変な二人だが見えないのを良いことにやりたい放題。

「阿修羅、アイスがあるわよ」

「はあ、食べに来たんじゃないのよ」

「いらないの？積み放題よ」

「……………イチゴで」

緊那羅は普通に中に入り、コーンを勝手に取ってアイスに乗せた、阿修羅にイチゴのアイスを手渡すと自分のコーンを取る。

次々と重ねていき、最終的に5段になった、阿修羅は開いた口が塞がらない。

「行くわよ」

「ホーリナーって便利ね」

「孤独に生きてるんだからこれくらいの楽しみがなきゃ」

阿修羅は納得してアイスをスプーンですくって口に入れた、緊那羅は一口で半分、二口で一つを食べ終えた。

「ホーリナーになる前からそんなだったの？」

「何で？」

「一応私達女の子じゃない、少しは考えたら？」

「良いのよ、そんなちまちま食べてても味がしないじゃない」

「彼氏とかいなかったでしょ？」

「いたわよ！ホーリナーになるまではね」

緊那羅きんならが若干悲しい顔をしたので阿修羅あしゅらはこれ以上聞かない事にした。

阿修羅あしゅらはアイスを食べ終えて少し緊那羅きんならのアイスを貰おうとした、しかし緊那羅きんならのアイスは既がない。

「もう食べたの？」

「そうよ」

「太らないの？」

「別にあれだけハードな仕事すれば太るモノも太らないわよ」

「確かに」

「阿修羅あしゅら、こんな所に団子があるわよ、ちゃんと邪道のゴマ味も」

「はあ、食べてばかり」

摩和羅女まわらにょの事も鬼の事も忘れて、二人は食べ歩きになっている。

摩和羅女はクレープ片手に阿修羅と緊那羅探し、あの後計10個のクレープを食べ終え、一つをお持ち返りしてその場を離れた。しかしクレープを食べ終え阿修羅と緊那羅の名前を叫んでる時、一つある事に気付いた。

「もしかしてアタシが迷子なのか？アタシが阿修羅と緊那羅に置いて行かれたのか？」

摩和羅女は立ち止まりその場でうつ向いてしまった、そして抑えきれずに目から大粒の涙が頬を伝う。

「うわああああ！阿修羅ああ！緊那羅ああ！何処に、何処にいるんだ！？」

一人で泣いている摩和羅女を慰める者は誰一人いない、摩和羅女は手で涙を拭いながら歩き続けた。

阿修羅と緊那羅は団子の山を持ちながら食べ歩き、ではなく摩和羅

女探しと鬼探し。

「ゴマって美味しいの？」

「はべふ（食べる）？」

「一つだけ」

緊那羅きんならは阿修羅あしゅらの団子の山から一つ貰い頬張った、その瞬間手から緊那羅きんならの団子が落ち、フリーズする。

「そんなに美味しい？」

「……………」

「どうしたの？」

「飛鳥？飛鳥じゃないのか？やっぱり飛鳥だ、久しぶり！飛鳥がいなくなつて心配してたんだぞ、みんな知らないって言っし、どうしたんだ？」

阿修羅あしゅらと緊那羅きんならの視線の先には男性が一人立っている、緊那羅きんならの口から団子が落ち阿修羅あしゅらは腕輪に触れた、得物は長刀、名は夜叉丸。

「おいおい物騒だな、飛鳥、この子は誰？」

「飛鳥って、もしかして緊那羅きんならの前の名前？」

緊那羅きんならは無言で頷いた、そして男性が阿修羅あしゅらと緊那羅きんならに話しかけた
「いうことは、鬼。」

「飛鳥忘れたのか？俺だよ、章吾だよ」

「わ、忘れるわけないでしょ、あんたは、私の、彼氏だった」

「嘘……………」

緊那羅きんならは涙を流しながらその場に崩れ落ちた、阿修羅あしゅらは気にせずに

構える。

「貴方、鬼でしょ」

「鬼？君大丈夫？」

「私達は私達の仲間と貴方みたいな魑魅魍魎にしか分らないの」

「そんなの信じられわけないだろ」

「あくまでシラをきるのね」

阿修羅^{あしゅら}は拳を握り近くにいた一番怖そうな人を殴った、しかしその人は何事も無かったかのように歩き去る。

「分かった？」

阿修羅^{あしゅら}は切っ先を鬼に向けた、鬼は徐々に顔の骨格が変わり犬歯が長くなり牙と化す。

「辞めて！阿修羅^{あしゅら}お願い、この人は私の好きな人なの、だから殺さないで！」

「コイツは鬼よ！緊那羅^{きんなら}の彼氏はもういない、ここにいるのはダークロード、それくらい貴方なら分かるでしょ？」

緊那羅^{きんなら}は阿修羅^{あしゅら}と鬼の間に体を入れた、鬼は不気味に笑い緊那羅^{きんなら}を盾にする、緊那羅^{きんなら}の目からは大粒の涙が流れる。

「過去に未練があるのは貴方だけじゃないの！みんな過去を抱えてホーリナーになってる、貴方もそうだったんじゃないの！？」

「うるさい！うるさいうるさいうるさい！あんたに何が分かるの！この人は鬼でも私が唯一愛した人、あんた何かに殺させない！」

「ありがとう飛鳥、俺も君の事を愛してるよ」

「章吾……………」

阿修羅^{あしゅろ}は鬼と緊那羅^{きんなら}の光景を見て絶望に近い感情が湧いてきた、鬼は体を人間に戻り緊那羅^{きんなら}を後ろから抱きしめる、緊那羅^{きんなら}は後ろから回された腕に触れて笑みを溢す。

「……………緊那羅^{きんなら}」

「阿修羅^{あしゅろ}、あんたが章吾に刃を向けるなら私はあんたを斬る」

「悪魔に墜ちるっていうの!？」

「章吾のタメなら悪魔になれる、ねえ、章吾」

「大好きだよ、飛鳥」

緊那羅^{きんなら}は鬼の方を向き、鬼に腕を回して顔を近付けた、鬼も緊那羅^{きんなら}の顔に顔を近付ける、そしてそつとお互いの唇を合わせた。しかしその瞬間緊那羅^{きんなら}の腕から崩れ落ちる。

「章吾!」

鬼の頭から血がながれ即死状態、小さな穴が貫通している、緊那羅^{きんなら}はそれが何かすぐに理解出来た。

「摩和羅女^{まわらによ}!!」

「大丈夫か緊那羅^{きんなら}? そいつは鬼だろ?」

摩和羅女^{まわらによ}は鬼を抱き抱える緊那羅^{きんなら}のもとに走って来た、しかし緊那羅^{きん}は怒りに溺れた顔で摩和羅女^{まわらによ}を睨んだ、その顔に摩和羅女^{まわらによ}は一步退く。

「緊那羅^{きんなら}、怖いぞ」

「緊那羅^{きんなら}、そいつは鬼なのよ、私達は間違っていない」

緊那羅きんなんらは鬼を抱き上げてその場から離れる、摩和羅女まわらじょが追おうとするが阿修羅あしゅらが引き止めた。

「何故だ！何故止める！？」

「今の緊那羅きんなんらは冷静さを失ってる、少し頭を冷やさせてから連れ戻すわよ」

阿修羅あしゅらは摩和羅女まわらじょの腕を掴み緊那羅きんなんらとは別の方向歩いて行つた、摩和羅女まわらじょは戸惑いながらも阿修羅あしゅらに従う。

亀裂、それは露骨な形でホーリナーを切り裂いた。

14：敵対

J a p a n p a r k

阿修羅^{あしゅら}と摩和羅女^{まわらによ}は公園にいた、ホーリナーの携帯は全員の居場所
が分かるようになっていて、阿修羅^{あしゅら}は摩和羅女^{まわらによ}を探す時にコレを使
えば良かったと後悔した。

公園にいる理由は緊那羅^{きんなら}のGPSが公園の中にあるため、もしかし
たら携帯を捨てたという可能性もあるが、それも足を追う一つの手
となる。

阿修羅^{あしゅら}が携帯のGPSのポイントと目の前を見くらべる、そこには
緊那羅^{きんなら}が座っている、鬼の死体を前にして。

摩和羅女^{まわらによ}はその異様な光景に阿修羅^{あしゅら}の後ろに隠れた、阿修羅^{あしゅら}は険し
い表情で緊那羅^{きんなら}を見る。

「来たのね」

「冷静になった？」

緊那羅^{きんなら}は腕輪に触れる、得物は納刀された刀、名は羅刹。

緊那羅^{きんなら}は羅刹を左手で握ると、振り返り構えた。

「はあ、それが答えなの？」

「あんた達は私の仇よ」

「悪魔に墜ちるっていうの？鬼を愛した事は誰も咎めない、だから
目を覚まして」

「愛した人を殺された悲しみがあんたに分かるの？」

阿修羅は黙り込んでしまった、確かに阿修羅に愛した人はいない、だからと言って今の緊那羅のやっている事を肯定する事も出来ない。

「摩和羅女、頼んだわよ」

「しかし阿修羅」

「もう緊那羅は緊那羅じゃないの！分かって、摩和羅女」

阿修羅は涙を流しながら腕輪に触れた、得物は長刀、名は夜叉丸。

摩和羅女は間合いを取り腕輪に触れる、得物は針、名は針鬼。

阿修羅は切っ先を斜め下に向け、背筋を伸ばす、緊那羅も構えると低く沈んだ。

先に動いたのは緊那羅、緊那羅は地面を蹴ると鞘走りを利用して横薙に斬る、阿修羅は軽々と受け太刀すると緊那羅は止まり、睨みあう。

「私は手加減しない、全力であんた達を殺すわよ」

「私達は貴方を全力で連れ戻す」

緊那羅と阿修羅は間合いを取ると同時に構える、阿修羅は地面を蹴ると半身になりながら緊那羅を突く、緊那羅は鞘で切っ先を受け止めると抜刀して斬りかかる、阿修羅は一歩前に出て夜叉丸をずらして柄で羅刹を受け太刀する。

阿修羅は前蹴りし、緊那羅を突き飛ばす。

「やっぱり強いわね」

「そう？私は貴方と戦えて楽しいわよ」

「戦闘神さまは怖いねえ、戦いを楽しむなんて」

「運動を楽しんでるのよ」

緊那羅は鼻で笑うと抜刀した、そして左手に鞘を握り右手で羅刹を

持つ、阿修羅あしゅらは緊那羅きんならの抜刀の型を見たことがない、何故なら緊那羅きんならは阿修羅あしゅらの前で本気を出した事が無いから。
納刀は相手の出方を伺った防御的な型、抜刀は両手を使えるタメ攻撃的な型。

「良いこと教えてあげる、この型はステージ5でしか使った事ないので、あんたの事認めてあげる」

「はあ、認めなくて良いから戻って来て」

「私の首を持ち帰る事ね」

緊那羅きんならは地面蹴る、素早い動きで逆手で持った左手の鞘で殴りかかる、阿修羅あしゅらは軽々と夜叉丸で受けるが、阿修羅あしゅらの左からは羅刹が斬りかかってきた、何とか腕輪で防御するが力押しされる。

「グッ！」

緊那羅きんならは前蹴りで阿修羅あしゅらを突き飛ばすと、鞘で阿修羅あしゅらの頭を殴った。

「クハッ！」

「殺氣がない、それじゃあステージ4も殺せないわよ」

「緊那羅きんならは、霊じゃ、ない、私達の、仲間」

阿修羅あしゅらの頭からは血が流れる、殴られたせいで右目が見えにくくなつた。

阿修羅あしゅらは服の腕を切り、頭に巻いて応急処置をした。

「この期に及んでまだ仲間なんて温い事言ってるの？私の殺氣が分からない訳じゃないでしょ？」

阿修羅あしゅらが気付かない訳が無かった、緊那羅きんならの今までに感じた事の無

い殺気。

緊那羅きんならは阿修羅あしゅらを睨み、構えようとした時、いきなりバックステップをした、そして地面に針が突き刺さる、緊那羅きんならが針の飛んで来た方向を見ると摩和羅女まわらじょがいる。

「あんたはそうやって章吾を殺した、味方にすると心強いけど敵にすると卑怯の一言ね」

「頼む！目を覚ましてくれ、緊那羅きんなら！」

「正気よ、コレが私の選んだ道、ただそれだけよ」

「緊那羅きんなら、変わってしまったんだな」

「そうかもね」

緊那羅きんならは今度こそ構える、阿修羅あしゅらは右手一本で夜叉丸を持ち腕は力無く垂れた、そして体がフラフラと揺れ始める。

「諦めたの？構えなさいよ」

「貴方だけが力を抜いてたと思わない事ね」

「もしかしてそれが本気って事！？笑わせないで、そんな力の入らない無い構えで何が本気よ！」

「そう、それなら行かしてもらうつわよ」

阿修羅あしゅらは前に倒れるように地面を蹴る、夜叉丸を引きずりながら緊那羅きんならの懷に潜り込む、阿修羅あしゅらは右腕一本で全身を使いしなやかに切り上げる、緊那羅きんならは軽々と鞘で防ぐと夜叉丸は弾かれた。

「こんな力の無い斬撃始めて！馬鹿にしないで！」

阿修羅あしゅらは口角を上げると、弾かれた反動で左手に持ち変える。

緊那羅きんならは変動的な動きに戸惑うも、阿修羅あしゅらのしなやかな横薙の攻撃を羅刹で防いだ。

再び弾かれると左腕を大きく開いて遠心力を殺さずに、左足で回し蹴りを放つ、緊那羅きんならは鞘で防ぐが鞘ごと頭を蹴られた。

「クアッ！」

切れてはいないが腫れている、緊那羅きんならは間合いをとった、阿修羅あしゅらの変速的な攻撃について行けてない。

緊那羅きんならの型は防御と攻撃を一貫した型、しかし阿修羅あしゅらの型は防御を捨て変速的な型で相手のペースを乱す型、それにまんまと緊那羅きんならはハマってしまった。

「やりづらいわね」

「どう？本気で動いてる霊にはやりづらいけど、頭がある人間相手には抜群でしょ。」

それに人間は少しのキズでも動きはにぶる、力は無くても骨にまで達すれば動きに支障がでる、強いでしょ？」

「厄介ね、でもそんなにベラベラ喋って良いの？敵に塩を送るようなモノよ」

「貴方の型は見きつた、私の型の種明かししなきゃフェアじゃないでしょ？」

阿修羅あしゅらは不適な笑みを浮かべる、緊那羅きんならはその笑みに背筋が凍る思いをした。

「さすが戦闘神、戦いを楽しんでいるのね」

「はあ、違っって言うてるじゃない、別に貴方を斬らないで済めばそれで良いのよ、でもこんなに頭を使って体を動かしたのは始めて、楽しい」

「それが戦闘を楽しんでるって言うのよ、戦闘神様」

阿修羅はそうかもねと一言いって再び揺れ始めた、緊那羅は阿修羅に先手を取られるまえに地面を蹴った。

阿修羅は右手に持つている夜叉丸を逆手に持ち変え、緊那羅の羅刹の攻撃を、体を後に向けながら腕から肩にかけて夜叉丸を沿わして防ぐ、そしてそのまま回し蹴りを放った、しかし緊那羅は羅刹を納刀して防いだ。

「同じ攻撃は何度も通じないわよ」
「そう」

阿修羅はそのまま鞘を左足で蹴り、右足を軸にして回転する、体制を崩した緊那羅に背を向けた時、夜叉丸を左手に持ち変え逆手で握る。

左足を大きく振って遠心力を付けて斬りかかる、しかし緊那羅は抜刀して羅刹で防いだ。

緊那羅は左手の鞘で殴りかかろうとする、阿修羅は左足を地面に付けて右足で緊那羅の手を蹴った。

「やるわね」
「ありがとう」

阿修羅は間合いを取り、緊那羅は腕輪に触れて鞘を戻す。

「摩和羅女、手出ししないでね」

「だけど阿修羅！」

「合図したらお願い」

「阿修羅………」

「あんたも戦いに溺れたのね」

阿修羅は笑顔を作ると涙を流した、その光景に摩和羅女も緊那羅ま

でも戸惑った。

「こんな苦しい思い、摩和羅女にはさせられない」

「阿修羅、摩和羅女は頼んだわよ」

「阿修羅！緊那羅！」

二人は同時に地面を蹴った、先に仕掛けたのは阿修羅、先に体を動かし右手は動かさずに回転を始める、緊那羅は羅刹で斬ろうとするが、右腕が凄まじい勢いで振られる、緊那羅は鞘で防ぐが阿修羅のしなやかな腕の勢いは止まらない、緊那羅は羅刹も使い阿修羅の攻撃を受け流す。

阿修羅は勢い余って緊那羅に背中を向けた、緊那羅が斬ろうとした瞬間、阿修羅は半身になりながら緊那羅の喉元めがけて突きを放つ、緊那羅は間一髪の所で夜叉丸の切っ先を羅刹の鞘に納める。

「へえ」

「がら空きよ」

「どうかしら？」

阿修羅は夜叉丸から手を離し、左足で今までより速い回し蹴りを放つ、緊那羅は夜叉丸を抜き、羅刹を納刀させて阿修羅の足を防いだ。

「馬鹿の一つ覚え？」

「それは貴方」

阿修羅は足を曲げて、羅刹と腕で出来た空間に足を入れる、腕輪に手を触れ夜叉丸を地面に突き刺し、足を上げたまま踏ん張ると、羅刹を蹴り飛ばす。

「なっ!？」

緊那羅^{きんなら}が腕輪に触れるより速く緊那羅^{きんなら}の左腕を掴む、そしてそのまま緊那羅^{きんなら}の背後に回り込むと緊那羅^{きんなら}の左腕の関節を外した。

「グワアアアアア！」

そして右腕を取り背後で関節を固めると左腕を緊那羅^{きんなら}の首に回し動きを封じる、緊那羅^{きんなら}は痛みで汗が流れ胴着がびしょびしょになっている。

「私の、負けね、殺し、て」

「摩和羅女^{まわらにょ}！」

摩和羅女^{まわらにょ}からの返事はない、しかし針を投げる準備は出来ている。

「阿修羅^{あしゆら}、殺して、くれて、ありが、とう」

「摩和羅女^{まわらにょ}！早くして！………緊那羅^{きんなら}が可哀想」

「でも！阿修羅^{あしゆら}の腕が！」

「場所は分かるでしょ！？大丈夫、緊那羅^{きんなら}の苦しみに比べたら穴の一つや二つ」

「ゴメン！阿修羅^{あしゆら}！」

緊那羅^{きんなら}は最後に微笑み、涙を流した。

針鬼は阿修羅^{あしゆら}の腕を貫き、緊那羅^{きんなら}の首を貫いた、緊那羅^{きんなら}の全身の力は無くなり、阿修羅^{あしゆら}の腕の中で人形のように倒れた。

「摩和羅女^{まわらにょ}、どう？」

摩和羅女^{まわらにょ}は傷口や脈、そして瞳孔などを見て阿修羅^{あしゆら}の目を見る。

「大丈夫、仮死状態だ」

「ありがとう」

「阿修羅の腕は大丈夫か？」

「神経もあるし動く、ちゃんと痛いから大丈夫よ」

阿修羅は緊那羅を抱きかかえて立ち上がった、阿修羅の腕の中で力無く腕を垂らす緊那羅、その表情は喜びに満ちている。

その笑顔は愛する人がいない苦しみから解放された笑みか、仲間を傷付けずに済む安堵の笑みかは、まだ分らない。

15：備蓄倉庫

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

緊那羅きんならは自分の部屋のベッドに寝かされている、隣には阿修羅あしゅらと摩和羅女まわらによ、首元にはあえて傷を残している、阿修羅あしゅらの腕も然り。

金色孔雀こんじきくじゃくへの報告は人間を操る鬼に緊那羅きんならが操られた事にしておいた、二人とも無理があるのは分かっていたが建前だけでも無いしめしがつかない。

緊那羅きんならはあれから2日間ずっと眠っている、摩和羅女まわらによや医療班による蘇生術は終わっているのもうそろそろ起きる頃。

しかし起きてから何があるかは二人には分からない、もしかしたら二人とも斬られるかもしれない、それでも二人は緊那羅きんならを信じていた。

「う……………、うつん」

緊那羅きんならはゆっくりと目を開いた、摩和羅女まわらによと阿修羅あしゅらは息を飲み緊那羅きんならを見つめる。

緊那羅きんならは二人を確認すると腕輪に触れようとした、しかしそれより速く阿修羅あしゅらが口を開く。

「緊那羅きんなら、聞いて」

「何を？分かってるでしょ、私は愛する人をあんた達に殺された、この世で一番大切な人を殺された気持ちがあんた達に分かるの！？」

阿修羅あしゅらはうつつ向いたまま黙ってしまった、その時摩和羅女まわらによは勢い良く立ち上がる。

「アタシには分かる！アタシのかか様はアタシが殺した！」

「あんたの手で殺した訳じゃ無いでしょ」

「この手で殺した、かか様はある日いきなりアタシに襲いかかって来た、アタシにはそれが理解出来なかった、でも分かる、このままだと殺される、だからアタシは生きるタメにかか様を殺した。」

アタシは愛する者を殺す苦しみも、愛する人を無くす苦しみも一遍に味わった、かか様が何故アタシに刃を向けたのか今だに分からない、殺した事を後悔してる、かか様を殺したアタシを恨んでる、でもアタシは必死に生きた、生きたからまた大切な姉様に会えた」

摩和羅女まわらにょが意味する姉様、それは二人が痛いくらい理解している、緊那羅きんならは腕輪から手を遠ざけると右腕で涙を拭った。

「私は愛する人が死ぬ悲しみは分からない、でも一番大切な人を傷付ける苦しみなら分かる、緊那羅きんなら、貴方を殺さないように戦うのは大変なんだから、貴方は私より強い、だから私も本気を出さなきゃ殺される、でももしかしたら殺してしまうかもしれない、そんな中で頭を使って貴方を挑発して、……動けないようにして、もうこんな苦しい思いさせないで、貴方を傷付けるくらいなら死のうとも考えた、それくらい辛かったんだから」

阿修羅あしゅらはうつ向きながら涙を流した、涙はスカートを握った手の甲に落ちる、姉妹のように仲の良い3人、お互いを傷付ける苦しみはお互いがよく分かっている。

「ごめんなさい、でも私はもう過ちをを犯した、それでもあんた達は私を受け入れられるの？」

「何を言う、緊那羅きんならはアタシの姉様だ、受け入れるに決まってるだろ」

「それに、緊那羅きんならは鬼に操られてた、そう報告書に書いてあったわよ」

緊那羅きんならは阿修羅あしゅらに抱きつき大きな声をあげて泣いた、摩和羅女まわらによはそれを見て抑えていた涙が頬をつたう、それをみて阿修羅あしゅらは摩和羅女を抱き寄せた、阿修羅あしゅらは二人の頭に顔を埋めて涙を流す、殺しあった傷を洗い流すように。

3人は落ち着くと身支度をした、まだ任務は残ってる。

3人が部屋を出ると壁に寄りかかっている金色孔雀こんじきくじゃくがいた、3人は軽く目を合わせるだけで素通りしようとした。

「全部聞かしてもらったよ」

金色孔雀こんじきくじゃくはそう言う和阿修羅あしゅらが提出した報告書をその場で破いた、3人の顔色は陰しくなる。

「嘘は良くないな」

「何が言いたいのか？罰なら私が受ける、この二人はホーリナーとして正しい選択をしたただけだ」

緊那羅きんならは金色孔雀こんじきくじゃくの前に立ち頭を下げた、プライドの高い緊那羅きんならがこういう事をする事は皆無。

「当たり前だよ、緊那羅きんなら、君はダークロードに加担した、その罪は重い、それに君のした行為は神を侮辱する行為だ」

「殺すか？記憶を消すか？」

「そんな事は私がさせない、緊那羅きんならは大切な仲間、場合によっては

私は緊那羅を助ける」

阿修羅は腕輪に手を近付けた、摩和羅女も同じ、緊那羅はそれを制止しようとするが、それよりも速く金色孔雀が前に出た。

「君達、自分の立場が分かってないみたいだね、ダークロードに加担した緊那羅を独断で追った事、報告書に嘘を書いた事、それを大目に見てあげようと言ってるんだよ」

「そうよ、コイツも鬼じゃない、記憶を消すくらいだろう」

「それがダメなの！」

「どうやら君達にも罰が必要みたいだね」

3人は息を飲む、金色孔雀はポケットに手をつ込み嫌な笑みを浮かべた、そしてポケットから鍵を取り出す、その鍵が示すのは罰への片道切符。

「備蓄倉庫の掃除頼んだよ」

「「「えっ?」」」

「だからあ、備蓄倉庫の掃除、これが君達の罰」

「本当にそれだけで良いの？」

「当たり前だろ、君達3人を失うのは日本支部にとって大打撃だ、それにホーリナーも人間だもん、過ちの一つや二つ許すよ、死人も出なかったし」

「良かったね、緊那羅、摩和羅女」

阿修羅が笑顔で二人を見ると、床に座り込んで肩を抱き、齒をガチガチと震わせながら震えていた、顔は青ざめ、表情は恐れに満ちている。

阿修羅は不安になり二人の肩を揺らして問掛けるが返事はない、そして見上げると恐ろしい笑みを浮かべた金色孔雀がいる。

「君達に拒否権は無いよ、阿修羅^{あしゅら}、二人を連れてきて」

金色孔雀^{こんじきくじゃく}は鍵を人差し指で回しながら歩き始めた、阿修羅^{あしゅら}は緊那羅^{きんなら}と摩和羅女^{まわらにょ}に肩を貸して金色孔雀^{こんじきくじゃく}の後を追う。

地下の多目的スペースの上にある備蓄倉庫、そこは扉越しても分かるくらいに異様なオーラを放っている。

金色孔雀^{こんじきくじゃく}は鍵を開けると、扉を開けて3人に中に入るように指示する。

3人が中に入ったのを確認すると鍵を閉め、外から灯りを付けた。

「『イヤアアア！』」

3人のつんざくような悲鳴、そして大きな物音、扉を必死に叩く音、助けを求める声。

3人のトラウマがまた一つ増えた。

15：備蓄倉庫（後書き）

やっと仲直りしました、備蓄倉庫の中身は想像にお任せします、精神力のあるあの3人がトラウマになるくらいの恐怖です。

評価やコメント、アドバイスをいただけると今後の励みになります、良ければお願いします。

16：前夜

Japan VC SO Japan branch office

迦楼羅、摩醯首羅、摩侯羅迦は日本支部に戻って来ていた、理由は鬼の情報を掴み、最後の戦いの邪魔となる鬼を排除しおえたため、着々と日本支部では鬼を一掃する準備が出来ている。

しかし部長室には誰もいない、ココに迦楼羅達を呼んだのは金色孔雀、呼んだ張本人がいない事に摩醯首羅はイライラしていた。

「アイツは抜けている、緊張感が足りない」

「まあ良いんじゃないの、ゆっくり休んでようよ」

「そうだぞ摩醯首羅！そんなにイライラしてたら将来つるつばげ」

最初は摩醯首羅の出す負のオーラに着いて行けなかった迦楼羅だが、最近はそのを受け流す事を覚えた、慣れとは怖いものだ。

「何だよ、お前らもいたのか」

「久しぶり！」

エレベーターからの階段を上がって来たのは毘楼勒叉・毘楼博叉ペア、二人も金色孔雀に呼ばれた。

毘楼勒叉は金色孔雀がココにいない事を聞いてキレた、そしてそれをなだめる毘楼博叉、いつもの光景だ。

「あの女つたらし、僕達を集めて自分が来ないなんて何様のつもりだ」

「そつえば摩和羅女の車はあったよな、っていうことは摩和羅女・

緊那羅・阿修羅と金色孔雀が何かしてるんじゃないのかな？」

迦楼羅の言った事に全員が反応した、そして各々が各々の思考を廻らせる。

「（女だけに美味しいモノ食わしてるのか！？）」

「（ついにホーリナーにも手を出したか）」

「（もしかして僕達に内緒で秘密の特訓とか！？）」

「皆の考えに水をさすようで悪いけど帰って来たよ」

迦楼羅が指差した方には笑顔の金色孔雀がいる、そして後ろからは衰弱しきった3人が歩いて来て、真ん中で全員倒れた。

「（そんなに食わされたのか！？）」

「（そんなにハードなのか！？）」

「（（そんなに戦ったの！？））」

金色孔雀は笑顔で座ると迦楼羅と女3人以外がデスクの前に集まる、その表情は全員が険しい。

「「「何があつた！？」「」「」」

迦楼羅は4人をシカトして倒れてる3人の方に行った、3人は衰弱しきりピクリとも動かない、乱れた団服に髪の毛、そして頬の涙の痕。

「実は3人に備蓄倉庫」

「「「イヤアアア！！」「」「」」

‘備蓄倉庫’という一言で3人は起き上がった、そして3人は抱き

合いお互いを慰めるように震えている。

「ボス、3人を備蓄倉庫に入れた？」

「掃除してもらったんだあ」

迦楼羅^{かるら}は呆れて頭を抱えた、他の4人は備蓄倉庫を想像して震えている、全員が備蓄倉庫の事を知っているからだ。

「とりあえず、みんなに集まってもらったのは備蓄倉庫の話をするからじゃない、迦楼羅達^{かるら}が入手した鬼に関する情報の整理、考察、対象だ」

その瞬間部長室にいるホーリナー全員の顔が変わった、今まで脅えていた阿修羅達^{あしゅら}も、震えてあた摩醯首羅達^{まけいしゅら}も、頭を抱えていた迦楼羅^{かる}も、おちゃらけていた金色孔雀^{こんじきくじゃく}も。

「鬼は全てを統括する親分が1体、そして四天王と呼ばれる鬼達、計5体で牛耳られている、そしてその四天王の1体は阿修羅達^{あしゅら}が倒してくれた」

阿修羅達^{あしゅら}は神社での戦いを思い出した、異常に強い鬼、それと同じようなのがあと3体にそれより強いのが1体、部長室に緊張が走る。

「今から言うことを頭に入れて阿修羅達^{あしゅら}と鬼の戦いの結果を聞いて、阿修羅^{あしゅら}は既に日本支部最強だ、そして2番手だけど強さは明白な緊那羅^{きんなら}、そしてこの最強の前衛にホーリナー最強クラスのバックの摩和羅女^{まわにょ}、この3人のグループは恐らく神選10階には及ばないものの、VCSOの各国支部でも最強クラスだ。

そして鬼との戦いの結果、確かに勝った、鬼の群れと四天王を相手にしてだ、しかし摩和羅女^{まわにょ}は背中全体を負傷で重体、緊那羅^{きんなら}は腕を

砕かれ重傷、阿修羅も脇腹と肩を突き刺され重体、分かるな？ 奴らの強さは異常だ」

全員が息を飲む、そして残りの鬼の多さと強さに絶望感が生まれた、いつになく真剣な金色孔雀の顔がそれを物語っている。

「この鬼共を明日殺す」

「ちよつとまてよ、それなら神選10階に頼んだ方が得策だろ、そんなに急ぐ必要があるのか？」

迦楼羅が金色孔雀の提案を拒否した、それくらい今行くということは無謀な事。

「鬼は気付き始めてる、もう時間が無いんだ、神選10階の派遣には1週間以上かかる、このままだと総攻撃をされて日本支部は墜ちる、だから俺達でやるしかないんだよ」

神選10階は任務等が世界全土なタメに要請してから派遣までに時間がかかる、この自体に気付くのに時間を食い過ぎた。

「今回は2人一組で動いてもらう、これは俺が考えられる被害を最小限に抑えるペアだ。」

毘楼勒叉と毘楼博叉、緊那羅と迦楼羅、摩醯首羅と摩侯羅迦……

「……」

当然のペアだ、毘楼勒叉と毘楼博叉は言わずもがな、緊那羅には長年同じ隊の迦楼羅、摩侯羅迦の野生的な動きと連携が取れるのは摩醯首羅だけ、そして……。

「阿修羅と摩和羅女、それに俺だ」

全員驚きの表情を隠せない、金色孔雀こんじきくじゃくが任務に出るのはしょうがない、しかしそれが何故このグループなのかだ。

「俺と阿修羅あしゅろと摩和羅女まわらにょは親分を相手にする、他の奴らは四天王を相手してもらう」

最強の3人と呼ばれた阿修羅達あしゅろでも瀕死だった四天王にたった2人で相手する、全員が息を飲み覚悟した、万が一を。

「って事で今日は前祝いだよ！皆で食事会だ、そこで明日は後夜祭で食事会、遅刻者ないし欠席者は備蓄倉庫の掃除、分かったね？」

全員が返事をする、コレは金色孔雀こんじきくじゃくの遠回しの願いだという事が全員が分かったからだ、そして全員はエレベーターに乗り込んだ。

食堂ではいつもの光景が広がっている、迦楼羅かるらがとった料理を緊那羅きんが横取りし、毘楼博叉びろうはくさが毘楼勒叉びろうりやくさの分までとり、摩侯羅迦まいういかの制御をしながら摩醯首羅まがいしゅらも食べる。

しかし摩和羅女まわらにょだけは違った、阿修羅あしゅろが取り分けた食事すら手をつけようとしない。

「どうしたの？」

「怖いんだ、阿修羅^{あしゅら}や緊那羅^{きんなら}、他の皆がいなくなるかもしれない、もう会えないかもしれない、それが怖い」

「大丈夫よ、私達があつという間に倒して助けに行けば良いじゃない」

「そうだ！そうだな！うん！そうだ！」

摩和羅女^{まわらにょ}は何かがつきれたように食べ始めた、全員が怖い、今隣にいる人が明日にはいなくなってるかもしれない、しかし全員の答えは出ている、勝ち、それ以外の何物でもない。

「阿修羅^{あしゅら}！帰って来たらくれーぷを食べに行こう！緊那羅^{きんなら}もだ！」

「そうね、ゴマの団子も食べたいし」

「邪道じゃないの？」

「邪道も一興」

3人はクスクスと笑った、再び食べ歩きをする事を誓い。

16：前夜（後書き）

ラストスパートです、最後まで読んで頂けたらありがとうございます。

17: テレパシー

Japan shrine

毘楼勒叉びろうりくしゃと毘楼博叉びろうはくしゃは鬼に囲まれている、残りの鬼は全てが神社を拠点として、そこにいる者全てが鬼、力がある鬼をなんとかしても守るタメだ。

鬼達は毘楼博叉びろうはくしゃと毘楼勒叉びろうりくしゃを待っていたかのように集まって来た、二人は腕輪に触れて構える、得物は2本のハンドアックス、名は毘楼勒叉びろうりくしゃが右京、毘楼博叉びろうはくしゃ左京。

「いっぱいいるね」

「量だけで僕達に勝てるのも思ってるの？」

「だとしたら笑えるね」

「アハハハハハハ！」

二人は天使の笑みで笑った、しかし中身は鬼をも恐る悪魔。

「殺し放題！」

「斬り放題！」

「逃げるなら今のうち！」

二人は同時に左右に走った、物凄い勢いで鬼を斬っていく、毘楼勒叉びろうりくしゃが後方に物凄い勢いで右京を投げると血まみれで手元に戻ってきた、否、鬼を貫いた左京が飛んで来たのだ。

二人はテレパシーにも似た意思疎通で相手を見ずに得物を投げて、鬼を殺すのと同時に相手の投げた得物を受け取る、毘楼勒叉びろうりくしゃと毘楼博叉びろうはくしゃしか出来ない高速ジャグリングだ。

「毘楼博叉！楽しい！？」

「楽しいよ！毘楼勒叉は！？」

「最高！血の臭いでむせかえりそうだよ！」

「アハハハ！僕も！」

鬼達は目の前のホーリナーだけではなく、後ろや横から飛んで来る得物を気にしなければいけないので、相手が二人でも思うように動けずにいる。

鬼が戸惑ってるうちに二人の白かった団服は真っ赤に染まっている、真っ赤に染まった顔は無邪気な笑顔を浮かべ、鬼が近づくのを戸惑うくらい異様。

二人が徐々に近づくにつれ鬼が減っていく、最後の一体になった鬼は逃げ出そうとしたが右京と左京が頭に刺さり倒れた。

「しゅーりょー！」

二人が背中合わせでガッツポーズをすると、境内から一番偉そうな坊主が出てきた、二人は笑顔で腕輪に触れて坊主を睨んだ。

「毘楼博叉、ラスボスだぞ」

「ホントだ、死にに来た」

坊主は鬼の死体の中に立ってる二人を見て迷わず鬼と化した、スラッとした人に限りなく近い鬼、鬼は黒い穴から刀を取り出すと構えた。

「何か楽しそう」

「どっちが殺せるか勝負だ！」

「良いよ」

鬼は二人の事を無視して地面を蹴った、毘楼勒叉が横に避けると、
毘楼博叉は鬼の上段からの攻撃を受け太刀する、鬼が一瞬止まった
時に毘楼勒叉が横から走ってきた。

鬼はバックステップで避けるが毘楼博叉が前に踏み出しながら横薙
に払う、鬼が左京を受け太刀すると右京が顔面めがけて飛んで来た。
鬼は片手で得物を持つと右京をもう一方の手でキャッチした。

「ナイスキャッチ」

「アンドがら空き」

毘楼博叉は空いた脇腹をもう一方の左京で斬ろうとした、しかし鬼
は掴んだ右京で受け太刀をしようとする。

「「残念だね」」

右京は銀色の液体になると鬼の手元から消えた、左京は鬼の脇腹に
刺さるが鬼に腕を掴まれて振りきれなかった。

鬼は毘楼博叉の腕を掴んだまま、毘楼勒叉の方に投げ飛ばした。

毘楼博叉は凄まじい勢いで毘楼勒叉に飛んで行くが、二人は目を見
て笑つと、毘楼勒叉が横に少しズレ、右京と左京をひっかけた。

毘楼博叉は毘楼勒叉を軸にしてそのまま鬼に方向転換する。

毘楼博叉は勢いを殺さずに地面を蹴ると、力一杯左京を振り下ろし
た。

鬼は圧されながらも受け太刀すると毘楼博叉を弾き飛ばした。
上空に上がった毘楼博叉の下から毘楼勒叉が現れ、横薙に斬りかか
る、鬼はそれよりも速く毘楼勒叉の肩から脇にかけて斬った。

「クハッ！」

「毘楼勒叉！」

毘楼博叉は鬼に左京を投げて毘楼勒叉から遠ざけると、毘楼勒叉の隣に行った。

「毘楼勒叉！早くこれ飲んで！」

毘楼博叉はポケットから出した水薬を毘楼勒叉に飲ませた、それは医療班が作った血止め薬、生き長らえるための悪あがきだ。

「休んでて、僕がアイツを殺してあげるから」

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ

毘楼博叉の天使の笑顔が禍禍しく歪む、それは身も心も悪魔に染めた神の怒り、始めて怒り溺れた神だ。

「エクスペンション【拡大】」

毘樓博叉びるはくしゃの左京が巨大化する、その大きさは2mをゆうに越える大きさ、しかし毘樓博叉びるはくしゃにかかる重量は全く変わらない。

「死ね」

毘樓博叉びるはくしゃは地面を蹴った、毘樓博叉びるはくしゃは巨大化した左京を振り下ろすが鬼に避けられた、しかし地面が砕けその破片が鬼の体を傷付ける。毘樓博叉びるはくしゃは振り下ろした左京を持ち上げると同時に、もう一方の左京を横薙に払った。

鬼は何か刀で受けるがそのまま境内に突っ込んだ、埃などで鬼は見えないが、相当弱っているハズ、毘樓博叉びるはくしゃは無表情で境内に近付いた。

毘樓博叉びるはくしゃが覗くとそこには何もない、そして毘樓博叉びるはくしゃがそれに気付くのと同時に隠れていた鬼が斬りかかって来た。

毘樓博叉びるはくしゃは巨大化した左京で受けるがあつという間に鬼は後ろに周りこんでいた、鬼は突こうとしたが毘樓博叉びるはくしゃがなんとか受けた、しかし不安定な体制で防御したために体制を崩し、鬼に蹴り飛ばされた。

「クッ！」

毘樓博叉びるはくしゃは境内の壁をぶち抜き外に出た、左京を地面に突き刺しその上に乗ってブレーキをふんだ。

しかし鬼はあつという間に毘樓博叉びるはくしゃの目の前まで来ていた、毘樓博叉びるはくしゃは片手で防御して、鬼を弾き飛ばすとそのまま鬼に左京を振り下ろした。

鬼は左京を避けて、地面に突き刺さった左京の上を走っている、片

方は自分の足場、もう片方は目の前で突き刺さっている、そして今から手を離し新しい得物を出したとしても遅い。

毘楼博叉びろうはくさは逃げる思考回路を無くした時、鬼は何かを見つけて左京から飛び下りた、そして鬼のいた場所をハンドアックスが素通りする。

鬼おにと毘楼博叉びろうはくさがその方向を見ると毘楼勒叉びろうりくさが立っていた、顔には大粒の汗を浮かべている。

「毘楼勒叉びろうりくさ、復活」

「良かったあ、これで一気に有利になったね」

「ふゝん、神域に達したんだ」

「そうだよ」

二人は不気味な笑みを浮かべると横に並んだ、そして先に飛び出したのは毘楼博叉びろうはくさ、毘楼博叉びろうはくさが巨大化した左京を振り下ろすと、既に鬼は上空にいた、毘楼勒叉びろうりくさがもう一方の左京に捕まると毘楼博叉びろうはくさは思いっきり左京を振った。

毘楼勒叉びろうりくさは鬼まで到達すると、空中で素早く斬りあう、そして毘楼勒叉びろうりくさがわざと力を抜いて地面に落ちた時、鬼に向かって巨大化な左京が飛んできた。

鬼は受けるのと同時に強く弾かれ、地面に叩き付けられた。

「「双子を甘くみるな」」

二人は笑顔でハイタッチして鬼を見る、鬼はしぶとく立ち上がり懲りずに走って来た。

毘楼博叉びろうはくさは引き付けて左京を振り下ろす、鬼は避けようとはせずにそのまま左京を掴んだ、そして力任せに左京ごと毘楼博叉びろうはくさを投げ飛ばした。

「えええええ！？」

毘楼博又びろうはくしやは地面に左京を突き刺してブレーキをしてそのまま走って鬼に向かった。

鬼は毘楼勒又びろうりくしやと斬りあっている、純粋に斬りあえば毘楼勒又びろうりくしやは不利だが、双子なら形勢逆転。

毘楼勒又びろうりくしやが口角を上げると鬼はバックステップをした、行き違うように左京が目の前に振り下ろされる。

左京が持ち上がると毘楼勒又びろうりくしやは一目散に走った、そして毘楼勒又びろうりくしやの間合いに入る前に毘楼勒又びろうりくしやは上に跳んだ、毘楼勒又びろうりくしやの足下を左京が通り鬼に斬りかかる、鬼は足を踏ん張って受け太刀をした。

「力持ちだね」

「関心してる場合？」

「違うね」

毘楼博又びろうはくしやが左京を引くと、鬼は毘楼勒又びろうりくしやめがけて走って来た。

毘楼博又びろうはくしやは毘楼勒又びろうりくしやの手前で鬼に左京を振り下ろすが避けられた。

鬼は左京をジャンプして刀を振り上げている、完璧なタイミング、このタイミングならば左京に邪魔されずに毘楼勒又びろうりくしやを斬れる。

しかし鬼は毘楼勒又びろうりくしやを見て顔が引き吊った、毘楼勒又びろうりくしやの右京が左京同様に巨大化している、毘楼勒又びろうりくしやは満面の笑みで鬼に向かって右京を振り下ろす、鬼は受け太刀をするが、後ろから左京が来ている。

「死ねえ！」

鬼は二人の合わさったハンドアックスの真ん中で斬られている、二人は得物を戻すと同時に倒れた。

「双子って便利だね、なんでも共有できる」

「神域もね」

「アハハハ」

「「疲れたね」」

二人は目を瞑った、子供のような寝顔、血で真っ赤に染まった団服を華やかに見せる寝顔がそこにある。

18：脆刃の剣

Japan shrine

摩醯首羅まけいしゅらと摩侯羅迦まこうらかは神社にいる、例の如く二人のホーリナーは鬼に囲まれている、摩醯首羅まけいしゅらは表情が見えないので心境は分からない、摩侯羅迦まこうらかは口を大きく開けている、それが捕食か興奮かは分からない。

二人は同時に腕輪に触れた、摩醯首羅まけいしゅらの得物は槍、名は胤舜、摩侯羅迦まこうらかの得物は鋭い爪と牙、名は狼嚇。摩侯羅迦まこうらかは低い声で唸ると四足になる、摩醯首羅まけいしゅらは低い位置で胤舜を構えると腰を落とした。

「グルルルウ」

「待てないのか？」

「ガウ！」

「なら残さず食べよ、残したら死ぬぞ」

「グワウ！」

摩醯首羅まけいしゅらの合図で摩侯羅迦まこうらかは走り出した、地面を爪でえぐりながら突進する。

一体目は心臓を一突きして殺す、そのまま鬼を投げ飛ばすと右から来た鬼の喉元を掻き切った。

左の鬼は裏拳を放つように喉元を切り裂く、そのまま両手を地面に着き、前方の鬼の顔に噛みつくとそのままえぐった。

摩侯羅迦まこうらかの周りは喉元を切り裂かれた鬼、顔面をえぐられた鬼、心臓にぱっかりと穴を開けられた鬼、どれもが無惨に散らばる。

摩醯首羅^{まけいしゅら}は飛込んだ摩侯羅迦^{まこうらか}をぼーっと眺めている、見慣れた光景、見慣れた朱に染まる摩侯羅迦^{まこうらか}、聞き慣れた雄叫び。

「えげつないな、……………お前も俺の楽しみを邪魔するな」

配合から近付いて来た鬼を何も見ずに射殺した、心臓を一突きされた鬼はぐったりと倒れ込む。

それが合図になったかのように鬼が突進して来た、摩醯首羅^{まけいしゅら}は広い間合いで次々と心臓を突き刺す、キツツキの如く動く槍、それは避ける事も止める事も受ける事も出来ない、キツツキもとい五月雨、出来るは鬼の山。

「グルア！」

摩侯羅迦^{まこうらか}は摩醯首羅^{まけいしゅら}の頭の上から摩醯首羅^{まけいしゅら}の前に飛び下り、摩醯首羅^{まけいしゅら}の鬼をも切り裂き始めた。

「人様の獲物まで盗るな、お前はお前の……………、って終わったのか」

摩醯首羅^{まけいしゅら}が後ろを向くとグチャグチャになった鬼の山、それでも目の前にはグチャグチャになるであろう鬼達。

摩醯首羅はめんどくさくなり摩侯羅迦が戦ってるのを観戦する事にした、凄まじい勢いで鬼が倒れていく、それと同時に摩侯羅迦の体は返り血で濡れる。

摩醯首羅が止まると周りには鬼の死体だけが転がっている、真ん中で爪に付いた血を舐めて綺麗にした。

「摩侯羅迦、大将のお出ました」

「ウウウウウ」

二人の前に現れたのは異常にデカイ鬼、2m50はありそうな巨体に異常なまでの筋肉、二人は気構えた。

「気を付ける、今までの鬼とは違う、今までののが弱だとしたらコイツは鮫だな」

「グルルルウ」

「行くぞ」

「ガウツ！」

摩侯羅迦がスタートすると同時に摩醯首羅もスタートした。

摩侯羅迦は鬼の顔に跳びかかると鬼は手の甲で摩侯羅迦を弾いた、腕が開いた時に摩醯首羅は肩口に胤舜を突き刺すが途中で止まってしまった、理由はその強靱な筋肉。

「そついうこと」

「グルウ！ガウ！」

摩醯首羅は胤舜を引き抜くと摩侯羅迦が再び跳びかかる、鬼は再び弾こうとしたが、摩侯羅迦は腕にしがみつき腕を噛んだ、歯は刺さったが噛み千切る事は出来ない、摩醯首羅が胤舜で摩侯羅迦を鬼から引き離すと間合いを取った。

「キユウウン」

「落ち込むな、アイツの筋肉は異常だ」

「クウン」

「手は考える、それまで動けなくなならない程度に頑張れ、俺もフオローする」

「ワウ」

摩侯羅迦まこうかは地面をえぐりながら鬼に突進した、それに続いて摩醯首まけいしゅ羅も走る。

摩侯羅迦は跳びかからずに足下に潜り込んだ、摩侯羅迦まこうかが足に爪をたてると足は浅く切れた、しかしそれと同時に鬼は摩侯羅迦まこうかを蹴り飛ばす。

摩醯首羅まけいしゅらは思いっきり胤舜で薙払った、一瞬鬼の動きがにぶつたのを摩醯首羅まけいしゅらは見逃さず、一度胤舜を引いて鬼の股を突き刺した。筋肉と筋肉の間に入り込み骨まで達する、鬼は凶太い悲鳴をあげながら胤舜を掴んだ、摩醯首羅まけいしゅらは胤舜を離し再び腕輪に触れた。

「摩侯羅迦！」

「ガウ！」

摩侯羅迦まこうかは鬼の左側から鬼の顔に飛び付いた、右手首を左手で掴み力一杯顔をひつかく、鬼の左目は潰れてもがいている。

鬼は摩侯羅迦まこうかを殴ろうとするが拳を胤舜が遮る、鬼が胤舜を殴ると胤舜は鬼の首に打ち付けられた、鬼は自分の力が強い分首に加わるためダメージは大きい。

摩侯羅迦まこうかと摩醯首羅まけいしゅらは横に並び鬼を睨む、摩侯羅迦まこうかの体は打撲が酷く肋骨等は折れている。

「大丈夫か？」

「クウン」

「奴を倒す方法はあるがお前が危険になる」

「ワウ！」

摩醯首羅^{まけいしゅら}は摩侯羅迦^{まこうか}に説明を始めた、鬼はこれから起こる事に楽しみをつのらせ待っている。

摩醯首羅^{まけいしゅら}の話が進むにつれ摩侯羅迦^{まこうか}の表情が曇っていく、そして終わると同時に摩侯羅迦^{まこうか}は息を飲んだ。

「出来るか？」

「ガウ！」

「悪いな、そしたら合図したらスタートだ」

摩侯羅迦^{まこうか}は全力で鬼に向かって行った、摩侯羅迦^{まこうか}は鬼の懷に潜り込んだ、下から突き上げるように喉元を狙うが軽々と弾かれる、摩侯羅迦^{まこうか}は怯まずに再び跳びかかった、しかし何度やっても同じ事。

摩侯羅迦^{まこうか}は大きく間合いを取ると下から掬い上げるように砂を鬼の顔にかける、鬼は使えない左目に加え砂のせいで右目も見えなくなつた。

「今だ！跳べ！」

「グルア！」

摩侯羅迦^{まこうか}がジャンプする前に摩醯首羅^{まけいしゅら}は右手で胤舜を引いている、左手は先に添える程度、そして摩醯首羅^{まけいしゅら}が向けているのは刃ではなく柄の方、つまり当たっても打撲程度だ。

「エクステンション【延長】」

胤舜を突き出すと胤舜は伸びた、そしてその先にはジャンプしてい

る摩侯羅迦まこうかがいる、摩侯羅迦まこうかは足の裏を胤舜いんじゆんに向けると胤舜いんじゆんに押されるような形になった、胤舜いんじゆんに押されながら鬼に向かっている。

摩侯羅迦まこうかが右手を突き出すと同時に鬼の肩を貫いた、しかし鬼は摩侯羅迦まこうかを掴みそのまま地面に叩き付けた、摩侯羅迦まこうかはそこで意識を失い力なく倒れる。

摩醯首羅まけいしゅらは唇を噛み締めながらポケットに手をつ突っ込んだ、摩醯首羅まけいしゅらが一番恐れていた状態、この状態になった場合の対処法を摩醯首羅まけいしゅらは一番嫌っていた。

「今度は何日かな」

摩醯首羅まけいしゅらはポケットから取り出した薬を飲むと摩醯首羅まけいしゅらの心臓のポンプ運動が急激に速まる、そして胸に手を当ててその場に膝を着いて倒れこんだ。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

強く胸を押さえると吐血した、摩醯首羅まけいしゅらはフラフラになりながら立ち上がると胤舜いんじゆんを構える、意識が飛びそうになるのを必死で堪え、鬼を睨んだ。

「体がもたない、速攻で終らせるぞ」

摩醯首羅まけいしゅらは軋む体を無理矢理押さえ付け、地面を蹴った、振動が加わる度に体がバラバラなりそうになる、呼吸をする度に肺が破裂しそうになる。

内出血した箇所は皮膚から血が流れ出している、体は紅潮して体温は急上昇、この一手を外せば摩醯首羅まけいしゅらは死ぬ。

摩醯首羅まけいしゅらが鬼の懷に潜り込むと鬼は薙払おうとした、しかし摩醯首羅まけいしゅらが鬼の腕を殴ると楊枝のように折れてしまった。

摩醯首羅^{まけいしゅら}は鬼の喉元に胤舜を突き付け鬼を睨んだ。

「エクステンション【延長】」

胤舜が伸びると同時に鬼の頭が軽々と吹っ飛んだ、摩醯首羅^{まけいしゅら}はそのまま倒れると意識を失った。

摩醯首羅^{まけいしゅら}が飲んだ薬、それは筋肉増強剤、しかも短時間で人間のそれを遥かに超える力を得られる、それ故に代償も大きい、ホーリナーといえど1週間は体が動かせない、摩醯首羅^{まけいしゅら}の最長記録は20日、それほどのリスクが伴う薬、脆刃の剣とはこの薬のためにあるようなものだ。

18：脆刃の剣（後書き）

大変です、書き貯めが無くなりかけてます、もうそろそろ終わるの
で根性で執筆しますのでこれからもよろしくお願いします。

19：共振

Japan shrine

迦楼羅かるらは一人で敵に囲まれている、緊那羅神社きんならの屋根から迦楼羅を
観察かんさつしてる、迦楼羅かるらは緊那羅きんならに逆らえず無理矢理放り込まれた。

迦楼羅かるらは毎度の事ながら緊那羅きんならのスパルタは悩みの種だ、緊那羅きんならは
本当に死にかけ無いと手出しはしない。

迦楼羅かるらは腕輪に触れた、得物は鎖鎌、名は首切。

迦楼羅かるらは鎌の方を回しながら鬼を品定する。

「緊那羅きんなら、遊ばない？」

「あんたはこんなか弱い女の子を血で汚すの？」

「（か弱い女の子は屋根の上から観戦なんてしないよ）」

迦楼羅かるらは心に思っても決して口には出来ない、四天王が出てきても
助けてくれない可能性があるからだ。

「迦楼羅かるら、いきまゝす」

迦楼羅かるらは鎌を投げて戻す時に鬼を斬り殺す、次々と上半身だけの死
体と下半身だけの死体が出来上がる、緊那羅きんならは予想通りと欠伸をし
ながら眺めた。

しかし欠伸をしている緊那羅きんならの後ろから忍び寄る鬼、緊那羅きんならは眠そ
うな目をしながら迦楼羅かるらを眺める、鬼が拳を振り上げるが体に鎖が
巻き付く、そのまま鎖に引きずられて地面に落とされた。

「自分の事くらい自分でどうにかしろ！」

「守ってくれるだろうが」

「（可愛くねえ）」

緊那羅^{きんなら}は腕輪に触れた、得物は納刀された刀、名は羅刹。

緊那羅^{きんなら}は屋根の端に立つと体を前に倒した、頭から落ちると腰で羅刹を構える、そして鬼の頭めがけて抜刀した、鬼は体をずらして避けると隣に一回転して着地する、そして並ぶように立ち鬼を睨んだ。

「迦楼羅^{かるら}、終わったか？」

「終わったけどよお、お前少しは緊張感持て」

迦楼羅^{かるら}の鎖は鬼の腕に巻き付いている、そのお陰で緊那羅^{きんなら}は殴られずに済んだ、しかしこれは慣れた事、緊那羅^{きんなら}を極力戦い易くするのが迦楼羅^{かるら}の役目。

「さあて、久しぶりにやりますか」

「私の足を引きずらないでよ」

「分かってるよ」

緊那羅^{きんなら}が鬼の腕に絡まっている鎖を掴んだ、迦楼羅^{かるら}は鎖をほどくと緊那羅^{きんなら}ごと引き寄せた。

緊那羅^{きんなら}は迦楼羅^{かるら}の隣に行くと腰を低くして構える、迦楼羅^{かるら}は分銅を回すと緊那羅^{きんなら}と鬼の両方の動きをうかがう。

緊那羅^{きんなら}は思いっきり地面を蹴るとあつという間に鬼の懷に潜り込む、鬼は拳を緊那羅^{きんなら}に向かって放つが迦楼羅^{かるら}が分銅で弾いた。

緊那羅^{きんなら}は抜刀の鞘走りを利用して、右の脇腹から左肩にかけて切り上げようとする、しかし羅刹は脇腹を軽く斬ると羅刹は鬼の体に食い込んだまま動かなくなつた。

「……………最悪」

鬼は腕を大きく振り上げると緊那羅を殴り飛ばした。

緊那羅は何とか鞘で直接の攻撃を防ぐが体は軽々と宙に浮く、緊那羅の体はあつという間に首切の鎖が巻き付き、迦楼羅の方に引つ張られた。

迦楼羅は飛んで来た緊那羅の体を片手でキャッチすると鬼を睨む、緊那羅は埃を叩き羅刹を納刀した。

「少しは考えて行動しようよ」

「不可抗力だ、それにあんたがいるから無茶出来る、信頼してるからな」

「そこまで言われたら死んでも死なせられないな」

緊那羅は口角を上げて上体を起こす、そして羅刹を抜刀すると右手に羅刹、左手に逆手に持った鞘、これが示すのは緊那羅が本気という事。

緊那羅は地面を蹴ると再び鬼の懷に潜り込む、鬼はサイドステップで避けると緊那羅を真上から叩き潰そうとする、しかし緊那羅軽々と避けると思いつき跳び上がった。

緊那羅は羅刹を思いつき振り上げて鬼の頭に振り下ろした、鬼は右腕で防御するが羅刹が刺さる、鬼は左腕を大きく振り緊那羅を薙払うが左腕は空を切った。

緊那羅は鬼が防いだ瞬間に迦楼羅によって戻されていた、緊那羅が後方に引つ張られてる時に迦楼羅とすれ違う、迦楼羅は首切の鎌で斬りかかった、首切は鬼の太ももに刺さり止まる。

「そういう事、確かに不可抗力だな」

鬼は首切が刺さって動けない迦楼羅を右腕で弾き飛ばした、迦楼羅は首切をしっかりと握っていたために緊那羅が鎖を引つ張り迦楼羅

を引き寄せた。

迦楼羅^{かるら}はなんとか緊那羅^{きんなら}の隣に着地すると息を整えた、緊那羅^{きんなら}の額から先ほど鬼に殴られた時の傷がある、迦楼羅^{かるら}も然り。

「ありえない装甲だな」

「鬼はそんなもんだろ」

「便利な生き物だな」

「憎たらしくただだ」

迦楼羅^{かるら}は軽く笑うと地面を蹴った、緊那羅^{きんなら}は羅刹を納刀すると腰で構え体制を低くする。

迦楼羅^{かるら}は鬼の5mくらい前で分銅を投げる、鬼は顔の手前で分銅をキャッチすりといつの間にか迦楼羅^{かるら}が後ろに回り込んでいた。

迦楼羅^{かるら}は背中に鎌を突き刺した、鎌は例の如く刺さったまま抜けなくなった、迦楼羅^{かるら}は一旦間合いを取り、体重全部を乗せて鎌を殴る。鎌が深く刺さると声にならない悲鳴を上げて、振り向き様に迦楼羅^{かるら}を殴り吹き飛ばす。

「グフッ！」

「ベロシテイ【光速】！」

鬼は緊那羅^{きんなら}の攻撃をギリギリで右腕で防御した、羅刹は鬼の右腕の骨で止まる、左腕を振り上げた鬼は苦しみながらも緊那羅^{きんなら}は睨む、目があった緊那羅^{きんなら}はにつこりと微笑んだ。

「ヤバめ」

最大まで振り上げた時、鬼の左腕に鎖が絡みつき一瞬止まる、その間に緊那羅^{きんなら}は羅刹から手を離し間合いを取る。

鬼は左腕を思いつきり振ると鎌を持った迦楼羅^{かるら}が宙に浮いた。

迦楼羅は人形のように飛ばされると鬼の右手に納まる。

「迦楼羅！」

「来るな！……………大丈夫だから」

迦楼羅は辛うじて空いていた右手で鎌を持ち、鬼の顔に鎌を投げた、鎌は真つ直ぐに鬼の左目に刺さり、鬼は迦楼羅を手放した。

迦楼羅は間合いを取ろうとしたが鬼に左腕腕を掴まれる、鬼は左腕を持ったまま持ち上げる。

バキバキバキバキ！

「グワアアアアア！」

「迦楼羅あ！」

迦楼羅の左腕の骨が碎ける音、緊那羅は怒りに歪んだ顔で走り出す、その間に腕輪に触れて羅刹を抜刀した。

鬼は迦楼羅を離さずに迦楼羅の体を掴んだ。

「……………きん、なら」

「辞めろおお！」

鬼はそのまま左腕と迦楼羅の体を逆方向に引っ張る、迦楼羅の筋繊維が切れる音と共に迦楼羅の左肩から先は引き千切られた。

その瞬間迦楼羅は気を失い、鬼は迦楼羅の体を緊那羅に投げつけた。緊那羅は迦楼羅を受け止めると勢いで吹き飛ばされた。

「迦楼羅！迦楼羅！」

緊那羅は鬼から間合いを取ると迦楼羅に呼びかけた、しかし迦楼羅は苦悶の表情を浮かべたまま動かない、その間でも迦楼羅の肩から

はとめどなく血が流れ出す。

緊那羅^{きんなら}は迦楼羅^{かるら}のポケットから水薬の血止め薬と丸薬の増血剤、丸薬を迦楼羅^{かるら}の口に入れ水薬を流し込むがすぐに吐き出してしまった。

「クソ、高くつくわよ」

緊那羅^{きんなら}は自分の水薬と丸薬を口に含み顔を迦楼羅^{かるら}に近付けた、緊那羅^{きんなら}は顔を真っ赤にしながら迦楼羅^{かるら}と唇を合わせる、そのまま迦楼羅^{かるら}の口に直接薬を流し込んだ。

緊那羅^{きんなら}は顔を離すと顔を真っ赤にして鬼に振り返った、しかし振り返った時には怒りに満ち溢れた表情。

鬼は不気味な笑みを浮かべ左腕が無く横たわる迦楼羅^{かるら}と怒りに満ちた緊那羅^{きんなら}交互に見る。

「許さない、鬼なんて許さない、私の大切なモノばかり奪う、……
…………絶好に殺す！」

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、
ドクンッ、ドクンッ！

「シンパシー【共振】！」
キイイイイイン

耳の奥を直接振動させるような高い超音波のような音が響き渡る、
緊那羅は羅刹を抜刀し構える、音は小さいが鳴り続けている。

「あんたには生易しい死に方は提供出来ない、あんたで奏でてやる」

緊那羅は地面を思いつきり蹴った、懷に飛び込み大きく沈むが鬼の
拳が降ってくる、緊那羅は鞘で防ぐと一瞬音が大きくなり拳が弾か
れる。

緊那羅は弾かれた腕の肘に羅刹を突き刺す、羅刹はやっと切っ先が
刺さったくらいで止まった。

キイイイイイン！

音が辺りを支配し地面がビリビリと揺れる、鬼の肘から先が大きく
揺れ始め、肘から爆発するように千切れた、鬼は地面を揺らしなが
ら図太い悲鳴を上げる。

「振動で破裂させた、あんたは私に触れる事は出来ない」

鬼は大きく悶えながらももう一方の手を振り上げる、緊那羅は鬼を睨んだまま佇む。

鬼の手が緊那羅の横顔を殴ろうとすると羅刹が拳に突き刺さる、再び大きな音をさせると拳が破裂する。

緊那羅は徐々に鬼の血で赤く染まるが、表情は全く変えず鬼を睨み続けた。

「それくらいで騒ぐな、迦楼羅は肩から無い、あんたにもその苦痛、提供してあげる」

緊那羅は鬼の肩に飛び付くと羅刹を肩に突き刺した、高音と共に鬼の肩が破裂し血が吹き出す。

緊那羅はそのまま頭を軸にして反対に行くのと同時に、肩に羅刹を突き刺した、肩は同じように破裂し、緊那羅は飛び下りた。

「まだ意識があるの？鬼の生命力の強さもここまで来ると邪魔でしよ？でもまだ殺さない」

悶え苦しむ鬼を嘲笑うかのように緊那羅はゆつくりと鬼に近付く、鬼の表情は恐怖と苦痛に歪み更に醜くくしている。

緊那羅は手を伸ばせば簡単に鬼に届く距離まで近寄った、鬼は恐怖と苦痛から何も出来ずにいる、緊那羅が羅刹を思いつきり太もみに突き刺すと、太ももは簡単に破裂した。

鬼はバランスを崩し横に倒れると冷たい目で睨む緊那羅を見上げる状態になった、緊那羅は構わずもう一方の足に羅刹を突き刺した、鬼の最後の足も突き刺さるのは切っ先だけが破裂する。

緊那羅は胴体と頭だけの鬼を血まみれな体で嘲笑う。

「可哀想だから殺してあげる、私は鬼じゃないから」

緊那羅^{きんなら}が羅刹^{らかし}を鬼の頭に突き刺すと鬼は胴体だけになり息絶えた、
血まみれの緊那羅^{きんなら}は羅刹^{らかし}に付いた血を振り落とすと納刀した。

「迦楼羅^{かるら}は頼んだわよ」

そう言^いって緊那羅^{きんなら}が走り出すと、どこからともなく救護班^{きうごばん}が現れ、
迦楼羅^{かるら}を手当しはじめた。

19：共振（後書き）

あり得ないくらい遅れてすみません、色々と用事があり投稿が遅れました。

これからも遅いながらもに投稿します、最低でももう一回くらいは続編を出します、それまでは頑張りますのでよろしくお願いします。

20：再生

Japan shrine

阿修羅あしゅらと摩和羅女まわらによは屋根の上から鬼達を眺めてる、下には大量の鬼の真ん中に真っ白なコートに銀髪メガネ、二人の上司であるはずの金色孔雀こんじきくじやくだ。

二人は日頃自分達が頑張っているからお前がやれと鬼の海に付き落とした、阿修羅あしゅらは金色孔雀こんじきくじやくを楽しんで見ている、摩和羅女まわらによは上から鬼の体に針を投げて遊んでいる。

「阿修羅あしゅら、頭だ！100点だぞ！」

「摩和羅女まわらによなら全部100点でしょ？」

「そうでもないぞ、瞳は200点だし海馬は170点だ！」

阿修羅あしゅらは吐き気を覚えた、しかし摩和羅女まわらによも子供、摩和羅女まわらによにとっては走りながらも1ミリのずれもなく当てられる、呼吸をするくらいに容易な事だ。

「摩和羅女まわらによお！俺も助けて」

「摩和羅女まわらによ、助けたら嫌いになるわよ」

「ボス頑張れ！」

摩和羅女まわらによはボスを捨て阿修羅あしゅらを取った、金色孔雀こんじきくじやくは泣く真似をしながら鬼に同情を求めた、しかし鬼にとって金色孔雀こんじきくじやくはただの敵ではない。

「頑張つて」

「応援してるぞ！」

「俺は良い部下を持ったな」

金色孔雀は凹みながら腕輪に触れた、金色孔雀の得物は金色孔雀と同じくらいの金棒、名は碎骨。

「初めて見た」

「初めて見せた」

金色孔雀は大きく碎骨を一振りをする、鬼は上半身だけが無くなり倒れる、碎骨に当たった鬼は異次元に上半身が消えたかのように無くなる、それだけ金色孔雀の一振りが強大という事。

「強いわね」

「……………ずるい」

「何が？」

「あれなら全部300点だ！あんなのルール違反だぞ！」

阿修羅はまだ鬼でゲームをしていた摩和羅女に呆れた、碎骨の棘には肉片がついている、それに阿修羅は吐き気すら覚えた。

摩和羅女の遊びも酷いが金色孔雀の戦い方も酷い、阿修羅には到底足を踏み入れられない世界だ。

あつという間に下にいた雑魚鬼達は肉片と化した、この圧倒的強さが日本支部の支部長たる理由。

「阿修羅、摩和羅女！終わったよ！」

「頑張ったな！偉い偉い」

「今降りる　　！」

阿修羅が気を抜いた一瞬、足下の屋根から太い腕が現れ阿修羅を境

内に引きずりこんだ。

「「阿修羅！」」

中で壮絶な音が鳴り響いている、そして若干建物が傾く、摩和羅女は危険と判断して金色孔雀の隣に降りた。

徐々に境内から埃が立ち込め、境内を覆い隠してきた、その時、大きな爆発のような音と共に阿修羅が壁を突き破って出てきた。

阿修羅は地面に得物、長刀、夜叉丸を地面に突き刺しブレーキを踏んだ、阿修羅は擦り傷がある程度で大きな怪我は無い。

「阿修羅、大丈夫か？」

「大丈夫よ、室内だから戦い難かっただけ」

「あらら、出てきちゃったよ」

金色孔雀の一言で二人が壊れた境内の方を見ると、再び爆発のような音と共に鬼が出てきた、2mくらいの筋肉が浮き上がった鬼、鬼が地面に足を着くと同時に大きな境内は崩れ落ち、小さな瓦礫の山と化した。

鬼は空中に出来た小さな黒い穴に手をつ込むと何かを掴み引き抜いた、得物は大斧、鬼と同じくらい大きな斧。

「さてと、俺達でボコボコにしちゃいますか」

金色孔雀は肩に碎骨を担ぎ状態を低くする、阿修羅は切っ先を斜め下に向け背筋を伸ばした、摩和羅女は両手の指の間に3本ずつ針鬼を挟んだ。

「鬼に金棒とはこの事だね」

「ボスが鬼ならね、間違ってもバンパイアにニンニクと同じような

意味じゃないわよ」

「……………そうなんだ」

金色孔雀がダメージを受けていると鬼は、瓦礫の山を大斧で弾くと阿修羅達めがけて木や瓦が弾丸のように飛んできた。

「摩和羅女、頼んだわよ」

「了解！」

摩和羅女は無数の針鬼を投げると全てを打ち抜き砕け散った。それと同時に阿修羅と金色孔雀が地面を蹴った、阿修羅の方が速く先に鬼に斬りかかる、鬼は軽々と大斧の刃の平面で防いだ。

阿修羅はそのまま押そうとはせず、バックステップで鬼から遠ざかると、阿修羅の頭の上から碎骨を振り上げた金色孔雀鬼の方へ飛んできた。

金色孔雀は碎骨を思いっきり振り下ろすと、鬼は阿修羅の時と同じように受け太刀するが、碎骨の重さに押されて片膝を地面に着いた。金色孔雀はジリジリと鬼を追いつめていく、鬼が粘りピタッと止まった時、横から針鬼を構えた摩和羅女が両腕を大きく振ると一瞬で鬼の急所を貫いた。

金色孔雀は仕留めたと思い鬼から遠ざかる、しかし鬼は何事も無かったかのように立っている。

「摩和羅女、本当に急所をついたの？」

「当然だ！一瞬で死んでるハズなのに……………」

「まあ鬼だからね、急所が人間と違ってても不思議じゃないでしょ」

金色孔雀が二人を無理矢理納得させて構えた、阿修羅はため息を吐き再び構える、摩和羅女はそんな事はあるまいとブーブー文句を言いながら構えた。

「はあ、急所が無いなんて、…………でも、急所が無くても斬り刻めば死ぬわよね？」

「やっぱりグシャクシャでしょ」

「蜂の巣だ！」

先に飛び出したのは金色孔雀^{こんごうきくじやく}、そして摩和羅女^{まわらにょ}は横に走る、阿修羅^{あしゅら}は切っ先を後ろに向けて深く沈んだ。

金色孔雀^{こんごうきくじやく}は碎骨で横薙に払う、鬼は斧で防ぐが体制を崩した、金色孔雀^{こんごうきくじやく}も碎骨弾かれる、否、そのまま切り返し上段から振り下ろした。

鬼は持ち堪えたが横からは摩和羅女^{まわらにょ}が構えている、摩和羅女^{まわらにょ}は出来るだけ多くの針鬼を放つ、人間の急所や急所に成り得る場所、その他諸々を貫く、しかし鬼は顔色一つ変えずに碎骨を受け続けた。

「ボス、行くわよ」

「えっ、嘘！？ちよっとヤバいつて」

「ベロシティ【光速】！」

金色孔雀^{こんごうきくじやく}が横に避けたギリギリの所を阿修羅^{あしゅら}が横切る、夜叉丸は鬼の腹を捉えると豆腐を切るように綺麗に振り抜いた。

鬼の体は上半身と下半身で綺麗に別れ、上半身は地面に落ちる、下半身は地面に確りと足を突き、断面は天を仰いでいる。

「ちえ、結局阿修羅^{あしゅら}か」

「摩和羅女^{まわらにょ}はまだマシだよ、俺なんて一発も当たって無いよ」

「はあ、倒せたんだから良いで」

阿修羅^{あしゅら}は斬れた鬼を横目で見て固まった、鬼の下半身の断面は泡が噴いたように膨らみ、泡は徐々に大きくなる。

そしてそれは消えた上半身を形成しはじめた、1分も経たない内に泡は体の形を成す、泡が弾けるのと同時に鬼は元の体に戻った。

「鬼って便利なんだね」

「今までアタシ達が戦ってきた鬼は違ったぞ」

「はあ、それより、この鬼どうやって殺すの？」

金色孔雀こんじきくじゃくと摩和羅女まわらにょは真剣な顔付きで考えている、阿修羅あしゅらは考える前に諦めの方が早かった、斬って駄目なら粉々にするしかない。

「何を考えている？」

「喋った！」

鬼が喋った事に金色孔雀こんじきくじゃくと摩和羅女まわらにょはあり得ないくらいビクリしている、しかし阿修羅あしゅらは冷静だ、人間に化けれるのなら喋れてもおかしくはない、緊那羅きんならの鬼が良い例だ。

「私は殺しても死なない、原子単位で粉々したんなら話は別なんだがな」

「じゃあ粉々にするまでね」

「どうやって？」

「ボスのその金棒で擦り潰すってのはどう？」

鬼は大口を開けて笑い始めた、太い声は阿修羅達あしゅらの体をビリビリと振動させる。

「それくらいでは死なない、それに私はまだ力を出しきっていない、私が本気を出せば君達の勝目はゼロだ」

「じゃあ俺達も本気出そうか」

「そうね」

阿修羅^{あしゅら}は右手で夜叉丸を持ち、腕を力を抜いて垂らす、体を揺らしながら前に倒した、倒れそうになりながら足を前に出し地面蹴る。阿修羅^{あしゅら}は鬼の懷に潜り込むと体ごと腕を振る、遠心力を付けて素早く斬りつけた、鬼は避けようとはせずに腕を一本落とした。

「痛くない！それくらいで私を殺せると思うな」

鬼は無くなった左腕を気にせず、大斧を右腕一本で持ち阿修羅^{あしゅら}を横薙に払う、しかし大斧は阿修羅^{あしゅら}に触れる前に碎骨に当たった。

「俺の阿修羅^{あしゅら}は傷付けさせないよ」

「はあ、いつから私がボスのモノに？」

「出会った時から」

「おい、それで防いだつもりか？」

鬼は右腕一本で強引に振り抜いた、金色孔雀^{こんぎくけう}と阿修羅^{あしゅら}は軽々と吹き飛ばされ、鬼の目は摩和羅女^{まわらご}に向けられた。

摩和羅女^{まわらご}は阿修羅^{あしゅら}を吹き飛ばした鬼を怒りの目で睨む。

「君は接近戦は苦手だろ？」

摩和羅女^{まわらご}は黙ってしまった、そして一瞬目を反らし、再び鬼に目をやった瞬間既に鬼はいなくなっていた。

「摩和羅女^{まわらご}後ろ！」

摩和羅女^{まわらご}は後ろを振り向くと大斧を振り上げた鬼がいる、不適な笑みを浮かべ、そのまま振り下ろした。

若干体を後ろに反らしたお陰で刃先だけが当たったが危険な事に変

わらない。

「よくも俺の可愛い部下を傷付けてくれたね」

倒れた摩和羅女まわらによを眺めてた鬼の後ろにはいつの間にか金色孔雀こんじきくじゃくが周りをこんでいた、金色孔雀は碎骨を鬼の頭上から振り下ろす。

鬼は頭と胴体がグチャグチャになり、両腕と両足だけがその場に落ちた。

金色孔雀こんじきくじゃくは急いで摩和羅女まわらによを担いで遠ざける、そして鬼から見えない所に置き止血剤を飲ませ阿修羅あしゅらの基へ向かった。

鬼の体は腕から徐々に体を形成しはじめてきた。

「はあ、これじゃあきりがないわよ」

「あの再生してる質量は何処から来てるんだよ？」

「さあ？鬼だからね」

「まあ、鬼だもんね」

二人は鬼という事だけで納得した、そして鬼は完璧に体を元に戻すと嘲笑うような目で二人を睨む、それに警戒をして二人が構えた瞬間、目の前から消えて気付いた時には二人の後ろで大斧を振り上げている。

阿修羅あしゅらは反応しきれなかった金色孔雀こんじきくじゃくを蹴り飛ばし、鬼の上段からの攻撃を受け太刀した。

しかし力の差は歴然、徐々に押され始めた時、倒れていた金色孔雀こんじきくじゃくが鬼を払おうとした。

「甘い」

鬼は片手で碎骨を止めると大斧を阿修羅あしゅらから離し、金色孔雀こんじきくじゃくの脇腹めがけて振った、碎骨で防ぐ暇も無く、ギリギリのところで腕輪で防いだがそのまま豪快に吹き飛ばされ、瓦礫の山に埋もれてしまっ

た。

「最後は君だけだ」

「許さない」

「だからどうした？」

「許さない」

「許さないとどうなるんだい？」

「許さない」

「鬼の私でも会話ができるのに人間の君は会話も出来ないのかい？」

ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、
ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ、ドクンッ！

「アブソルペーション【吸収】！」

阿修羅^{あしゅら}は腕をだらんと垂らして、いつものように体を揺らしながら倒し、地面を蹴った。

あつという間に鬼の懷に潜り込むと素早く斬りつける、鬼は阿修羅あしゅらの素早さに若干圧おさされるがギリギリで防いだ。

夜叉丸は弾かれ、阿修羅の背後を通り、右手から左手に移されながら、空きの鬼の右腕を斬りつけた。

「まだ分らないのか？ 私は不死
ズズズズズズ」

！
」

夜叉丸が血をすすするような音をたてると、鬼の左腕は徐々に干からびてきた、そしてそれと同時に夜叉丸が黒みを帯てくる。鬼は慌てて阿修羅あしゅらから離れるが、左腕は干からびたまま。

「何をした!？」

「貴方の霊体を吸つたの、自然に生きるモノや死んで現世をさ迷うモノ、全てに流れる霊体をね。

いくら貴方でも霊体が無ければ再生は出来ないでしょ？」

鬼は苦虫を噛み潰したような顔をした、それが示すのは凶星、そして焦り。

初めて覚えた恐怖というモノに若干たじろいだその時、阿修羅は懷あしゅらに潜り込み、そのまま腹に夜叉丸を突き刺した。

ズズズズズズ

「死というモノに追われるのを楽しみなさい」

「辞めろ！やめろ、ヤメロ、……ヤ……メ……」

鬼はミイラのようになり夜叉丸から落ちた、そして阿修羅あしゅらが一息ついた時、パチパチと手を叩く音が、音の主を捜すと瓦礫の山の上で赤黒いローブを着た男性が一人。

「やはり本物か」

「貴方は……………」

阿修羅あしゅらはこの男性に一度会った事がある、そしてこの男性から阿修羅あしゅらの全てが狂った、この男性のせいで天獅子小町という人間が消えた。

「……………帝釈天たいしゃくてん」

「懐かし名前だ、しかし時代は移ろい行くモノ、お前が天獅子小町から阿修羅あしゅらになったように。」

俺の名前はルシファー、今ココから始まる、お前達ホーリナーへの
反逆がね。」

20：再生（後書き）

あと2話で最終回です、当初の意気込みとは裏腹にグダグダになってしまいました、まだ続きます。

今回の霊鬼編は序章にしか過ぎません、次回から加速して行きます。

21：第1階

J a p a n s h r i n e

「ルシファー？」

ルシファー、それは悪魔の中でも最上級の悪魔、それに阿修羅あしゅろと初めて会った時の白いコートもカミウムマーンの刺繍もない、その代わりに血のように赤黒いローブを着ている、そのローブの色と鋭い目付きで怪しさが増す。

帝釈天たいしゃくてんもといルシファーは静かに立ち上がった、阿修羅あしゅろは警戒して構えたが、あつという間に目の前にルシファーが来て腕を掴まれた。

「俺と一緒に来い、お前が必要だ」

「嫌よ」

阿修羅あしゅろはルシファーの手を振りほどいて間合いを取った、腕の力を抜き構える。

ルシファーはため息をつきローブの下から腕輪を覗かせた、しかしその腕輪はホーリナーのモノとは異なる形をしている。

ルシファーは腕輪に触れた、得物は大剣クレイモア、名は髭切。

「お前の血が必要だ、千切つてでも連れて行く」

「貴方達はバンパイアなの？」

「お前の血のタメならバンパイアも一興だ」

阿修羅あしゅろは鼻で笑うと倒れるように地面を蹴った、ルシファーは顔色一つ変えずに阿修羅あしゅろを眺める。

阿修羅^{あしゅら}は体全体を使って、ルシファアの左側から横薙に斬りつける、ルシファアは軽々と夜叉丸を弾くが、阿修羅^{あしゅら}はそのまま左手に持ち変えルシファアの右側から斬る。

寸前まで阿修羅^{あしゅら}は髭切に注意していたが、ルシファアは左手に持ったまま、阿修羅^{あしゅら}が口角を上げて右腕を斬ろうとしたが、何故か髭切に阻まれた。

左手には髭切が握られたまま、しかし右手にも髭切が握られている。

「あり得ない、何で二振りも？」

「神の決めた摂理など悪魔には関係ない」

ルシファアは左手に持った髭切を振り上げた、阿修羅^{あしゅら}は逃げようとしたが腕を掴まれ全く動けない。

「ベロシテイ【光速】！」

金属音と共に緊那羅^{きんなら}が阿修羅^{あしゅら}と髭切の間に体を入れた。

「ありがとう、助かった」

「それより何で帝釈天^{たいしゃくてん}が？」

「久しぶりだな緊那羅^{きんなら}、今は帝釈天^{たいしゃくてん}ではない、ルシファアだ」

「ルシファア？ あんた悪魔に堕ちたの？」

「そんなもんだな」

緊那羅^{きんなら}は舌打ちをしてルシファアを蹴って阿修羅^{あしゅら}と離れた、緊那羅^{きんなら}は羅刹を抜刀して構える、阿修羅^{あしゅら}は体の力を抜いて構えた。

「俺は緊那羅^{きんなら}には興味が無い、阿修羅^{あしゅら}が欲しい」

「それなら尚更退けないわね、悪魔に堕ちたあんたなんかには絶対に渡さない」

「まあ良い、緊那羅きんなんらは殺せば良いだけだ」

大剣を両手に持って不適に笑うルシファー、不気味の何者でもない、神の造った摂理を全く無視した得物、全てが未知数だ。

「シンパシー【共振】！」

キイイイイン

「アブソルペーション【吸収】！」

「面白くなりそうだな」

不気味に唸る羅刹、黒みがかり血に飢えた夜叉丸、先に地面を蹴つたのは緊那羅きんなんらだった、その後ろを追うように阿修羅あしゅらが走り出す、ルシファーは全く動じる事なく他人事のように二人を眺める。

緊那羅きんなんらの横薙の斬撃をルシファーは防ぐが、物凄い振動と共に弾かれた。

「面白い神技だな」

ルシファーに出来た若干の同様の隙に夜叉丸がルシファーの右腕を傷付けた。

ズズズズズズ

ルシファーの腕が干からび夜叉丸が黒みを帯びる、ルシファーは流石に危険と考えバックステップで間合いを取った。

「なかなかやるな」

「帝釈天たいしゃくてんも弱くなったのね、私の全く届かない存在だと思っていたのに」

「私達二人だし」

「強くなつたしね」

「そんなに愉快か？」

ルシファアはクスクスと笑い始めた、そして左腕一本で髭切を持つと怒りに満ち溢れた表情で二人を睨んだ。

「お前ら、調子乗るな」

「負け惜しみか？見苦しいから辞め、ぐふえっ！」

ルシファアは一瞬で消えて、次に現れた時には緊那羅きんならを蹴り飛ばしていた。

二人が全く反応出来ないスピード、緊那羅きんならは地面に倒れるいつの間
にルシファアを見上げていた、またあり得ないスピードで移動したきたのだ。

「弱い、弱すぎる」

「緊那羅きんなら！」

ルシファアは羅刹ろくしやくを握り緊那羅きんならの肩を貫き地面に突き刺さる。

「グワアアアア！」

先ほどの蹴り一発で体の骨が何本か折れた上に羅刹が突き刺さった肩、痛みなどで意識が飛びそうになるのを堪えるが、今は指一本動かすのもやっとだ。

「そのままでは生かしてやる」

ルシファアは緊那羅きんならに背を向け阿修羅あしゅらに向かって歩きだした、阿修羅あしゅらは夜叉丸を両手でしっかり握り八相に構える。

「チェンジ【転化】！エミッション【放出】！」

阿修羅^{あしゅろ}が夜叉丸を横に払うと真つ黒な刃がルシファーに向かって飛ぶ、夜叉丸は元の色に戻っている。

ルシファーは髭切で軽々と黒い刃を弾くと阿修羅^{あしゅろ}を睨んだ。

「それで終わりか？」

「あり得ない、強すぎる」

ルシファーは口角を上げると一瞬で阿修羅^{あしゅろ}の目の前まで移動した、そして阿修羅^{あしゅろ}の足に髭切を突き刺す、阿修羅^{あしゅろ}は叫びながらその場に倒れた。

「ハア、……ハア」

「腕が動くな」

ルシファーは髭切を振り上げ阿修羅^{あしゅろ}の腕に狙いを定めた、阿修羅^{あしゅろ}は諦めて目を瞑り覚悟した。

「ベロシテイ【光速】！」

閃光がルシファーに襲いかかる、ルシファー振り上げた髭切で何とか防ぐが力で押し負け吹っ飛んだ。

「誰だ！？もう動ける奴はいないハズだ」

「俺ツスか？俺は神選10階、第1階、太陽神のヘリオス、カミウムマーンの命に來たんスけど、大物が釣れたみたいツスね」

神選10階の太陽神ヘリオス、小麦色の肌に金色のハネツ毛で前髪だけは上がっている、真っ白なダウンベストの右側にカミウムマーンの刺繍、紺色のポケットの多いハーフパンツ。
得物は刀身の広い片手剣、名はレーヴァテイン、半身になりレーヴァテインを波打つように動かしている。

「鬼がいるって聞いたんスけど、悪魔がいるとは思わなかったツスね」

「神選10階か、楽しめそうだな」

「インフェルノ【烈火】」

レーヴァテインが激しく燃え始めた、それと同時にヘリオスは地面を蹴る、素早い動きでルシファーに近付くと素早い剣筋でルシファーに斬りかかる、ルシファーは若干顔をしかめ受け太刀した。

「俺に防御は通用しないツスよ」

レーヴァティンを受けた髭切が徐々に溶けてレーヴァティンがめり込んでいく、ルシファアは髭切から手を離しヘリオスから間合いを取った。

「片腕が使えないから不利だ、一旦退かしてもらおう」
「もう来なくて良いッスからね」

ルシファアは空中に出来たら黒い穴に吸い込まれるように入ってしまった、ヘリオスはレーヴァティンを戻すとそのまま何処かへ走り去って行った。

残されたのは瓦礫の山と血まみれのホーリナー達、しかし阿修羅あしゅろはそんな事より神選10階の強さに惹かれていた、あれ程強く感じたルシファアを軽々と撤退させる異常なまでの力、それが10人もいる、まさに怪物の集まりだ。

Fin：食べ歩き

J a p a n c e t e r o f T o k y o

「「「おいひい！」「」」

口の端にクリームを付けて叫ぶ阿修羅、緊那羅、摩和羅女、任務を早く切り上げて食べ歩きにくり出していた。

鬼との戦いで勝ったがホーリナーの殆どが重傷、重体に至る者まで出た始末、この事件は全世界のVCSOの耳に入った。

その中でも注目を集めたのが阿修羅と緊那羅、神域の段階2に到達したのが2人もいるということで神選10階も注目している。

しかし二人はあまり喜ばしい事実ではない、悪魔たった一人に二人は惨敗、阿修羅に至っては目の前で神選10階の強さ見せ付けられた、それなのに最強だなのと言われてもただの苦痛にしかならない。

今日は半日の自由が約束されている、だから3人は滅多に無い休暇を思いっきり楽しんでる。

「阿修羅、団子があるわよ」

「ホントだ、この前はろくに食べてもらえなかったから今日はしっかりとゴマを食べてもらうわよ」

「じゃあアタシが貰ってくるぞ！」

「摩和羅女、分かっているよね？持っただけ持っただけ！」

摩和羅女はビシッと敬礼のポーズをして団子屋に入って行った、暫

くするとフラフラしている摩和羅女が帰ってきた。

両手と頭に乗せたお盆には山盛りに団子が積まれている、恐らく店にある団子を殆ど持ってきたのだろう。

阿修羅は見かねて頭のゴマ団子の山を取った、緊那羅は右手のあんこ、摩和羅女に残ったのはみたらしだけ。

「緊那羅があんな事言うからこんなに持ってきてきちゃったじゃない」

「べふにひいんふあない（別に良いんじゃない）」

「阿修羅！ゴマ美味いぞ！」

「当たり前でしょ」

緊那羅は色々な団子取っ替え引っ替え口に放り込んで、摩和羅女は食べ終った串を投げて的当てをして楽しんでいる、阿修羅は静かに着々と食べながら二人の暴走をセーブするので精一杯。

「阿修羅、緊那羅、どーなつって何だ？」

「あんたドーナツも知らないの!？」

「ドーナツは穴の空いた美味しいモノ」

「美味しいのか!？」

「かなりね、だから調達よろしく」

摩和羅女は敬礼してドーナツ調達に走った、緊那羅はホーリナーの特権と摩和羅女を使うのだけは達人クラスだ。

「阿修羅、それいらならもらうよ」

「あつ！ちよつと！」

「いただきます」

緊那羅は阿修羅の残していた最後の団子を一口で食べた、阿修羅は泣きそうな目で緊那羅の持っている串を見た。

「悪かった、ゴメン、な？」

「……………隙あり！」

阿修羅は緊那羅が残していたあんこの団子を奪い一口で食べた、勝利に満ちた表情で緊那羅を見ると緊那羅はうつ向き震えている。

「これでチャラよ」

「返せ！私の団子返せ！」

緊那羅は阿修羅の頬を掴んで引つ張った、阿修羅も緊那羅と同じ事を言いながら緊那羅の頬を掴み引つ張る。
二人が団子団子と言いながら頬を引つ張っていると、再び両手と頭にお盆を乗せ大量のドーナツを持った摩和羅女が出てきた。

「何やってるんだ？」

「団子食べられた！」

泣きそうな顔で両頬を腫らした二人がハモった、摩和羅女はクスクスと笑い始めると頭のお盆今にも落ちそうになる。

「「危ない！」」

「えっ？うわあ！」

お盆は大きく傾き摩和羅女の頭から滑り落ちた、阿修羅と緊那羅は頭から飛び込む、ドーナツは地面に落ちるのを免れ阿修羅と緊那羅の体の上に落ちた。

「凄い、凄いぞ！」

「ありがとう」

「はあ、今本当にホーリナーで良かったと思ってる、こんなの他人に見られたら最悪」

二人は体に落ちたドーナツをお盆に乗せてそれを阿修羅あしゅらが持つ、緊那羅きんならは摩和羅女まわらにょから一つお盆を貰いドーナツを頬張った、摩和羅女まわらにょも恐る恐るドーナツを口に入れた。

「ほう、ふあわわほ？（どう、摩和羅女まわらにょ？）」
「美味しい、美味しい、美味！」

摩和羅女まわらにょは次々にドーナツを口に放り込む。

「うぐっ！」
「摩和羅女まわらにょ、どうした？」
「もしかして詰まらしたの！？」

摩和羅女まわらにょは苦しそうに首を縦に振った、緊那羅きんならは阿修羅あしゅらにお盆を持たせ飲み物を探しに行った。
1分もしない内に戻って紙コップを持って戻って来た、緊那羅きんならはそれを摩和羅女まわらにょに渡すと摩和羅女まわらにょは一気に飲み干す。

「ぶはあ」
「はあ、焦らせないでよ」
「ひくっ！……ひくっ！」
「摩和羅女まわらにょ、どうしたの？」
「あ、ヤバ」

緊那羅きんならは持ってきた紙コップの匂いをかいで苦笑いを浮かべた、阿修羅あしゅらは紙コップを受け取り匂いをかく。

「ちょっと摩和羅女！これって……………」

「ビルだな」

「あひゆらあ！きんにやらあ！なんきやたのしいぞ！」

摩和羅女はお盆を投げ出して走り始めた、阿修羅と緊那羅もお盆を投げ捨てて摩和羅女の跡を追う。

摩和羅女はスキップするように走りながら腕輪に触れた、得物は暗器の針、名は針鬼。

「阿修羅、もしかして……………」

「はあ、人間での当て？」

阿修羅と緊那羅も腕輪に触れる、得物は長刀と納刀された刀、名は夜叉丸と羅刹。

「さいひよはひとみでにひやくちえん！」

「阿修羅！そつち！」

「ベロシティ【光速】！」

阿修羅は針鬼を先回りして弾き飛ばした、酔っていても命中力は全く落ちない。

「緊那羅！」

「ベロシティ【光速】！」

今度は緊那羅が針鬼を打ち落とす、たった一杯飲んだだけでコレだけの殺人鬼と化す摩和羅女、ある意味ビンゴブックSクラスだ。

「阿修羅！」

「ベロシテイ【光速】！」

「ベロシテイ【光速】！」

「ベロシテイ【光速】！」

「ふぁいやーわーくす【花火】」

「無理よ！」

ベンチにスヤスヤ眠る摩和羅女まわらによ、その下で死にかけている阿修羅あしゅらと緊那羅きんなら、辛うじて摩和羅女まわらによの針鬼は誰にも当たらなかったが二人の疲労は著しい、神技の連発と人を守る事による疲労だ。

「あらら、皆お疲れだね」

「はあ、ボスカ、何で此所に？」

「協力者から情報でホーリナー3人が暴れてるって聞いたからさあ、やっぱりボスカとしてこれは始末しなきゃいけないだろ？」

「全部摩和羅女まわらによのせいだ」

「連帯責任、連帯責任」

金色孔雀こんじきくじやくは車を呼んで3人を車に押し込んだ。

J a p a n V C S O J a p a n b r a n c h o f f i c e

阿修羅達^{あしゅろ}3人は摩和羅女^{まわらにょ}の後始末のタメに多目的スペースの上、以前に緊那羅^{きんなら}のせいで連れて来られた場所、拷問スペースと呼ぶ者もいるような所に連れて来られた。

「はあ、またやるの？」

「当たり前でしょ」

「あんたいつか絶対に殺す」

「恐いなあ、何もしなきゃ良いだけなのに」

「ゴメンな！アタシのせいでゴメンな！」

摩和羅女^{まわらにょ}が必死に謝るが二人にはそれをフォローする余裕もない、これから始まる恐怖と増えるトラウマ、それを考えたら他人の事など考える余裕など無くなる。

「それじゃあよろしくね、備蓄倉庫の整理」

金色孔雀^{こんせきく}は3人を蹴り飛ばすように備蓄倉庫に入れると、扉を閉めて鍵をかけ電気を付けた。

「「「イヤアアア！！」」」

T
o
b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
d

Fin：食べ歩き（後書き）

何とか最終回を迎える事が出来ました、この話が基礎になって次回に続きます。

今回幾つかのキャラクターに付加されてる‘神徳’、無理矢理のこじつけでは無く本当にあります、それも実際の通りにまんまです。

次回作も読んでいただけたら幸いです。

評価やアドバイス、コメントやダメ出し等を頂けると次回作の励みになります。

では次もよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8454a/>

修羅の巫女1 《霊鬼編》

2010年10月28日07時29分発行